いじめっ子の笑い話

～かげこの玉手箱３～

anurito

目次

いじめっ子って悪くない？　～いじめっ子が憎い全ての人へ～
序 3
その 1 4
その 2 5
その 3 6
その 4 7
その 5 8
その 6 9
その 7 11
その 8 12
その 9 13
その 10 14
その 11 16
その 12 17
その 13 19
その 14 20
その 15 21
その 16 22
その 17 23
その 18 24
その 19 25
その 20 26
その 21 27
その 22 28
その 23 29
その 24 30
間（ インターバル ） 31
その 25 ～ その 39 32
結び 35

いじめっ子の笑い話
はじめに 39

教訓 40
いじめの真実 46
いじめをする理由（ わけ ） 57
いじめっ子の末路 67
たくましい被害者 74
人ごとじゃない 78
大した教育家たち 84
いじめっ子に明日はない 94
いじめっ子カースト 101
あとがき 112

「いじめっ子カースト」のロジック
「いじめっ子カースト」の始まり 117
善悪の彼岸 119
いじめのパラドックス 121
目には目を！ 123
全ては同格である 125
子供たちのいじめ 127
メディアを悪者扱いする件 129
いじめられるのは運が悪い？ 131
資本主義の問題点 133
リンチ行為が正当な訳 135
なぜ、加害者が許せないのか？ 137
いじめの連鎖 139
加害者の多様性 141
「悪い加害者」の選別 143
加害者の事はいじめてもいい根拠 145
自分知らずのいじめっ子 147
「良い加害者」を救済しよう 149
正しい償い方 151
「いじめっ子カースト」の極意 153
現代人の生き方 155
「いじめっ子カースト」の標的 157

いじめっ子って悪くない？　～いじめっ子が憎い全ての人へ～

序

ニュース報道されるいじめ自殺の話を見て、加害者（ いじめっ子 ）が悪いと思うのなら、まず、過去に自分がいじめた被害者に対しても詫びるべきである。
自分が行なったいじめは被害者の方に原因があると考えたいのならば、いじめ自殺のニュース報道を見ても、これは被害者に落ち度があったんだと、周りの人間へは、自分の意見として主張すればいい。
自分のしたいじめは被害者に原因があって、他人のしたいじめは加害者が悪い、などと考えようとするのは、あまりにも都合が良すぎるのである。

その１

- いじめられる奴と言うのは、どいつも、どこか似たような特徴がある。つまり、そいつ自身に、いじめられるような原因があるのだ。そんな奴は、どこへ行っても、相変わらず、いじめられているはずだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「おまえ、視野が狭すぎだろ
転校したら、いじめられなくなったやつもいるし、
小学の頃はいじめる側だったのに、中学に入ったとたん、いじめられる側に転落したやつもいたぜ
いじめられる側に原因があるという説を信じたいあまり、
おまえは、自分に都合のいい話しか見えてないんだよ」

「バイキンなどのあだ名をつけたりしますが、いじめっ子の中には、いじめられっ子がクサいからいじめると言う人もいるみたいです。ただし、テレビで聞いた事があるのですが、嫌いな人の匂いはクサく感じるものなんだそうです。いじめられている子がクサいのではなくて、いじめっ子が嫌っているから、クサいように思えているだけなのかもしれませんね。いじめられっ子に共通の特徴があるように感じられるのも、きっと、いじめっ子の錯覚なんじゃないかと思います。」

その 2

- いじめと言うものは、集団の中で発生した事故みたいなものである。だから、いじめられているヤツも、傍観していたヤツも、全員に原因があるのであって、いじめた人間だけを悪者扱いするのは正しくない。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「いじめが事故だと言うのなら、犯罪が起きるのも事故だし、テロや戦争だって事故だと言えるのかもしれないな。でも、たとえ事故だろうと、犯罪者もテロリストも戦犯も罰を受けるんだから、いじめの加害者も罰せられるのが当然なんだよ。誰が悪者なのかではなくて、事故処理の一環として、加害者は罰を受けなくちゃいけないんだよ。それが、学校のいじめだけは、加害者たちは、十分な事故処理の責任を果たしてないから、ネットで名前を晒してやりたくなるほど、みんなは腹を立てるんだよ。分かる？」

その 3

- そもそも、子供はまだ精神状態が未熟なのだから、いじめをしても仕方ないのであり、もっと大目に見てあげよう。大人になれば、きちんと成長して、いじめ（ 不良行為 ）も止めてくれる。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「未熟だから、きちんとしつけていかなくちゃいけないんだろ w
親や教師が、大目にみて、とか言ってるようだと終わってるなw」

その４

- いじめっ子自身も、家庭に問題があったり、先輩からいじめられていたり、何らかの辛い思いをしていて、そのせいでいじめ（ 不良行為 ）をしてしまうのかもしれない。いじめっ子も本当は可哀相なのだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「いじめっ子の事を可哀想だと言う前に、いじめられた子の事を可哀想だと言えよ。順番が間違ってるだろ？」

「「いじめっ子」が可哀想なんじゃない。別の要因の被害者だから、その点では「可哀想」なんだ。でも、だからって、可哀想だから、いじめをしても大目に見てやれ、と言う理屈には繋がらない。可哀想だろうが、なんだろうと、いじめをした責任は、その本人に問わなくちゃいけないんだ。厳しく聞こえるかもしれないけど、そうしないと、可哀想な人間なら、いくら悪い事をしても許されると言う話になってしまう。
　いじめっ子が可哀想な境遇だったとしても、その子自身が自主的に行なった悪事（ いじめ ）とは切り離して、考えなくちゃいけないのであり、可哀想だから、その子の悪事も大目に見てやるのではなく、その子自身が被害を受けている問題自身も、その子の悪事とは別物として、解決してあげるのが、正しい対処の仕方なんだ。」

その５

- いじめは、大人だってやっているし、職場にだって存在する。人間社会のどこにでも発生していて、存在する現象なのだ。子供は大人を真似て、いじめをしているだけなのであり、文句があるなら、まず大人たちがいじめを止めるべきだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「子供の頃にいじめをやっていた奴が、大人になってもいじめをやめないから、大人の世界もいじめだらけなんじゃないの？
誰かがいじめをやっているから、自分もいじめをやってもいい、なんて考え方をしている限りは、いつまでたっても、どこの場所からも、いじめは無くなりはしないよ。
まずは、自分がいじめをやめる勇気を持たなくちゃ！」

その6

- いじめっ子にも、人間として、生き続け、幸せになる権利がある。だから、他人（ 被害者 ）を不幸にしたのだから、いじめっ子の事もいじめていい、と言う結論は倫理的に正しくない。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「いじめっ子がいじめられると言う話はよく耳にしますが、それって事実なのでしょうか？ いじめっ子が仕返しで集団暴行された、みたいな事件はまるで起きてないようですし、社会問題になっている訳でもありません。
そんな現状なのに、いじめっ子をいじめちゃいけないなんて話をされても、自分は悪い事をしたくせに我が身は守りたいいじめっ子が、先手をうって根回ししているようにも見えて、見苦しいと言うか、不快でしかないです。」
（ 上の意見への反論 ）「ネットで名前を晒す行為はいじめじゃないでしょうか」
（ さらに、この反論への回答 ）「ネットで名前を晒す件について
ネットに名前を書くだけなら、いじめじゃないでしょ？ 何かの法律には引っかかるかもしれないけど。
ネットに名前を晒されて実害があったと言うのであれば、まず名前を晒されたいじめっ子が、その事を訴えればいいんです。本当に実害があったのかどうかの事実確認もしていないうちから、周りの人間がギャーギャー言っても仕方ないよ。
本物のいじめの被害者の方は、被害証拠がいくらあっても、いじめだって認めてもらえてないんだぞ。」

「いじめっ子にも未来はあるし、幸せになる権利もある。でも、その理屈で、いじめっ子を無条件で許したら、誰も「いじめを止めよう」なんて考えなくなってしまう。いじめられる側（ 被害者 ）になってしまうと、損するだけなら、尚さらだ。そうやって、皆が、いじめられる側にならないようにして、積極的にいじめる側になろうと立ち回っているから、ますます、そんな環境では、いじめや犯罪などがはびこってしまうのではないのだろうか。

倫理的には、加害者（ いじめっ子 ）の権利を認める事も正しいのかもしれないが、加害者には見合った罰や償う義務も与えなくては、全体の均衡や平等が崩れてしまい、そんな環境は、逆に倫理的にも悪らつな状態になってしまうのだ。」

「いじめっ子の権利を認めるんだったら、自分の幸せになる権利を蝕まれた被害者の立場は、どうなっちまうんだよ？ いじめっ子ばかりが守られて、被害者は、おとなしく、泣き寝入りしてろと言うのかよ？
ふざけるな！
いじめっ子の権利をどうこう言う前に、まずは被害者の人権や幸せを回復する事を考えてやれよ。それもしないで、いきなり、いじめっ子の事を庇って、いかにも自分は優しい人間であるかのような態度を気取っているから、てめえらは偽善者だと思われるんだぜ！」

その７

- たかが、いじめで、皆が騒ぎ過ぎるのではなかろうか。学校のいじめなんて、昔からあったはずだ。それなのに、いじめぐらいで自殺したり、大げさに裁判沙汰にしたりして、最近の被害者の行動の方がやり過ぎなのである。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「二言めには、昔からいじめはあった、と言ってるみたいだけど、それって本当の話か？ アフリカ奥地とかの、より未開で原始的な村ほど争いとか差別とかは存在してないような感じもするぞ。もともとは、そんな平和な社会の方が本来の姿で、あとから、ずるくて卑怯で自分本位の一部の人間が弱い者いじめや差別とか身分制とかを社会の中に持ち込んで、それから社会がおかしくなってしまっただけなんじゃないのか？ きっと、いじめをするのが当たり前だと思っている連中がいなければ、世の中もこんな風にはならなかったんだよ。自分たちで世の中を都合よく作り直しておきながら、これが昔からの状態だなんて、ふてぶてしい事がよく言えたもんだ。」

その８

- 子供同士の問題は、子供たちだけに任せるべきであって、大人が干渉すべきではない。それが、子供たちの成長や人生勉強につながるからだ。それなのに、大人が口を挟み過ぎるから、いじめの話も誇張されて、こじれてしまうのである。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「子供だけに任せているから、ムカついたと言うだけで人を殺したり、何十万円もカツアゲするような悪い方向にエスカレートしちゃうんだろ？
確かに、自分だけで善悪を学んでいける良い子もいっぱいいるぜ。でも、皆が皆、そうじゃないんだよ。
おまえ、子供の実態を知らなすぎだよ。」

その 9

- いじめにならないように気を遣い過ぎると、あだ名をつけたり、ツッコんだりするような些細な悪ふざけもできなくなり、皆が神経質になって、日常から笑いが失われてしまう。つまらない世の中になるより、多少は、いじめもあった方がいい。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「あんただけが、あだ名つけられたり、つっこまれたりして、皆の笑い者になったらいいんじゃないの？
笑われたくもない他人を踏みにじっておいて「楽しい、笑いのある日常」もないもんだ。」

その 10

- そもそも、人間社会には、差別とかいじめとかが、すでに当たり前のものとして存在しているのだ。それが世の中の現実なのだから、そのシステムをおとなしく受け入れるべきである。その事に文句をつけるようなヤツが、皆にいじめられるのだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「考え方があまりにも時代錯誤なので呆れました。これって、戦時中に「戦争に協力しない奴は非国民だ」と言っていたのと同じですよネ？ 今の日本は民主主義だと思いましたが、まだ、こんな考え方を正しいと考える人がいた事に驚きました。
日本を軍国主義に戻したくなければ、憲法改正をどうこう言うよりも、こんな考え方の国民がいる事をどうにかする方が先じゃないかと思いました。
今の社会のシステムがおかしければ、それをおとなしく受け入れるのではなく、改善する為に努力していくのが、民主主義であり、日本を軍国主義に変えない為に国民がすべき義務なのではないのでしょうか？ 違いますかね？
いじめや差別も、確かに昔からあったのかもしれないけど、未来へ向けて無くしていくように努力していかなくちゃいけない。奴隷制度だって、昔は当たり前のものだったかもしれないけど、今では否定され、世界的に廃止の方向に向かっています。つまりは、いじめや差別も同じなのであり、やがては無くしていかなくてはいけないものなのです。
そういう発想がない人たちと言うのは、難民拒絶や自国ファーストばかりを掲げているどこぞの国の指導者たちにそっくりです。」

「二言めには、昔からいじめはあった、と言ってるみたいだけど、それって本当の話か？ アフリカ奥地とかの、より未開で原始的な村ほど争いとか差別とかは存在してないような感じもするぞ。もともとは、そんな平和な社会の方が本来の姿で、あとから、ずるくて卑怯で自分本位の一部の人間が弱い者いじめや差別とか身分制とかを社会の中に持ち込んで、それから社会がおかしくなってしまっただけなんじゃないのか？ きっと、いじめをするのが当たり前だと思っている連中がいなければ、世の中もこんな風にはならな

かったんだよ。自分たちで世の中を都合よく作り直しておきながら、これが昔からの状態だなんて、ふてぶてしい事がよく言えたもんだ。」

その 11

- 子供の頃は、確かにいじめ（ 不良行為 ）もいっぱい、やったかもしれない。しかし、大人になった今では、まともに社会に出て、世の中の為にバリバリ働いている。昔の罪は十分に償っていると言えるはずだ。（ 子供の頃にいじめられた事をネチネチ引きずっている奴の方が陰湿なのだ ）

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「いじめた側だって、社会に出てからは一生懸命頑張っているという意見には深く賛同します。いじめた側も、心の中では、子供の頃、友達を傷つけてしまった事は深く気にしてるんです。だから、大人になってからは、同じあやまちを繰り返さないように一生懸命生きてるんです。いじめられた側の辛い気持ちばかりが取りあげられがちですが、いじめた側の気持ちも分かっていただけたら嬉しいと思います。」

「あのなあ。もっともらしく言ってるけど、いじめられた側の子供も、いじめに関わらなかった子供も、たいていは、普通に大人になって、社会に出て、真面目に働いてるんだよ。同じ事をしてるだけなのに、さも、自分だけが立派になったかのような事を言ってるんじゃないよ。「昔の罪を償ってる」と胸を張りたいんだったら、もっともっと、いっぱい働け。それこそ、いじめの被害者の何倍も働いて、お前の被害者に賠償金を払ってやるぐらい、働いてみろよ。そのぐらい、働かない限りは、お前の罪なんて、まだまだ全然償われてなんかいないぞ。すぐ許してもらう事ばかり考えたりしないで、もっと謙虚になれよ！」

その 12

- 人間も含む動物の社会は、そもそも弱肉強食なのだ。弱い奴がいじめられるのは自然の摂理なのである。いじめられるのが嫌だったら、そいつ自身が、いじめられないように、強くなる努力をすればいいのだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「学校のいじめが、動物界の弱肉強食と同じって言われてもなぁ。
大体、このことわざって、昔の人が、正確な動物界の仕組みを知らないで唱えたものだし。
そもそも、弱肉強食って、違う種類の動物が食ったり、食われたりする事なんだよね。
むしろ、野生動物って、同族の間では、
子育てだったり、利他的行動だったり、強いものが弱いものを守る場合の方が多いんだ。
同族の弱い個体を食べちゃうのって、動物の発達段階としては、コモドオオトカゲあたりと同じなんだよね。
いじめっ子の脳みそって、爬虫類レベル？」

「例えば、動物の強いオスがメスを独り占めして、あまったオスは群れから追放されたりもするけど、
それって、動物が生活していく上での本質的なルールなのであって、
人間みたいに、面白がったり、ストレス発散の目的で、弱い者いじめするのとは、話の次元が違うような気もするぞ。」

「いじめられていた子供が強くなれば、確かに、その子に関して言えば、いじめられなくなるのかもしれない。でも、いじめをしたい奴は、きっと今度は、次に弱い子をいじめるようになるだろう。その子が強くなっても、また誰か違う子がいじめられる事になる訳で、根本的な解決にはなってないんだ

自分さえいじめられなければ、いじめを克服したなんて思うのは、自己中心的で、考え方が浅いような気もするよ」

その 13

- 学校と言うのは、ストレスの溜まりやすい空間である。生徒たち皆がおかしくなってしまわない為にも、いじめで息抜きさせる必要があるのだ。いじめられる子は人柱なのであり、その子一人が犠牲になって、他の沢山の子が救われるのであれば、その子は運が悪かったのだと諦めさせるしかない。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「ゾッとしますが、何十年たっても、いじめの問題がいっこうに解消しない現状を見ていますと、この見方が、世間一般の認識に一番近いのではないかとも思えてきてしまいます。
タテマエじゃ、いじめは良くないとは口にしていても、大多数の人々にとっては、学校の大改革をおこなってまで、いじめを無くす事もない、と思われているのでしょう。
うやむやにしておいて、被害者だけを押さえつけておくのが、結局は一番ラクなのです。
いじめをひた隠す学校や教育委員会の態度などから、時々、そんなホンネが垣間見えてしまう気もします。」

その 14

- いじめられる子供と言うのは、他の皆と比べて、どこかズレている場合が多い。集団の中では、皆が合わせていく事が大事なのであり、それが出来ない者が責められているだけの話なのであって、それはいじめと言うより、はぐれ者を罰して、矯正を促す、正しい行為なのである。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「集団行動に合わせる事の出来ない子供がいたとしても、その矯正は大人や先生に任せるべき事なのでは？
自分たちの考えだけで、矯正してやるとか言ってるのも、正義なのではなく、集団からはぐれた行為であり、いじめは止めましょうって周りから言われてるんじゃないんですか？」

「集団行動できなくたって、社会に出てからは、一人で働くような仕事にでもつけばいいさ。ぜんぜん問題ないよ。
でも、他人をいじめるような奴は、どこの場所でも迷惑なんだよ！ お前らみたいに、人をいじめても当たり前のように思っている連中は社会に出てくるな！ 家庭内暴力とか職場いじめとか起こされても、周りが迷惑だからな！ お前たちだけで、施設にでも閉じ込められていて、勝手にいじめごっこでもやってろ！」

その 15

- いじめる側にまわらないと、自分がいじめられるかもしれない。最終的にいじめられる奴と言うのは、そのへんの立ち回りがうまくできず、要領が悪いからなのであり、いじめられるのも自分の責任である。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「オレオレ詐欺は騙される方が悪いって言い方に似てるよな。でも、そう思っている奴ほど、実はオレオレ詐欺に引っかかりやすいらしいぜ」

「いじめをする子といじめられる子だけが特別なんだ、って事を口にする奴も見た事がある。要するに、このテの事を言いたがる奴と言うのは、自分はいじめられた事がないものだから、自分はいじめとは無関係だと力説したいだけなんだ」

「いじめがバレちゃう奴が要領が悪いんだ、みたいな事をＳＮＳで主張していた人も見かけた事があるな。それに賛同するレスとか付いてたもんだから、呆れちゃったよ。
バレなきゃいじめをしてもいいって発想は、バレなきゃ脱税していいとか、バレなきゃ保険金詐欺で人を殺してもいいとか言ってるのと、大差がないぞ。
こんな考え方を本気で支援している人がいっぱいいるんじゃ、そりゃあ世の中から悪い事する人がいなくなるはずもないよな。」

その 16

- 子供たちは、面白い事をマネしたがる。そもそもは、テレビで、弱い者いじめを笑いにするようなコントやらアニメとかが放送されているから、子供たちに悪い影響を与えているのだ。いじめっ子を責めるのではなく、まずは、そういった俗悪番組を追放すべきである。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「コントやアニメは、そもそもショーでありフィクションなのだから、現実のいじめと同じ土台で考えちゃいけないよ。殺人事件とか犯罪とかが起きるたびにテレビや映画のせいだと訴える人がいるけど、バカじゃねえかと思う。一番悪いのは、虚像と現実の区別もつかない連中だし、その事をきちんと教えてこなかった周りの大人もよくないんだ」

「いじめられる若手芸人って、いじめられる事で人気も出るし、お金ももらえるし、メリットがいっぱいあるんだよね。そこまで真似する事にして、いじめっ子もいじめた子に対して、多額ないじめ料を払ったらいいんじゃないの？」

その 17

- いじめているのではない。その子の事をいじって、遊んであげているだけなのだ。完全にシカトして、いっさい口をきいてやらないより、ずっとマシだと思ってもらいたい。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「いじめっ子らしい考え方だ。
「いじられるのとシカトされるのとどっちがいい？」って、なんで、お前にそんな決定権があるんだよ。
何様なんだよ？ どの口で、そんな偉そうな事を言ってやがる？
同じような二択を押しつけられたら、お前だって嫌だと思わないのか？ お前こそ、こんな二択を迫られたら、どっちを選ぶ？」

その 18

- まず、いじめっ子が誰かから理不尽にいじめられた。自分だけいじめられるのは不公平なのだ。だから、他の弱い子をいじめて、バランスをとる。いじめられて悔しいと言うのなら、その被害者の子も他の弱い奴をいじめればいいのだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「自分がいじめられた時、
「いじめられて悔しいから、私も誰かをいじめてやる！」
と考える人と、
「いじめられたら、こんな辛い気持ちになるのだから、私は誰もいじめないようにしよう」
と考える事ができる人がいます。
皆が、後者のような考え方をしていくようになれば、いじめって減っていくのかもしれませんね。」

その 19

- いじめられて嫌だと思うのなら、はっきり、そう言えばいい。何も言い返さないし、抵抗しないから、いじめてもいいと誤解させるのだ。そのせいで、いじめっ子扱いされてしまう方が、よっぽど被害者である。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「なんか、ソフィストの詭弁を思い出しちゃったよ。古代ギリシャにいたソフィストは、自分が相手の足を踏んでも「なぜ、私の足の下に自分の足を置いた？」という言い方をして、絶対に自分の方が悪いとは認めなかったそうだ。
「抵抗しないから、いじめた」という言い訳が通用するんだったら、いじめっ子の名前や顔写真をネットで晒しても「本人がネットで公開しないでくれと言ってないなら、晒してもいい」という理屈で正当化できるね。」

「相手が言い返さなくても、抵抗しなくても、弱い者いじめはしちゃいけないんだよ。相手がどうこうじゃなくて、自分の判断で、やっていい事悪い事は決めなくちゃいけないものなんだ。
相手が抵抗しなければ何やってもいいと考えてる奴は、将来、オレオレ詐欺とか児童虐待殺人とかだってやりかねないよ。注意した方がいいぞ。」

「生徒手帳には、服装の乱れの禁止や時間厳守の事は書かれていても、いちいち「弱い者いじめはしちゃいけません」とまでは書かれていないよね。だって、そんな事、幼稚園や小学生低学年ぐらいまでで、もう身に付いていていいモラルだもん。
きっと、中学生、高校生になっても、まだ自分の判断では弱い者いじめを制御できないような奴がいるから、先生だって、そんな幼稚な奴らの指導の仕方までは分からなくて、うまく対処できないでいるんだぜ。」

その 20

- いじめっ子（ 不良 ）は、心に淋しさを抱えていて、本当は、皆の気を引きたくて、悪い事をしちゃうのである。だから、彼らに真剣に向き合ってやれば、素直になるはずなのに、周りの人間（ 被害者や大人たち ）が、嫌ったり、避けたりするから良くないのだ。

ーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「そういえば、男の子って、好きな女の子の事をわざといじめたりするよね。でも、そんな事してたら、絶対に振り向いてはもらえないよ。よけい嫌われちゃうだけだよ。相手の気をひきたければ、まずは優しくしなくっちゃ！」

「もし、こんな理屈を認めなくちゃいけないんだったら、ストーカーとか通り魔殺人の犯人とかも許してやらないといけない事になっちゃうよな。ストーカーとか通り魔殺人とかする奴も、大体は、心に寂しさを抱えているものだからな。
いじめっ子を理解してやれとか言ってる奴は、もし、お前がストーカーや通り魔に襲われたとしても、それは連中の事を分かってやらなかった自分のせいだと考えるようにしろよ。自分が被害者になった時だけ、ガアガア騒いだりするなよ！」

その 21

- いじめられたら、いじめた相手に抵抗するなり、よく話し合うなり、自分の力で対処できるようにならなくてはいけない。それが、社会人になる為の勉強なのだ。それなのに、すぐ人に助けを求めたり、自分の殻に閉じこもって、ネガティブな方向に物を考えてしまう、いじめられる側の態度に問題がある。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「社会人になる為の勉強、と言うのだったら、いじめをする側こそ、他人をいじめちゃいけない、と言うモラルを学ぶべきだろ！！！！
いじめられる側の方が弱そうに見えるからって、いじめられている側にばかり、あーしろこーしろと命令するんじゃねえ！！！！
きさまのひとりよがりの教育論を、他人にまで押しつけるな！！！！」

「多分、本人は、根っから善意でこんな事を言っているに違いなく、それだけにタチが悪いよね。
テストで１００点をとれる子もいれば、せいぜい 50 点どまりの子もいる。人間には個人差と言うものがあるんだ。頑張れば、誰だって１００点をとれるんだったら、すでに全員が１００点をとれてるよ。
いじめられた時の対処能力にだって個人差がある。皆が皆、じょうずにいじめを受け流せるようになるって訳でもないんだよ。」

その 22

- 昔だって、いじめられている子はいっぱい居た。でも、それでも、皆、辛抱して、学校に通い続けていた。最近のいじめられっ子は、すぐ自殺したり、登校拒否して、意地でも生き抜いてやろうと言う根性がなさすぎる。少し軟弱なのではなかろうか。要するに、甘ったれているのだ。

ーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「　私も、学校に通っている頃は沢山いじめられました。それでも、辛抱して、耐え抜いて、今は社会に出て、働いています。
　でも、自殺したり、登校拒否したりする、今の子供たちの事を軟弱だとか、甘ったれているとは思いません。「私も我慢したんだから、あなたたちも我慢しなさい」なんて事は、とてもじゃないけど言えそうにありません。
　私自身も、いじめられていた頃は本当に辛かったからです。この無理して学校に通い続ける苦しみを、あっさり他人にも強制するような事は、とても言えそうにはないのです。
　でも、やっぱり自殺はしない方がいいと思います。生きていれば、いつかはいじめられなくなって、幸せになれるかもしれないんです。その喜びを受け止めてもらいたいからこそ、いじめられた被害者の子供たちには、死なないで、生き続けてほしいと思います。」

「二言めには、昔からいじめはあった、と言ってるみたいだけど、それって本当の話か？ アフリカ奥地とかの、より未開で原始的な村ほど争いとか差別とかは存在してないような感じもするぞ。もともとは、そんな平和な社会の方が本来の姿で、あとから、ずるくて卑怯で自分本位の一部の人間が弱い者いじめや差別とか身分制とかを社会の中に持ち込んで、それから社会がおかしくなってしまっただけなんじゃないのか？ きっと、いじめをするのが当たり前だと思っている連中がいなければ、世の中もこんな風にはならなかったんだよ。自分たちで世の中を都合よく作り直しておきながら、これが昔からの状態だなんて、ふてぶてしい事がよく言えたもんだ。」

その 23

- 誰でもいじめの被害者になりうるように、今の世の中は、誰もがいじめの加害者になる可能性も秘めている。だからこそ、明日は我が身かもしれないのだから、むやみに、いじめの加害者ばかりを責めるのは控えるべきだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「考え方がおかしくないか？
もっともらしい事を言ってるように見えて、ひらたく言い直せば「自分のいじめ行為を責められたくなければ、他人のいじめ行為も見逃してやろう」と言ってるだけだぞ。こんな考え方がまかり通るんじゃ、そりゃあ、いじめは無くならないし、被害者ばっかりが嫌な思いをするはずだ。
マトモな人間だったら、「他人のいじめも許さない代わり、自分がいじめをした時も、すぐ反省して、相手に謝るようにしよう」と考えるもんじゃないか？」

「この主張の真意は「いじめっ子を許そう」ではなく、自分の身も顧みずに加害者を責めまくる第三者への警告のような気もします。自分も別の場所ではいじめっ子だった人間が、はたして、他のいじめ問題の加害者を責める資格があるのだろうかと言う事です。自分が加害者であった件は許してもらいたいけど、他の加害者の事はやっつけて正義の味方になりたいなんて、人の態度としてやはり間違っているような気もします。そんな事を指摘したかったのではないのでしょうか。」

その 24

- いじめっ子が、いじめをした事で先生に叱られた。なぜ、自分は叱られたのだろう？ それは、いじめられた子が先生に言いつけたからだ。つまり、悪いのはいじめられっ子なのだから、この悪い奴を、またいじめて、仇を取ってやる。

ーーーーーーーーーーーーーーー

この主張に対しては、次のような反論ができます。

「こーゆー子って、ほんとは自分を叱りつけた先生の事が憎いんだろうけど、先生には逆らえないないもんだから、自分が勝てそうないじめられっ子の事をなんやかんや理屈をつけて悪者扱いにして、またいじめるんだろうね。自分のやってる事がみみっちいって事に気付かないんだろうかw」

間（ インターバル ）

いじめる側やそれに準ずるような意見は、こうして並べてみると、どこか自分中心で、相手（ 被害者 ）の気持ちはいっさい考慮しておらず、対等に扱っていない事が分かる。
「いじめられたら、やり返せばいい」なんて事を言う人もいるが、いじめ合う事はぜんぜん対等でも何でもない。そもそも、被害者側は、いじめられたい訳でもないし、加害者をいじめ返したいのでもないのである。いじめそのものが、加害者が一方的に押しつけているものであり、その事自体が被害者の意思を完全に無視した行為なのだ。
民主主義の社会では、全ての人間が権利（ 人権 ）を持っている。被害者にも「いじめられない権利」があるのだ。被害者側が、先に悪い事をしていたとしても、弱者であろうと、全くの無抵抗だったとしても、いっさい関係ない。全ての人間が「いじめられない権利」を持っているのである。
その事が、いじめる側や一部の人間の発想では完全に欠けてしまっているようだ。いじめがある事がすでに前提となってしまっており、その時点でおかしい事に気が付かないようなのである。彼らは、そのように信じきってしまっているみたいなので、恐らく、いくら説明しても理解はできないのであろう。
逆に「他人をいじめる権利」なんてものは存在していない。「他人を殺す権利」とか「他人をだます権利」とかが認められていないのと同じだ。つまり、他人をいじめると言う行為は、ほとんど犯罪と同質なのである。
自分がされたくない事は他人に対しても行なってはいけない。これが、何が悪い事かを決める本質的な基準であり、聖書（ バイブル ）にすら記されている黄金律だ。いじめをする人間や、いじめ行為を肯定する人間と言うのは、どうやら、その人自身の事もいくらいじめてもいいみたいである。

その 25 〜 その 39

その 25

いじめっ子がいじめをした事で責められた場合、「最初にいじめたのはオレじゃない」とか「誰それだって、いじめていた」みたいな事を言い出す。こうして、加害者サイドに巻き込まれた人たちは、自分も罪をかぶりたくないものだから、いじめっ子をかばう立場に回ってしまい、いつの間にか、一人孤立した被害者の方が悪者になってしまう。

その 26

誰だって、一度ぐらいは、いじめをした事はあるはずだ。だから、「お前だっていじめをした事があるくせに、いじめをしたオレの事を責められるのかよ」なんて言い返されたら、お人よしの善人だと、それ以上、いじめっ子の事を注意できなくなってしまう。

その 27

いじめっ子は、自分がいじめをした事で責められると、すぐ、他の人たちもいじめをしている事が思い浮かぶ。もし、ここで、自分だけがいじめをした悪者である事を認めてしまうと、損した気分になってしまうのだ。それで、いじめが悪い事だと分かってはいても、素直に自分の非を認められないのである。

その 28

自分の感情を素直に表現するのは、本人にとっては、とても気持ちのいい行為だ。実は、他人をいじめる行為は、存分に怒ったり、優越感に浸ったりできて、楽しいのである。しかし、そんな理由で誰かをいじめるなんて、明らかに悪い人間の態度だ。自分が悪い人間だと思われたくないので、いじめっ子は、いじめから生じた快感の話はひた隠し、いじめをする理由を、他から見つけ出そうとするのである。

その 29

自分の感情に素直に生きて、嫌いな人を踏みにじったり、反社会的（不良）行為をやって

その 30

いじめる側は、さまざまな言い方をして、自分のいじめ行為を正当化したがるが、別に彼らだって、いじめが正しいと思っている訳ではない。ストレートに言ってしまえば「自分はいじめをしても、自分は悪者だと見られたくない（ いじめられたくない ）」だけなのである。だから、いじめっ子は「いじめられる側に問題がある」と言う発想に固執して、自分はいじめられないで済む理論展開を行ないたがるのである。

その 31

いじめる側は、無意識的、あるいは意図的に、もう、被害者をやっつける事が結論になってしまっている為、客観的に見ると被害者の落ち度が大した事なくても、ものすごく許されない事のように扱う。もしくは、被害者の気に食わない部分しか思いつかなくなってしまっている。だから、いじめっ子側にしてみれば、確かに、悪いのは被害者の方だと言う理屈にしかならないのだ。

その 32

意地悪する場合、相手がスルーすれば、そのまま意地悪し続ければいいし、相手が怒れば「たかが、この程度で怒るなんて、冗談も分からないヤツだ」と文句をつける。いじめる側は、どっちに転んでも、悪者にはならない。

その 33

いじめてみて、被害者が逆らわず、言いなりでいじめられてくれるようなら「抵抗しないから、いじめるんだ」と言えばいい。逆に歯向かってくるようだったら、「反抗的な態度がむかつくから、いじめるんだ」と言う事にすればいい。

その 34

実際には、集団の構成員は、そのほとんどが、いじめをしようとは考えていない。たいていの人は、自分本位の感情よりも、理性の方が強いのだ。しかし、集団は、一つの意見に皆が合わせてしまう傾向があり、最初に「誰それをいじめよう」と言う意思表明があると、何となく、皆がそれに従ってしまう。だから、特に狡猾なタイプのいじめっ子は、真っ先に自分が誰かをいじめて、その子をいじめてもいいルールを集団内に確立する事で、自分がいじめられる危険性を回避するのである。

その 35

いじめられる側に「悪い」部分さえ見つけられれば、いくらいじめてもいい。でも、この発想だと、「いじめは悪い事」だから、いじめっ子もいじめていい、と言う結論にたどり

着いてしまう。だから、自分のしている行為がいじめであるとは絶対に認めない。あるいは、いじめだとは気付かなかったふりをする。さらには、「いじめは悪い事じゃない」と言う、開き直ったロジックを展開する。

その 36

いじめを否定する主張者は、自身もいじめをしちゃいけないはずである。だから、いじめ否定論者がいじめっ子を非難した時は「いじめっ子をいじめている」と言い返してやれば、何となく、いじめ否定論者の方が悪者っぽくなってしまう。

その 37

いじめをした事で責任追及された場合、いじめられる側も問題があるとか、何もしない先生も良くないとか、他人へと話を振ればいい。そうやって、周りの人間に責任転嫁し続ければ、いつまでも自分（ いじめっ子 ）は責められなくて済む。

その 38

巷でいじめ問題が騒がれているからと言って、自分がいじめっ子だった過去をわざわざ悔やむ必要もない。昔のいじめの事を今さら訴えられる事もないだろうし、世間が何を言ってようが、自分もひっそりと身を潜めていれば、悪者になる心配は何もないのだ。

その 39

いじめを肯定する発想は、最終的には、自分がいじめられる事も肯定する理屈に帰結してしまう。本当は、いじめ擁護論の方が圧倒的に不利なのである。自分がいじめられずに済む環境（ いじめっ子として君臨している教室内や、ネットの匿名書き込みなど ）以外では、わざわざ、自分がいじめ側だとは明かさなければいい。周りの連中が、いじめた側は隠れてて卑怯だ、と怒っていても、そんなもの、ただ無視すればいいだけの話だ。

結び

いじめが社会問題となって騒がれ始めてから、もう 30 年以上がたつ。だいぶ状況も変わり、被害者側の認識も学校の姿勢も変わってきているはずなのに、あいかわらず、いじめは無くならないようだ。
それもそのはずである。肝心の加害者（ いじめっ子 ）が何一つ変わってはいないからだ。彼らには、いじめを無くす為に努力しても何のメリットもない。むしろ、自分たちが責任追究されるだけだから、現状維持の方が都合がいいのである。
彼らは、どれだけ世間が騒いでいようと、他人事のようにダンマリを決め込んでいるようだ。自分から無理に責任追究される為に表に出る必要もないし、このまま、隠れていれば、責められる事もなく逃げ通せると思っているらしい。
現時点では、いじめ対策や解決への道は、全て、彼らの前で止まってしまっているのである。
そこで、私は、口を開こうとしない彼らに代わって、彼らいじめっ子が考えていそうな事を、ずらっと代筆してみる事にした。これらに基づいて、いじめっ子の心の内側を分析して、どのようにアプローチすれば、連中のこんな考え方を修正させて、いじめをやめたり、反省したり、被害者に償うように誘導していけばいいかを、考えてみたらどうだろう、と思った訳だ。
その１からその 23 までは、いじめっ子自身が普段からタテマエで口にしそうないじめをする理由を並べてみた。その 24 以降は、もっと深部にまで突っ込んでみて、いじめっ子自身は絶対に話してはくれなさそうなホンネや、いじめを正当化する技術（ テクニック ）などを記してある。
あまりにも、考え方が自分本位で酷すぎると感じた人もいるかもしれない。特に、当のいじめっ子などは、これを読みながら、ここまで自分は悪質な人間じゃないと思ったりもした事だろう。
ならば、そんないじめっ子くんは、ぜひ、自分の言葉で、いじめる側の真実を語っていただきたいと思う。私は、基本的に被害者側に立つ人間なので、加害者側の気持ちは完全に把握はしていないし、良いようにも解釈できないのだ。
あなたたちいじめっ子が、きちんと自分から弁護しない限りは、世間における加害者の印象（ イメージ ）は悪くなっていく一方なのである。

いじめっ子の笑い話

はじめに

「ユダヤ笑話集」（ 現代教養文庫 ）の解説に、次のような事が書かれている。

「笑話（ 注・笑い話 ）は外からの圧迫に抵抗する武器の一つである。相手を揶揄し嘲弄することによって、精神的に相手よりも優位に立つ事ができる。」

学校のいじめ問題がいくら騒がれても解消の兆しが見えない現状を憂いて、私もこの精神にのっとった笑い話の数々を書いてみる事にした。

なお、笑い話を作るにあたっては、いずれも、拙著「かげこの玉手箱」「新編かげこの玉手箱」「いじめられっ子の気持ち」「いじめっ子って悪くない？」「いじめっ子カースト」などの内容を流用させていただいている。

補記

本作はもともと「小説家になろう」にて不定期連載していましたが、そこに、ヤバい内容なので公開保留にしていたネタも加えて、決定版にさせていただきました。

また、筆者のブログ内で紹介したネタにつきましても、ブログでどんな見出しをつけていたかを記しておきました。

教訓

いじめって、まるで新型コロナそっくりである。
大多数の元気な人は、新型コロナにかかっても、軽症で済むと思って、
最初は、つい予防や警戒を疎かにして、ほとんど気にもしない。
しかし、いじめも新型コロナも、弱者には圧倒的な猛威を振るうのだ。
どうせ被害者は弱者だけだなどと他人事だと思っていると、
やがて、手遅れになる。
いじめも新型コロナも、いつの間にか、周囲に蔓延してしまい、
ロックダウンやオーバーシュートを引き起こして、
弱者以外の人々の自由や幸せさえも奪ってしまう事になるのだ。
新型コロナの教訓を、いじめ問題にも当てはめて、
皆は、もっと切実に、いじめ問題とも取り組むべきなのである。

「子供にとっては、悪い事をするのも、いい勉強だ」
との言い方をする人たちがいる。
だったら、「悪い事をしたあと、罰を受ける」のも、
いい勉強なのである。
だから、いじめをする子のことは、
ガンガンやっつけてもいいのだ。

「いじめっ子はいじめてもいい、とか、
そんな考え方をするから、余計、いじめは無くならないんだ」
と、自称・平和主義者がいじめっ子カーストを非難した。

すると、即座に言い返された。
「だったら、いじめられた側は、そのまま、我慢しろと言うのかよ！
それじゃ、いじめっ子のやりたい放題じゃないか！
いじめられた側だけが、辛い思いをすればいいと思ってるのかよ！
そもそも、お前は、いじめられても、やり返さないのか？
いや、いじめられても、絶対に歯向かうなよ！
少しでも逆らったら、全部、いじめ返してきた、と見なしてやるからな！
そして、これからは、お前ばっかり、いじめてやる事にする！」
甘ったれた自称・平和主義者は、慌てて逃げ出した。
自身が安全圏にいる状態で唱えている平和主義なんて、
クソの役にも立たないのである。

「いじめっ子はいじめてもいい、とか言ってて、
ほんとに、いじめっ子がいじめられる事件が起きたら、どうするんだ！」
と、いじめっ子寄りの人間が、いじめっ子カーストに文句をつけた。
「バーカ！ ふざけた事、言ってるんじゃねえ！
まだ起きてもいない事件を心配する前に、
すでに、被害者の自殺や暴力事件を巻き起こしているいじめっ子の事を、
まずは非難したら、どうなんだよ！
そういうところが、お前の態度は偏ってるんだよ！」
と、逆に怒鳴り返された。

ニュースやドラマなどで、いじめの話を目にした時、
ひどく心がズキンとくるいじめっ子や元いじめっ子も多いかもしれない。
それは、ニュースやドラマで非難されている加害者（ いじめっ子 ）に、
自分の姿を投影してしまう心理現象の為だ。
しかし、それは、いじめをした人が受ける当然の報いなのである。
こんな辛い罪悪感を抱きたくなければ、
安易な気持ちでは、最初っから、いじめなどしなければ良かったのだ。
いじめた相手に対して、きちんと心から謝り、償っておけば良かったのである。

ところが、世のいじめっ子や元いじめっ子の中には、
自分の非を素直に認めて、改心するのではなく、
心苦しい気持ちを紛らわすために、逆の態度をとる人もいるようだ。
いじめのニュースやドラマを見ても、
「いじめられる方が悪い」とか「いじめは悪い事じゃない」みたいな理屈を考えて、
開き直る事で、心の不安を解消させようとするのである。
しかし、そんな屁理屈は穴だらけだから、
全然、安堵などには繋がらないのだ。
周りの人間からは、明らかに見苦しくしか見えていないし、
本人も、「いじめをした」だけ以上の苦悶も抱えてしまう事になるのである。
そんな自業自得のいじめっ子たちを、大いに笑い飛ばしてやる事にしたい。

いじめっ子ばかりを一点集中で非難すれば、
連中を怒らせて、余計にいじめが悪化してしまうから、
彼らばかりを激しく責めるべきではない、
と考えている人たちもいるのかもしれない。
とんでもない話だ。
いじめっ子と言う奴らは、
ガンガン責めまくって、追い込こもうが、
あるいは、刺激しないように、ソッとしておいても、
結局は、どちらに転がっても、いじめをやり続けるものなのである。
現状を見てみよ。
子供を罰しない教育環境のもとで、いじめっ子を甘やかしていても、
いじめは、ちっとも無くならないではないか！
いじめを積極的にやりたがる人間と言うのは、
そもそも、それが、そいつの薄汚い本性なのだから、
まともな善良な人間と同じように扱ってやっても、
むしろ、恩を仇で返されるだけなのである。

本当に悪質ないじめっ子は、

「いじめっ子の笑い話」を読んで、嫌な気持ちになっても、
素直に自分の悪行を反省したりはせずに、
むしろ、逆ギレしたり、ひたすら反発し続ける。
もっとタチの悪いいじめっ子は、
「いじめっ子の笑い話」を読んでも、
それが自分の事だとさえ気付いていなくて、
能天気に、他人事のように笑っている。

「いじめだと思われるようなイジリ方をするから良くないんだ」
「なんでも、いじめだと思い込む被害者の方が問題なんだ」
と、あるいじめっ子が得意げに言った。
全く、その通りである。
「いじめっ子の笑い話」もいじめなどではない。
これをいじめだと思う奴の方が、
頭が固くて、ユーモアに欠けているのである。
さあ、皆も、大いにいじめっ子の事を笑い踏みにじってやろう！
（「いじめっ子の笑い話の心得」より ）

いじめっ子をいじめたところで、新たないじめが生じるだけで、
何の良い方向にも向かわないのではないのか、
と思われる人たちもいるかもしれない。
いやいや、そうでもないのだ。
世の中には、ストレスやイライラの種が満ち溢れている。
それを発散したくて、人々は、つい、
身近にいる弱い対象、家族とか後輩とかに当たってしまうものなのだ。
大多数の人は、他に感情をぶつける事のできる受け皿さえあれば、
身近な人間を虐げたりはしないのである。
だから、いじめっ子だけをいじめてもいい存在に公認して、
皆でいじめる事にして、ストレスを発散したら、
他の大多数の、家族とか後輩とかは、

つまらない理由でいじめられる心配からは解放される事になるのだ。
罪のない弱者たちが、大量に救われるのである。
パワハラも児童虐待もＤＶも、解消される事となるのだ。
唯一の犠牲者のいじめっ子が可哀想だと言う人もいるかもしれないが、
そもそも、いじめっ子がやってた行為を本人に返すだけなのだから、
いじめっ子にとって自業自得なだけの話なのである。
むしろ、他人の人権を傷つけた罪人の人権まで尊重しすぎる民主主義より、
ずっと公平で平等な扱いなのだ。
いじめられたくなければ、いじめっ子である事をやめればいい。
そうやって、皆がいじめっ子にならないように努めるようになれば、
自ずと、社会全体から、いじめは減っていく。
そうした潮流に逆らって、いじめっ子で居続けようとするような奴は、
それはそれで、皆のストレス発散の犠牲者になってくれるので、
立派に、世の中の役には立ってくれるのだ。

いじめっ子を敵に回したら、自分もいじめられるんじゃないか、
と心配して、いじめっ子を非難できない人も多いのだろう。
それで、どうしても、皆はいじめっ子の問題点からは目をそらし、
被害者や学校ばかりを責めるような傾向に走ってしまうのだ。
しかし、被害者や学校を敵に回しても、いじめられるとしたら、
果たして、皆の反応はどうなる？
いじめをひた隠していた学校が、マスコミにバレてしまった途端、
一体、どんな態度をとったと思う？
いきなり、手のひらを返して、いじめの事実を認めて、
それまで守っていたいじめっ子を突き放したではないか！
いじめを本気で無くしたければ、
被害者を敵に回した人間もいじめられる環境を充実させればいい、
と言う訳である。
いじめっ子側についても、被害者側についても、同じリスクならば、
皆は、当然ながら、
悪者のいじめっ子よりは、被害者側に味方するようになるのだ。
ノタリノタリとして、いっこうに、いじめが減らないのは、
実は、皆の悪への怒りの気持ちが足りない事が原因なのである。

ロシアのプーチン政権が、
隣の弱小国に軍事侵攻して、無理やり、自分に従わせようとした。
このニュースを見て、
学校では、いじめっ子に「プーチン」とあだ名をつけるのが流行った。
すると、双方から抗議された。
プーチン「私をいじめっ子扱いするな」
いじめっ子「僕をプーチンといっしょにするな」

いじめの真実

「他人をいじめるのはやめよう」
と、エラい人が言った。
なるほど、皆で「他人をいじめる」のをやめれば、
誰もいじめられないで済む世の中になる。
だから、その教えに素直に従う人たちがいた。
一方で、ぜんぜん従わない人たちもいた。
いじめをしない人たちは、いじめられても、やり返さなかった。
もし、やり返したら「他人をいじめた」事になってしまうからだ。
こうして、他人をいじめない人ばかりがいじめられる世の中になった。

いじめっ子が弱い子やおとなしい子を虐待する。
被害者に味方する人々がいじめっ子をやっつける。
すると、怒ったいじめっ子が、さらに復讐行為を仕掛けてくる。
復讐された側も反撃に出る。
「そんな事を繰り返しているから、いじめ合いはなくならないんだ」
と、偉い人が、悟りきったように、たしなめた。
だから、良識のある被害者サイドが、やり返すのを止めたとする。
しかし、ズルいいじめっ子側は、一緒に止めようとはしないし、
すると、被害者側ばかりが、やられてばかりになってしまうのだ。
偉い人の説教なんて、素直に聞いてやる必要はない。
偉い人の教えている平和の真理なんて、
ほんとは、ただ、善良な側の人間を我慢させているだけなのである。
卑怯ないじめっ子とは、結局は、連中が完全に無力化するまで戦うしかないのだ。

（ 解説 ）くたばれ、モラル思想
「被害を受けても、相手を責めない事」が素晴らしい態度だと見なす風潮があるが、

実際は、そういう善良な態度を取れる人間を押さえつけて、
被害が拡散しないように防いでいるだけ。
つまり、「被害を受けても、相手を責めない人」は、
ただ損しているだけで、何のメリットもないのだ。
それなのに、「被害を受けても、相手を責めない事」をやたらとモラルとして推奨したがるのは、
皆が、被害を受けても、いちいち、やり返さなくなれば、トラブルも減って、
支配する側の人間が、国や組織の管理が楽になるからである。
結局、「被害を受けても、相手を責めない事」を、さも美徳のように広めるのも、
善良な人間ばかりを騙し、押さえ込もうとする、支配階級側のパワハラなのだ。

「いじめられたら、やり返せばいんだよ」
と、大人たちが言った。
そこで、二度といじめをしないように、
いじめっ子の事を徹底的にやっつけてやると、
「たとえ、相手がいじめっ子でも、いじめちゃいけないよ」
と、同じ大人たちに怒られた。

皆は、性根が腐ったいじめっ子の事を、よってかかって、いじめ責め立てた。
悔しかったいじめっ子は、ウップンばらしの為、
自分が唯一勝てる、自分のいじめ被害者の事を、
よけい激しく、ますます、集中的にいじめた。
（「一番見苦しくて、卑怯ないじめっ子」より ）

「いじめっ子は、卑怯で、コソコソしていて、

影で悪い事をしていて、絶対に表には出て来ようとはしない」
と言う話で、ネットの掲示板が盛り上がった。
すると、
「皆でいじめっ子の悪口を書いて、お前らの方が陰険だ」
と言うクレームが匿名で書き込まれた。
「匿名で書き込みなんかして、
いじめっ子が裏でコソコソしてる、って話は当たってるじゃねーか」
と、皆は呆れた。
（「ほんとにいた、卑怯で見苦しいいじめっ子」より ）

いじめの現場を見れば、分かる話だが、
いじめられる人と言うのは、その組織内で一番立場の弱い存在であり、
必ずしも、悪い人だとか、無抵抗な人だとも限らない。
にも関わらず、自分が運良くいじめられていない事を、
「自分はいじめられないタイプの人間だ」と奢った考え方をするか、
「たまたま、いじめられていないだけだ」と慎重に認識できるかで、
その人のいじめ観もだいぶ変わってくる事になる。
（「いじめを正しく理解しよう」より ）

学校のいじめが社会問題になって騒がれた。
政府は、この問題を深刻視すると言ったが、
なかなか本腰を上げて解決には乗り出さなかった。
当たり前である。
どんなに子供たちが困っていても、彼らには選挙の投票権がないのだ。
選挙の時に一票を投じてくれない国民の問題など、
政治家たちにとっては、後回しなのである。
（「大人なんて信じられない」より ）

学校のいじめが社会問題になって騒がれた。
しかし、ほとんどの大人はあまり解決に乗る気ではなかった。
解決に取り組んだところで、自分の利益にはつながらなかったからである。
しょせん、大人なんて、そう言う生き物なのだ。
沢山の子供たちがいじめに悩んでいるはずなのに、
なぜ、いじめ被害者向けの対策本やグッズとかが販売されても、
大して売れないのだろうか？
理由は簡単である。
いじめ被害者たちは、
自分が被害者だとは大っぴらには思われたくないのだ。
そんな人たちが、堂々といじめ対策グッズを買い求める訳がないのである。
（「大人なんて信じられない」より ）

大多数の人たちが、世の中のいじめをあまり問題視したがらないのは、
社会や組織が、上のものが下のものを押さえつける上下関係で成立しているからだ。
社会や組織を安穏に存続させたければ、
上のものが下のものをいじめていても、つい見逃したくなってしまうのである。
もっとも、子供たちのいじめについては、その範囲内と言う訳でもない。
大人たちは、
弱い子がいじめられていても放置するかもしれないが、
いじめっ子が仲間に憎まれて、いじめられても、放置するだろう。
大人たちにしてみれば、子供間のいじめなんて、誰がいじめられても同じなのだ。
その事も気づかずに、調子に乗ってるのは、いじめっ子だけである。
（「スポーツ界でも問題になっている、困った社会構造」より ）

「たかが、いじめじゃないか」

と、大人たちは、学校のいじめを軽く見る。
そりゃあ、大人たちは、もう学校に行く事はないからな。
自分は、学校でいじめられる苦しみはもう絶対に味わう事はないから、
そんな軽々しく済ませられるのだ。
確かに、大人の世界にもいじめはあるよ。
でも、大人たちは、辛ければ、自分の意思で、
仕事も辞められるし、離婚もできるし、引越しもできるのだ。
子供は、自分の意思だけでは、辛くても、学校をやめられない。
結局は、親や教師や大人たちに言いくるめられて、
押さえつけられて、我慢させられ、
同じ学校に通い続けさせられるのだ。
三年間、六年間、あるいは、十二年間も、
いじめのある教室に居続けなくてはいけないのだ。

いじめっ子たちは、
10 年も 20 年も経って、自分の被害者と再会したら、
その被害者たちからも
「学生時代は楽しかったね」
と、ニコニコしながら語ってもらえる、と思っているらしい。
能天気なのもいいところである。
いじめなんかした人間は、
卒業してからだって、10 年後も 20 年後も、被害者に憎まれ続けるのだ。
いじめっ子は、いじめをした事で、
死ぬまで、誰かからの憎悪を受け続ける事になるのである。
それが心苦しいと思うのであれば、
いじめっ放しじゃなくて、自分がいじめた被害者に心から謝れ。
心の中だけで、自己満足に反省するんじゃなくて、態度で示せ。
いじめた分と同じぐらい、被害者に優しくしろ。
それがしたくないのであれば、一生憎まれても当たり前だ。

いじめっ子に忖度して、被害者は逆らえなかった。
いじめっ子に忖度して、周りの友達はいじめの止めに入らなかった。
いじめっ子に忖度して、先生はいじめっ子に注意できなかった。
いじめっ子に忖度して、学校はいじめの事実をもみ消した。
被害者が自殺して、全国ニュースになって、騒がれた。
学校は非難された。
先生は非難された。
周りの友達は非難された。
そして、いじめっ子も非難された。
「俺は、誰にも忖度してくれなんて言ってないぞ」
と、いじめっ子は慌てて、言い逃れをした。
こんないじめっ子の、どこに忖度する価値があるのだろう？
皆から善意や気遣いで忖度されていただけなのに、
調子にのって、それを受け入れていたようないじめっ子が、
やっぱり、一番悪い。
（「奈良判定ならぬ、いじめ判定」より ）

いじめっ子は、自分がいじめをしても、周囲から責められないのは、
自分が皆から好かれているからだ、と信じていた。
ある時、いじめっ子のいじめ行為が事件に発展し、
世間でもニュースになった。
いじめっ子の事をよく知らない部外者たちは、
平気で、いじめっ子をネットリンチで吊るしあげた。
周りの人間が、いじめ行為を責めないのは、
いじめっ子が好かれているからではない。
身近にいる人間は、対人関係をこじらせたくないから、
深入りして、干渉したくないだけなのである。
ネットリンチを仕掛けてくる赤の他人の反応の方が、
ずっと正直で、真実なのだ。
（「ネットは正直者」より ）

客観的にモノを考えられる人は、自分がいじめられても、
「いじめをする奴は、自分がいじめられても自業自得だ」
と言う発想のもと、自分をいじめた人間のみを糾弾する。
自己中心的な人は、自分がいじめられた時、
「オレはいじめられたんだから、オレも誰かをいじめていいはずだ」
と言う考え方をする。

実際には、ほぼ全ての人間は、長い人生において、
いじめをした事もあるし、いじめられた事もある。
多くの人が、いじめっ子の事をきつく怒れないのは、
自分もいじめっ子の一人だと言うやましさがあるからなのだ。
そして、いじめっ子もまた、その弱みに付け込んで、
自分が責められないように、うまく立ち回るのである。
大多数の人は、いじめっ子（ 加害者 ）の事をはっきり非難するよりも、
いじめられた辛さを我慢する事の方を選び、
他の被害者にも同じ態度を強いる事で、
自分のいじめの罪を責められないで済む道を選んでしまうのである。
これじゃあ、いじめが無くなるはずもない。
だからこそ、全てのいじめを一緒くたにするのではなく、
いじめの程度によって格差をつける事にしよう。
軽いいじめ行為や自ら謝罪する者には赦しを与え、
悪質ないじめっ子や、いじめを正当視したがる人間に対しては、
情け容赦なく怒りや罰を与えてもいい事にする。
そうする事によって、大多数の人々がいじめの罪悪感から解放され、
本当に悪質ないじめっ子たちと、真っ直ぐに対峙できるようになるはずだ。
これが、いじめっ子カーストである。

大多数の人にとって、自分にさえ影響が無ければ、

弱い子がいじめられようが、
いじめっ子がいじめられようが、
どちらでも構わないのである。
弱い子がいじめられる社会は、
現実的だが、悪い社会である。
いじめっ子が自業自得でいじめられる社会は、
正しい社会だが、その実現には、なぜか誰も消極的である。

いじめ対策の基本は
「いじめをしない、させないようにしよう」
であるが、それだけじゃ、いじめが無くなるはずがない。
何故ならば、「いじめをしちゃった」ら、それでもうおしまいだからである。
本当に考えなくてはいけないのは、
「いじめをしちゃったあと、されちゃったあと」の事である。
性善説的に「させない、やらない」前提の話しかしないから、
いじめの問題を、皆はうまく対処できないのだ。

いじめの問題を、
「被害者ｖｓ加害者」の構造で考える事ほど、
ナンセンスな事はない。
なぜなら、ほぼ全ての人間が、
被害者も加害者も、どちらの立場も経験しているはずだからだ。
加害者（ いじめっ子 ）を、区別なく、全員、断罪する事は、
世界中の全ての人間を咎める事になってしまう。
誰だって、自分は悪者扱いはされたくない。
だから、誰もが、きっぱりと、
「いじめっ子が悪い」とは主張できなくなってしまうのだ。
被害者対加害者、と言う二元構造で考えるのは、やめる事にしよう。
むしろ、良い加害者と悪い加害者、と言う二元構造を採択するのだ。
良い加害者とは、

自分の罪を反省できたり、軽度のいじめしかしてない加害者である。
悪い加害者とは、
自分の悪事を無理やり正当化したり、悪質すぎる加害者の事だ。
いじめの首謀者も、悪い加害者という事になる。
前者の事は、より寛容に許すべきであるし、
後者には、いっさい妥協する必要はない。
また、悪い加害者であっても、
反省して、罪を償う姿勢を見せるならば、容赦もすべきであろう。
誰だって、内心は悪者にはなりたくないから、
悪い加害者にならないように、皆で努めるようになりだすはずだ。
悪い加害者さえ居なくなれば、いじめが悪化する事もないのである。

「いじめられっ子なんて可哀想じゃない」と言う奴は、
きっと、自分がいじめられた時に助けてもらえなかった連中だ。
自分だけがいじめられっ放しだと悔しいから、
他のいじめられっ子に同情できないのである。
「いじめられっ子は可哀想」と言う奴のほとんどは、
いじめられっ子に対して、優越感を持っている。
自分が、不幸ないじめられっ子じゃない事を前提に、
上から目線で「可哀想」と言ってるのだ。
本心から同情しているのだったら、
口先だけで「可哀想」と言うのではなく、
いじめられっ子を救うために、きちんと行動もとってみろ。
いじめ撲滅運動にほんの僅かでもいいから協力するとかさ。

いじめっ子カーストの提唱され始めの頃には、
あちこちから反対意見が飛び交った。
政府が、いじめっ子カーストの導入を黙認すると、
いっせいに反対派の声は消えてしまった。
どうせ、新しい思想や方針に反対する連中なんて、

自分個人の意見として反対しているのではなく、
ムードに流されて、反対しているだけなのだ。
新しい思想や方針が、多数派や公認のものになると、
たちまち反対するのを止めてしまうのである。

世の中にはびこるいじめっ子カーストに頭にきて、
とうとう、一人のいじめっ子が反論を開始した。
そのいじめっ子の事を、沢山のいじめっ子が、匿名で応援した。
ところが、そのいじめっ子はたちまち劣勢になった。
彼を応援する人間は、たちまち居なくなってしまった。
いじめっ子なんて、そんな生き物なのである。
自分から最初に名乗り出たりはしないくせに、
後ろからだったら、喜んでついていくのだ。
そして、先頭が蹴つまずいたら、
代わりに先頭に立つ訳でもなく、自分に被害が及ぶ前に逃げ出すのである。

差別や偏見との戦いとは、
実は、個人の価値観同士の戦いでもある。
差別する側、偏見する側は、
彼らなりに、自分の認識の方こそが正しいと思い込んでいるからだ。
そして、そんな差別や偏見と戦っている側の人間も、
実は、自分たちも、相手と対極の価値観を訴えているだけに過ぎず、
それもまた、個人の価値観だと言う事に気付いていない場合が多いのである。
だから、古い差別や偏見が駆逐された時、今度は新しい差別や偏見が台頭し、
結局は、争いがおさまらなかったりもするものなのだ。
こんな事を偉そうに書くと、
「お前の推奨するいじめっ子カーストだって、
そんな差別と偏見まみれの個人的価値観の一つに過ぎないじゃないか」
と言われそうだが、確かにそうなのかもしれない。
しかし、いじめっ子カーストの対極の位置にある思想と言うのが、

「自分の価値観が常に正しくて、
間違っている他の奴らの事は、いくらでも踏みにじってもいい」
と言うものなのであり、
いじめっ子カースト主義の戦い方と言うのも、
この自己中心思想へと、同じ事をやり返しているだけの話なのだ。
もし、いじめっ子カーストに対して、本気で怒っている人がいるとすれば、
その人は
「自分の価値観が常に正しくて、
間違っている他の奴らの事は、いくらでも踏みにじってもいい」
と言う考え方の持ち主だと言う事になる。
（「差別や偏見の正体」より ）

いじめをする理由（わけ）

卑劣ないじめをしている現場が、他の皆に見つかった。
「これは、いじめじゃないよ。遊んでただけだ」
と、いじめっ子が慌てて弁解した。
すると、皆は言った。
「そうか。これが遊びかよ。
　だったら、お前にも同じ事をしてやるよ。ただの遊びなんだろ」
こうして、いじめっ子は、皆から同じいじめを受けた。
いじめの事を、いじめっ子は、
遊びだのイジリだのフザケだのと言い換えて、
意地でも正当化しようとするものだが、
だったら、同じ行為をいじめっ子に行なっても構わないのである。
本人自身が、ただの遊び、イジリ、ふざけだと言ってるのだから。
「自分はする側に回っても、される側にはなりたくない」
なんて、都合のいい理屈は、本来、成立しないのだ。

ある教室にいじめっ子がいた。
「いじめられる方が悪いんだ」と、いつも、彼は言っていた。
やがて、クラスの皆は、いじめっ子の横暴な態度に耐えられなくなって、
皆でいじめっ子の事をいじめるようになった。
「いじめられる方が悪いんだ」と、クラスの皆は言った。

「いじめられたくなければ、抵抗すればいいんだ」と、いじめっ子は言った。

いつも、その子にいじめられていた被害者が、
あまりのいじめに耐えかねて、抗うような態度を見せた。
「逆らいやがって、ナマイキだぞ！」
と怒って、いじめっ子はよけいにいじめた。

クラスメートたちは、
「デブがいたら、教室の景観が悪くなる」と言って、
いつも、小太りの同級生の事を笑い者にしていた。
ある日、このクラスに、まるまる太った巨漢が転入してきた。
クラスメートたちは、
その転校生の前ではビクビクしていて、
その子の事は絶対にからかったりはしなかった。

先輩にいじめられている男子生徒がいた。
彼は、クラスの弱い子をいじめる事で、うっぷんを晴らしていた。
ある日、クラスでは、横暴な彼に対して、大反発が起こった。
クラスの皆は、弱い級友をかばって、彼を弾圧するようになった。
彼は、先輩からも同級生からもいじめられて、
踏んだり蹴ったりになった。

小学生のガキ大将のオチンチンに毛が生え出した。
ガキ大将は自分の体の成長に不安を感じ、
いじめをしているフリをして、
いじめられっ子のパンツを脱がし、
その子のオチンチンの様子をこっそり確認した。

「オレは、子供の自由を縛る社会への反抗として、悪い事をやってるんだ」
と、不良のいじめっ子は豪語した。
「自分より弱くて、抵抗もしない子供をいじめといて、よく言うよ」
と、皆は思った。

「いじめられる側にも原因があるんじゃないか？
だから、いじめる側ばかりが悪いとも言えないんじゃないか？」
と、もっともらしく主張する人がいた。
その意見がムカついたので、皆で、その人の事をいじめた。
その人は慌てた。
「お前がいじめられるのは、
『いじめられる側にも原因がある』なんて言ったからだよ。
いじめられるお前自身が原因なんだ！」
と、皆から責められてしまった。
その人は、グダグダと言い訳して、皆のいじめ行為を否定して、非難した。
「自分に都合のいい事ばかり、言ってるんじゃねえ！
『いじめる側ばかりが悪くない。いじめられる側にも原因がある』
と言ったのは、お前自身だろ！
だったら、いじめる側を責める前に、
まず、自分に問題があった事を素直に認めて、その点を改善しろよ！」
と、ますます、皆の激しい怒りを買って、その人はもっといじめられた。
（「自業自得のいじめ観」より ）

自分がいじめられたから、自分も誰かをいじめてもいいはずだ、

と考えている人も多いのかもしれない。
しかし、そんな発想は何の解決にもなっていないのだ。
あんたがいくら弱い人間をいじめようと、
あんた自身も、これからだって、
もっともっと、もっともっと、いじめられるのである。
いじめられて悔しいのであれば、
いじめた相手にやり返す事や、自分へのいじめをなくす方法だけを、
真剣に考えるべきだ。
その事こそが、その人の人間的成長にもつながるのである。
とりあえず、自分より弱い奴をいじめて、気を紛らわしているような人間は、
何の努力も利口さも見出せないし、
いじめられる側よりも情けない存在である。
（「真実を見つめよ」より ）

「オレたちはいじめてるんじゃない。
一緒に遊んでやってるだけだ。可愛がってあげてるんだよ」
と、いじめっ子たちが笑いながら言った。
「我々もネットリンチしてるんじゃない。
いじめっ子と遊んでやってるんだよ。
こいつらのやってる事をそっくり真似てやってるだけさ」
と言って、皆は、ネットに、
いじめっ子の悪口や個人情報を書き込んだ。

「いじめてるんじゃない。これは愛のムチなんだ」
と、いじめっ子や暴力教師、パワハラ上司や虐待親たちは言い張った。
そこで、皆は、ネットリンチで、彼らをガンガン叩きのめした。
「これはネットリンチなんかじゃない。
悪い事をした連中に、愛のムチで、世の常識を教えてやってるんだ」
と、皆は言ってやった。
ネットリンチでボロクソにやっつけられたいじめっ子に暴力教師、パワハラ上司や虐待

親たちは、
愛のムチを受けた事に、感謝の態度を示す訳でもなく、
ただ黙り込み、卑怯にも、隠れ逃げ続けた。
こいつら、自分に都合のいい事ばっかり言いやがって、ほんと、いい加減にしやがれ！
（「愛のムチだとォ！！！！？」より ）

「いじめられたら、自分で相手にやり返せばいいんだ。
思いっきりケンカすれば、お互いにスッキリできるさ。
それが出来ず、いじめられっぱなしで、黙ってるいじめられっ子の態度が問題なんだ」
と、元気よく、いじめっ子が発言した。
「バーカ。自分の考えだけで、話を決めつけるな。
いじめられっ子の方は、別にお前とケンカしたいわけじゃないんだよ。
いじめられっ子の方は、＜皆、仲良くしよう＞と言う社会ルールを守りたくて、
お前にやり返さないようにしているだけだ。
お前の方こそ、勝てそうな相手にばっかりケンカを仕掛けたりしないで、
＜皆、仲良くしよう＞と言う社会ルールにきちんと従え！」
と、まっとうな認識を持った人間に言い返された。

「いじめたって、やり返してこないんだ。
そんな奴はいじめられても、仕方ないじゃないか」
と、いじめっ子たちは主張した。
いじめが社会問題になって、全国的に大いに騒がれた。
あちこちで、いじめっ子を非難し、憎悪する活動が巻き起こった。
いじめっ子代表として、いじめっ子を弁護する人は現れなかった。
やり返してこないんだから、
いじめっ子はいじめられても仕方ないのである。

「いじめられたくなければ、きちんと、そう言えばいいんだ。
何も言わないで、いじめられっ放しの方が悪い」
と、いじめっ子たちが言い訳した。
いじめの事件が続発し、世間ではいじめっ子に非難が集中した。
いじめっ子たちは身を潜めて、ただ非難の嵐が止むのだけを待ち、
何も発言しようとはしなかった。
こんないじめっ子たちの事は、ほとぼりが冷めてからだって、
いくらいじめてもいいのである。

「いじめられたくなければ、
被害者がもっとシャンとして、いじめられないように努力すればいいんだ」
と、いじめっ子が、偉そうに言った。
全く、その通りである。
だから、いじめっ子の事も、いくらでもいじめていいのだ。
いじめっ子が、もしいじめられたくないのであれば、
いじめっ子自身がもっとシャンとして、
いじめっ子である事をやめるように努力すればいいのである。

「いじめてるんじゃない。
一緒に遊んでやってるだけだ。
それをいちいち、いじめだと認識する方が問題なんだ」
と、いじめっ子がしゃあしゃあと言った。
「いじめっ子カーストも、いじめじゃないよ。
＜いじめっ子＞をネタに、遊んでやってるだけさ。
だから、いじめっ子カーストにいちいち文句をつけるな」
こう言い返されて、
誰も、いじめっ子カースト（ いじめっ子いじめ ）を非難できなくなった。

「ナマイキだから、いじめられるんだよ」
と、いじめっ子が言い放った。
「人の事を、偉そうに上から目線で、
『ナマイキ』とか評価しているお前の方がずっと生意気だよ！」
と言って、皆でそのいじめっ子をいじめた。
（「「上から目線」いじめっ子」より ）

「お笑い番組やコメディ映画で、いじめの場面があっても、
皆は笑って、受け入れてるじゃないか。
それなのに、日常生活でいじめをしたら、なんで怒られるんだよ」
と、いじめっ子が賢人ぶって、訴えた。
「バーカ。
番組や映画でいじめられている人たちは、
そのいじめられ方に見合った分の報酬やお金も貰ってるんだよ。
偉そーに、自分のいじめを正当化したいんだったら、
お前も、いじめの被害者にお金を払え！」
と言い返された。

「怠け者だったり、時間にルーズだったり、集団行動を取れなかったり、
そんな奴らは、自分勝手で、ほんとに腹がたつ。
こんな奴らは、いじめられて当然だ」
と、いじめっ子が言い切った。
「何言ってやがるんだ。
他人の態度にいちいち干渉するお前だって、
人に自分の意見を押し付けて、自分勝手じゃないか。

お前も同族だから、いじめられても当然だ、って事になるな」
と、いじめっ子嫌いたちに正論を言い返された。

「学校内のトラブルに、学校の外の連中が口を挟むな」
と、いじめっ子や暴力教師たちが言った。
「俺は、しつけをしてるだけだ。家庭の問題に他人が口を挟むな」
と、児童虐待者やＤＶ旦那が言った。
「この会社は俺のものだ。この会社のやり方に、第三者が口を挟むな」
と、パワハラ社長やセクハラ上司が言った。
「ちょっと、待ったあ！
お前らさあ、学校の一員だったり、家族だったり、会社員である前に、
日本国の国民の一人なんだぜ。
民主主義の日本国じゃ、
国民全員の人権が尊重されていて、他人への虐待行為は禁止されている。
まずは、お前たちも、国民としての義務を守れよ。
たとえ、学校の中だろうと、家庭の中だろうと、会社の中だろうと、
もっと大きな＜国＞という枠組みの中で、他人への虐待行為はいけないんだよ！
それができないとか、間違ってるとか言い張りたいんだったら、
お前ら、日本の国民をやめちまえ！
さっさと、この国から出ていけ！
国民虐待が横行している、どっかの独裁国にでも移住すればいいんだよ！」
と、皆からガンガン怒られて、
自分の「俺たちの問題に口を挟むな！」主張が本気で正しいと思っていた連中は、
何一つ言い返せなくなった。
（「「俺たちの問題に口を挟むな！」主張の根本的間違い」より ）

「いじめをして、何が悪い！
自分の身を自力で守れない被害者の方が問題なんだ」
と、いじめっ子が開き直った事を主張した。
世の中は、その意見を採用する事にした。

すると、社会の治安はいっきに悪化した。
人々は、他人を騙し、踏みにじり、自分の利益さえ守ればいいと考え出した為、
詐欺や泥棒行為が横行して、他人とは少しも安心して接せられなくなった。
世の中には、確かに、いじめも存在しているかもしれない。
しかし、それ以上に、他人にも優しくしようと言う愛情もあるからこそ、
皆は安全して暮らしていけるのである。

「世の中は弱肉強食なんだ。
いじめる奴は、いじめをしてもいい特権者なのさ」
と、うそぶくいじめっ子がいた。
人間社会の構造は実際には弱肉強食ではない。
しかし、いじめっ子が、もし本気でそう考えたいのであれば、
人間社会だって、動物社会の弱肉強食ルールを適応すべきである。
動物社会の群れの中の強い奴、いわゆるボスは、
群れを守るために、常に、他の群れのボスと戦うものだ。
皆は、いじめっ子たちを一堂に集めると、無理やり戦わせて、
それを観戦して楽しむ事にした。

「いじめが良くない事だとは分かってる。
でも、カッとなった時、気持ちが抑えられないんだよ」
と、いじめっ子が言い訳した。
「カッとなっても、気持ちを抑えられる人はいくらでもいる。
要するに、お前が他の人よりも劣ってる、って話だろ。
だったら、気持ちが抑えられるように、もっと努力しろよ」
の一言で片付けられた。

「いじめられたくなければ、きちんと、そう言えばいいんだ。
何も言わないで、いじめられっ放しの方が悪い。
きちんと言ってくれたら、オレたちだって、いじめをやめるよ」
と、もっともらしく、いじめっ子が主張した。
「お前ら、やっていい事と悪い事の判断が、自分でできないのかよ。
被害者が『やめて』と言おうが言わまいが、いじめはやってはダメなんだよ。
それとも、お前たちは、
相手の態度を伺いながら、いじめても大丈夫そうだったらいじめる、
ものすごい卑怯者なのか？」
と、よけい徹底的に怒られた。

「いじめは悪い事だと言われても、なぜ止めないんだ？」
と、いじめっ子に聞いてみた。
「いじめが悪いと言うのは、ただのタテマエさ。
実際の世の中は、いくら、いじめをしてもいいんだよ。
このホンネとタテマエをうまく使い分けられないようだから、
そんな奴がいじめられるのさ」
と、狡猾ないじめっ子が答えた。
「じゃあ、ホンネとタテマエを使いこなせなかったら、
いじめっ子もいじめていいんだな」
いじめをした時点で、
その人の「いじめは悪い」と言うタテマエは成立しなくなる。
なぜなら、ほぼ全てのいじめっ子は、いじめをした理由を聞かれると、
素直に「いじめは悪い。自分が一番悪い」と認めたりはせず、
「被害者の方が悪い」とか「社会環境に問題がある」とか言い訳して、
なんとか罪逃れしようとするからだ。
いじめっ子は、いくら、いじめてもいい事になった。

いじめっ子の末路

この「いじめっ子の末路」の章の内容が一番気になる人と言うのは、
やはり、いじめっ子なのだろうか？
他の章には、いじめっ子にもっと不利な事や、
あるいは、一抹の救いになるような事も書かれてあると言うのに。

いじめっ子カーストの発想が、世間に広まり出した。
誰もが、いじめっ子をいじめる事だけは躊躇しなくなった。
大衆の中に無意識に潜んでいる負の感情、怒りとか憎しみとかは、
いじめっ子にだけ向けられ、集中されるようになり、
その結果、これまでは、ストレスのはけ口として虐待されてきた少数派（マイノリティー）、
弱者とか異人種、変わり者、お人好しなどは一切いじめられなくなり、
いじめっ子だけが、いくらでも、いじめていい対象となった。
いじめっ子をいじめる連中を、いじめっ子扱いにして、いじめれば、
その人もいじめっ子扱いされて、いじめ返されるので、
いじめっ子いじめの風潮に、わざわざ楯突くような愚か者も現れない。
加えて、自分がいじめられたら溜まったものじゃないので、
まともな認識の持ち主なら、
いじめっ子以外の事はいじめないように、気を付けるようにもなった。
こうして、社会からは、どんどん、いじめが減っていく事となったのだ。
相変わらず、少数派（マイノリティー）をいじめようとする強情な独り善がりだけが、
自業自得で、いじめられる世の中が到来した。

彼はいじめっ子だった。
在学中は、下級生やおとなしい同級生を散々いじめまくった。
世の中には上下関係があって、
弱い立場の人間はいじめられて当たり前だと考えていた。
やがて、彼は学校を卒業した。
就職先では、新人は彼一人だった。
ふてぶてしい性格の彼は、先輩から散々いびられる事になった。
少子化のせいで、彼以降の新人はいっこうに採用されず、
彼はいつまでも一番下の後輩のままだった。
（「こんないじめっ子にはなりたくない」より ）

学校はストレスがいっぱい溜まる空間である。
子供たちは、おとなしい子や弱い子をいじめる事でストレスを発散して、毎日を乗り切った。
いじめられた子供は、脱落して、次々に不登校となり、引きこもりやニートになった。
やがて、不登校になったいじめ被害者を除き、
子供たちは学校を卒業し、社会に出ていった。
待っていたのは、人手不足で悩む職場の、超過労の労働生活だった。
いじめが原因で引きこもりやニートになった人たちには、
政府の恩恵で、優先して、生活保護が受けられる事になった。
社会人になったいじめっ子たちは、結果的に、
自分たちがいじめた子の生活費の分まで働かされる事となった。

「世の中は競争だ。
他人に優しくしようなどと考えてる奴がいじめられるんだ」
と言って、いじめをしている男がいた。
ある時、その男は、優しさの無い国へと引っ越した。
その国では、彼は、他人からガンガンいじめられまくるし、
彼のいじめ行為も容赦なく糾弾された。
今までいた国（ 日本 ）で、彼が悠々といじめができたのは、

周りの人間が、優しさでかばってくれていたからと言う事に、
今更になって気付かされた。

「子供のやる事なんだから、大目に見なくっちゃ！」
と言って、その少年はいじめや非行を繰り返していた。
やがて、その少年が大人になった。
政府は、
その元・少年に対して、子供たちが何かをしても、いっさいを容認する事にした。
元・少年は、悪ガキたちによって、
散々、モノを盗まれたり、不意打ちで殴られたりした。
元・少年が怒って、逆に悪ガキたちを叩いたりすると、
元・少年の方が暴行罪を宣告された。
（「こんないじめっ子にはなりたくない」より ）

「オレだって、子供の頃のいじめの事は反省してるんだ」
と、大人になった元いじめっ子は、善人ぶって、思った。
「うるさい！ 反省だけなら、サルでもできるんだよ！
本当に悪いと思ってるんだったら、
きちんとした形にして償えよ。
心の中だけで反省してるんじゃ、
何も反省してない奴らと変わらないんだよ！」
と、よけいに怒られた。
（「反省するよりも罪悪感を持つよりも重要なこと」より ）

「いじめが良くない事だとは分かってる。

でも、カッとなった時、気持ちが抑えられないんだよ」
と、いじめっ子が言い訳した。
「カッとなる気持ちも抑えられないなんて、ケダモノと変わらないじゃないか。
だったら、気性の荒い家畜と同じ処置をしなくちゃいけないな」
こうして、余計な言い訳をしたいじめっ子は、
去勢されて、キンタマを抜かれた。

基本的な能力（ スキル ）が同じ程度だった場合、
大人たちの組織だって、
いじめを沢山してきた学生よりも、
いじめをしていない学生の方を雇用したがるものだろう。
学生時代に、自分本位のいじめ精神が染みついてしまった人間などに、
社会に出てからも、いじめを振りまかれたりしても、迷惑なだけなのである。
いじめ能力が大いに迎合される大人の組織なんて、
詐欺集団や暴力団まがいのブラック企業だけだ。
しかし、ブラック企業は、所属してからのデメリットも大きい。

ある学校に不良のいじめっ子がいた。
誰も彼には逆らわなかったし、責めもしなかった。
まだ子供だからと言う理由で、甘くしてもらっていたのである。
やがて、そのいじめっ子が高校を卒業した。
社会に出てからも、カツアゲしたり、暴力を振るうと、
いきなり、被害者によって、警察に訴えられた。
子供の時と違って、もう容赦してもらえないのだ。
被害者の方も、いじめっ子の横暴にはさんざん頭にきていたので、
いっさい、示談などをする気はなかった。
甘ったれたいじめっ子は、
社会に出るなり、いきなり前科がついてしまった。
　ーーーーーーーーーーーーーー
刑務所から出てきたいじめっ子は、

いきなり、被害者の元へ押しかけた。
自分を警察に訴えた件で、文句を言いに行ったのだ。
学生の頃ならば、こうやって威嚇すれば、
被害者はもう口を閉ざして、言いなりになるはずだった。
ところが、脅された被害者は、
またもや警察に「脅迫された」と言う旨の被害届を出した。
それは受理され、裁判に負けた元いじめっ子は、
再び、刑務所に逆戻りとなってしまった。
こうして、前科がどんどん増えていくいじめっ子など、
マトモな企業や会社は相手にしてくれるはずもない。
こんな嫌われ者のいじめっ子でも引き取ってくれる場所は、
ブラックな犯罪組織ぐらいなものなのだ。
そこで、いじめっ子は、下級工作員として取り込まれ、
あとは、ずる賢い幹部上司たちに奴隷同然にこき使われた挙句、
最後はのたれ死にするのが関の山なのだ。

学生時代に自分をいじめた子供と再会したら、
ニュースになっている子供のいじめ自殺の話を振ってみよう。
もし、その元いじめっ子が、
「ひどい話だよね」とか、被害者に同情めいた事を口にしたら、
すかさず、こう返してやるのだ。
「何言ってるんだよ。
お前はいじめた側の人間だろ。
自殺した子が気の毒だと思うのなら、
まずは、お前がいじめた私に謝れ」
学校のいじめ自殺が問題になるたびに、
元いじめっ子だって、気まずい立場になるのである。

いじめっ子カーストが採用されて、
「いじめっ子のボス」だけはいじめても良い事になった。

あるずる賢いいじめっ子は、
自分はいつも後ろから指示するだけで、
別の子をいじめっ子の実行犯に仕立てる事で、
自分がいじめっ子扱いされるのを免れていた。
いじめっ子カーストが施行された結果、
裏から指示する人間が一番の「いじめっ子のボス」だと判定された。
一転して、そのいじめっ子だけが皆からいじめられるようになった。
いじめっ子カーストには、卑怯な裏工作や小細工ほど通用しないのだ。

学校のいじめで、被害者が自殺した。
その被害者は、幽霊になって、いじめっ子たちのたむろしている場所に現れた。
「僕をいじめた張本人は誰だー？」
と、幽霊は恨めしげに、いじめっ子たちに尋ねた。
「俺じゃない。俺は、命令されて、仕方なく、いじめただけだ。
命令に逆らうと、俺もいじめられるんだ」
と、一人目のいじめっ子が言い訳した。
「俺も違う。他の奴がいじめていたから、混ざっただけだ。
皆と一緒に行動しないと、俺もいじめられるんだ」
と、二人目のいじめっ子が言い訳した。
「俺のせいでもない。なんとなく、誰かをいじめないと、いけなさそうな雰囲気だったんだ。
それで、俺はいじめを指揮しただけだ。
指揮しなきゃ、俺がいじめられていたかもしれないんだ」
と、最後にいじめっ子のボスが言い訳した。
「ほざくなー！ 何でもかんでも、人のせいにするな！
いじめの先頭に立った貴様が悪くなければ、誰が悪いって言うんだ？
貴様が指揮をとらなければ、誰も僕をいじめなかったんだぞ！
他の皆だって、いじめをしなかったし、いじめの陰に怯えずに済んだんだ！」
幽霊は、いじめっ子のボスに飛びかかった。
そのまま、いじめっ子のボスの首根っこを掴んで、地獄に突き落とすと、
いじめっ子のボスを踏み台に使って、その幽霊自身は天国に昇っていった。

（ 解説 ）幽霊が加害者を祟る訳
弱いものをいじめて、殺したり、自殺させた者は、現世をぬくぬくと生き抜けたとして

も、死んだ後に、被害者の天国行きの踏み台に使われて、必ず地獄に堕ちるよ。

たくましい被害者

いじめられた少年が、兄弟の前で、
いかに自分が不当にいじめられたかを熱弁した。
「全く、お前の言う通りだ。
いじめっ子に対しても、そう言ってやればいいじゃないか」
と、兄弟は言った。
すると、いじめられた少年はこう返した。
「バカ。いじめっ子にこんな事を言ったら、よけいいじめられるじゃないか」

いつも、仲間に命令されて、
パシリをやったり、皆の分の宿題をやったりしている少年がいた。
彼は、少しも嫌そうな態度を見せた事はなかった。
皆は、彼の事を「自分の意思を持たない未熟な奴」だと思っていた。
「パシリをやらされて、辛くないのかい？」
と、その少年に尋ねてみた。
その少年は、すまして言った。
「あいつら（ いじめっ子 ）は、赤ちゃんなんだ。
自分で自分の事もできないんだからね。
大人のボクがベビーシッターになって、代わりにやってやるしかないだろう？」

社会に出てからも、嫌な事や対人関係の揉め事はあって、ストレスが溜まるものだ。
その男は、イライラが膨れ上がって、もう限界だったが、
家族や職場仲間相手にブチ切れて、大げんかして、

家庭も仕事もグチャグチャにする訳にもいかなかった。
こんな風に追い詰められた人間が、通り魔犯罪に走るものなのかもしれない。
しかし、男は、無差別に他人を襲う行為だけは、グッと堪えた。
ＳＮＳで、いろいろ調べてみたところ、
昔、学校で自分をいじめた奴が、自分の近所に住んでいた、と言う事が判明した。
そこで、男は、その昔のいじめっ子に対して、愉快犯的犯罪を仕掛ける事にして、
例えば、家の壁にいたずら書きしたり、車をパンクさせたりして、
ストレスを発散させる事にした。
おかげで、男は自分の今の生活環境を壊さずに済んだし、
無関係な人間が通り魔的犯罪の被害にも会わずに済んだ。
いじめっ子は、誰に嫌がらせされているのかが、さっぱり分からなかった。
ちなみに、愉快犯が警察に捕まる確率はたいへん低い。

いじめられっ子が、10 年以上も経ってから、
学生時代のいじめっ子に復讐した。
「昔の事をいつまでも忘れないで、なんて暗い奴だ」
と、世間からは嘲笑されてしまった。
そこで、いじめられっ子は、
自分以外の人を虐げたいじめっ子であろうと、
＜正義の制裁＞という名目で、
誰が被害者かとは関係なく、誰彼構わず、復讐してやる事にした。

いつも、いじめっ子たちにパシリをやらされて、
飲み物や食べ物を買いに行かされていた少年がいた。
ある日、いじめっ子たちは、いっせいに腹痛を訴えて、
病院に入院してしまった。
パシリの少年が、食べ物を買いに行かされた際、
買ってきたものに毒を注入してから、いじめっ子たちに手渡したのである。
自分たちを恨むであろう人間に、
呑気に、食べ物を買いに行かすような連中の方がバカなのだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー
以上の話を知って、
部活の先輩にいつも昼飯を買いに行かされていた後輩が、
真似してみる事にした。
しかし、その時に限って、先輩は大変に優しくて、
後輩にも、買ってきた昼飯を分けてくれた。
毒入りでも、先輩の命令だから、後輩も食わない訳にはいかなかった。
翌日、その後輩も病院送りになった。

「いじめられたら、自力で戦え！」
と言う持論を主張する男がいた。
実際に、彼はそのようにしたのだ。
自分がいじめられたと感じた場合は、
どんな相手でも容赦せずに、彼は相手をいじめっ子扱いして攻撃した。
彼の方の誤解であった時も、助けてくれなかった傍観者に対してもだ。
その結果、最初は彼に好意的だった人たちも、彼に近づかなくなった。
触らぬ神に祟りなしなのである。
彼は一人ぼっちになった。
事実上、「仲間はずれ」「村八分」と言ういじめ状態なのだが、
彼自身は自覚してないみたいなので、気に咎める必要もないのである。

彼は学校の人気者で、先生にも信頼された優等生だった。
だから、彼がおとなしい同級生をいじめても、誰も気にしていなかった。
ところが、彼にいじめられていた子が自殺してしまった。
遺言には、加害者として彼の名が記されていた。
学校が防波堤になってくれたので、
かろうじて、彼が直接責められる事はなかったが、
噂で、自殺原因は彼だ、といっぺんに広まってしまった。
それまで、彼の事をチヤホヤしていた大人や友達は、
とばっちりを恐れて、彼のそばから急に離れていった。

それでも、彼がかつては優等生で人気者だと知っていた人たちは、
無視はしても、積極的に嫌がらせするような真似はしなかった。
本当に怖いのは、彼と全く無関係の赤の他人たちなのだ。
連中は、彼の事を「悪い加害者」だとしか思っていない。
ネットの情報で真犯人を知った正義漢たちは、
彼の事をいつまでもネットリンチし続けるのである。
それは、彼が死ぬまで続くイジメなのだ。
　ーーーーーーーーーーーーーーー
あるいじめられっ子が、
自分が自殺すれば、世間が仇を取ってくれる、と判断した。
そして、本当に自殺しちゃったのだ。
もちろん、憎いいじめっ子の名前を遺書に記して。
しかし、その子の親は弱腰で、
我が子が自殺に追い込まれたにも関わらず、
周囲の圧力に負けて、訴えもせず、泣き寝入りしてしまった。
その子の自殺は無駄死にに終わった。

人ごとじゃない

いじめっ子といじめられた被害者が争っていた。
「よくも、僕をいじめたな！ 僕もお前の事をいじめてやる！」
と、被害者は言った。
「うるさい！ お前が悪いから、いじめられるんだ！」
と、いじめっ子は言い返した。
それを、第三者が冷ややかに見ていた。
「どっちもどっちだよ」
と、達観した態度で、第三者が笑った。
第三者を見て、いじめっ子も被害者もムカッとなった。
それからは、いじめっ子と被害者は手を結んで、
一緒に、その第三者をいじめる事にした。
いじめっ子と被害者の争いはおさまった。

「いじめられる子と言うのは、要するに、
人と上手にやっていくコミュニケーション能力が劣っているんだ」
そのように、得意げに分析してみせる評論家がいた。
しかし、この評論家の主張に従えば、
妻の理不尽なワガママに振り回される旦那さんも、
小狡い上司に仕事を押し付けられる部下も、
個人的感情から姑にいびられる嫁も、
近所トラブルで悩まされている人たちも、
み〜んな、コミュニケーション能力不足だと言う事になる。

悪質ないじめっ子に対して、ネットリンチの攻撃が始まった。
「当事者たちの問題に、他人が干渉すべきではない」
と、誰かが書き込んだ。
「これ（ ネットリンチ ）は、いじめっ子とオレたちの問題だ。
お前こそ、他人なんだから干渉してくるな！」
と言う反論レスがついた。

「いじめられたら、なぜ抵抗しないんだ。
抵抗しないから、いじめられるんだ」
と、ある人が力説した。
「だったら、お前は本当に抵抗できるのかよ？
それだったら、お前の事を皆でいじめてやる」
と言われると、
その人は、抵抗しないで、慌てて逃げ出した。

金持ちの子がいじめっ子にカツアゲされた。
「お金なんか持ってるから、カツアゲされるんだよ」
と、貧乏人の子が冷ややかに笑った。
貧乏人の子もいじめっ子にカツアゲされそうになった。
「でも、お金を持ってないんだけど」
貧乏人の子がそう言って、拒否すると、
「親の財布から盗むか、万引きするかで、無理やりでも持ってっこい」
と、いじめっ子にどやされた。

クラスでＡくんがいじめられていた。

Ａくんが不憫に思ったＢさんは、先生に告げ口した。
いじめっ子たちはこっぴどく先生に叱られた。
いじめっ子たちは悔しいけど、
誰が先生に告げ口したのかが分からなかった。
いじめっ子たちは、十分な根拠もないのに、
Ａくんが告げ口したと決めつけて、
Ａくんの事をますますいじめた。

いじめの話をした時、
「世の中と言うのは、誰かが必ずいじめられなくちゃいけないものなのさ」
と、悟ったように、語った人がいた。
「だったら、お前が、そのいじめられる人間になればいいんだ！」
と、皆は、その人の事をいじめるようになった。
その人が、慌てて抗議すると、
「誰かがいじめられなくちゃいけない、と言ったのは、お前自身だろ！」
と、言い返された。
（「言ってはいけないヤブヘビ意見」より ）

いじめが社会問題として騒がれた。
すると、いじめをする人間の事もいじめていい、と言う価値観も台頭しだした。
ある人が、バカにして笑った。
「いじめっ子をいじめる人間の事もいじめていいんだ」
と、その人は言った。
すかさず、こんな反論が湧き上がった。
「じゃあ、
『いじめっ子をいじめた人間の事もいじめていい』
と言ってる人間の事もいじめていい事になるよな？」
こうして、いじめとは全く無関係だったのに、
よけいな口を挟んだ人もいじめられる事になった。

「ニュースじゃ、世の中いじめだらけみたいに騒いでいるけど、
ほんとは、そんなの、ごく一部の場所だけでの特別な話じゃないの？
だって、私の周りでは、そんな酷いいじめなんて見かけた事がないし」
と、誰かが言った。
「逆だよ！
てめえが、狭い世界に住んでいて、世の中の現実を知らないし、
事実もきちんと見ようとしていないだけだ。
そんな奴が、偉そうに、いじめの問題に割って入ってくるな！」
と、言われた。
（「いじめを知らない奴のたわごと」より ）

「自分もいじめられるいじめっ子なんて、しょせんは要領が悪いんだ」
と、あるいじめっ子が嘲笑った。
だから、その子は、他のいじめっ子がいじめられていても、かばった事はない。
やがて、そのいじめっ子がいじめられるような事態になった。
誰も助ける者は現れなかった。

自分がいじめられたら、ものすごく怒る人がいた。
「いじめは絶対に許さない！」
と、その人は吠えまくった。
でも、その人は、
他の人がいじめられている時は、全くの無関心だった。
「いじめは許さない」じゃなく、
「自分へのいじめは許さない」なのだった。

自分のいじめ行為を責められると、
あらゆる屁理屈をこねて、弁解するいじめっ子がいた。
「どうだ！ いじめはちっとも悪い事じゃないんだ」
と、そのいじめっ子は力説しまくった。
やがて、世間では、いじめが社会問題となり、
連日、新聞やテレビ番組で、いじめ行為を非難する主張が流された。
先のいじめっ子は、あれほど、いじめ正当説を振りかざしていたクセに、
いじめ非難の世論とはまるで戦おうともせず、口をつぐんでいた。

古くから、世の中では、他人を責めてばかりではなく、
自分の方が遠慮して、相手に譲る「優しさ」があったからこそ、
いがみ合いばかりにはならずに、平和が保たれてきた。
ところが、学校のいじめっ子ときたら、どうだ？
この「優しさ」の精神すらも理解しようとせずに、
被害者や大人が寛大にいじめ行為を許したら、
よけいに調子に乗って、もっと散々いじめる始末だ。
あげくの果ては、
「優しさなんか持っている方が悪いのだ」
などとさえ言い出すのである。
こんないじめっ子をのさばらした結果、
世の中はどうなった？
人々は、他人に優しくしたら、損すると言う利己主義に走り、
過度に自分の権利ばかりを主張するモンスター人間ばかりになり、
あちこちで近所問題やクレーマーだらけになってしまったのだ。
こんな住みづらい世の中になってしまった責任は、
全て、いじめっ子が取ればいい。

「いじめられたら、自分で抵抗すればいいじゃないか」
と主張する人の事は、
いくらいじめてもいいし、助けてやる必要もないのである。
だって、どんなにいじめられても、
自分で何とかするのだろうから。
（「いじめてもいい人間」より ）

大した教育家たち

皆から仲間外れにされている生徒がいた。
「いじめは止めよう。皆で仲良くしなさい」
と言って、担任の先生は、
その仲間外れの子を、無理やり、他の生徒のグループに加えさせた。
仲間外れだった子は、ノケモノにこそされなくなったが、
代わりに、仲間の生徒たちから、
パシリにされたり、こき使われたり、
ヒドいからかわれ方をされたり、
いつもガミガミ皆から責められたりして、
いじめの内訳は悪化してしまった。
とうとう、仲間外れだった子は自殺した。
「私はいじめを無くそうと、きちんと指導しました」
と、担任の先生はしゃあしゃあと言った。

大人や先生に、とっても従順な優等生たちがいた。
大人や先生たちも、なんでも素直に言う事を聞く彼らの事をたいへん可愛がった。
ただし、優等生たちは、大人たちに忠実すぎるあまり、
大人の指示にうまく従えない落伍者や不良には、ひどく厳しかった。
劣等生や不良の事を「お前らが悪い」と言って、
何かといじめたり、差別したりするのだった。
それを知って、先生は、軽い気持ちで、優等生たちに命じてみた。
「君たち。これからは、出来の悪い子の事もいじめないようにね」
それは、先生からの言いつけのはずだった。
ところが、そのような指示を受けた途端、優等生たちは激怒した。
「悪い奴を懲らしめて、何で注意されなくちゃいけないんだ！
大人なんて、身勝手で信用できない！」
優等生たちは、いじめを止めようとしなかった。

それどころか、手のひらを返すように、
大人や先生の事を敵視するようになった。

「いじめっ子も本当は可哀想なんだ」
「いじめっ子も一人の人間なんだ」
「まだ子供がした事じゃないか」
善人ぶった人たちは、
二言めには、いじめっ子を許すような主張をする。
その意見に納得して、いじめっ子を責めなければ、
いじめっ子は何のペナルティを受ける事もない。
いじめられても、何の補償もしてもらえない被害者よりも、
いじめっ子になる方が断然トクなのだ。
そりゃあ、学校中が、いじめっ子だらけになるはずだ。
全く、口先だけの善意ほど怖いものもない。

ネットでいじめっ子がボコボコに非難されているのを見て、
「いじめっ子だって、本当は可哀想な人間なんだ。そんなに責めるべきではない」
と庇う人が現れた。
すると、世間は、
「いじめっ子でいる事の方が可哀想だと言うのならば、
そいつ（ いじめっ子 ）は、いじめられっ子になればいいんだ」
と、もっとガンガン、いじめっ子をいじめるようになった。
「ついでに、いじめっ子を可哀想とか言う奴も、いじめてやればいいんだ。
だって、こいつ（ いじめっ子を庇う奴 ）は、
いじめられる側の方がいじめる側よりマシだと思っているんだろう？」
こうして、いじめっ子を庇うような人間は、一人もいなくなった。

いじめ禁止法が制定された。
「被害者が心身の苦痛を感じているもの」がいじめである、と定めた。
いじめっ子は、力づくで脅迫して、
被害者に「苦痛を感じている」とは言わせなかった。
だから、どのいじめもいじめ禁止法では取り締まれず、
相変わらず、いじめは無くならなかった。
　ーーーーーーーーーーーーーーー
いじめ禁止法が制定された。
「被害者が心身の苦痛を感じているもの」がいじめである、と定めた。
しかし、苦痛かどうかは本人（ 被害者 ）にしか分からないものだ。
いじめの問題で煩わされたくない教師や大人たちは、
はっきりといじめを見かけても、わざと気が付かなかったふりをした。
相変わらず、いじめは無くならなかった。
（「穴だらけのいじめ防止法」より ）

この世で一番ムカつくコメンテーターとは？
いじめっ子の話をしているのに、
すぐ、被害者の態度とか、学校の対応とかの方に話をそらしてしまう奴ら。
何で、そうやって、すぐ話をそらすんだよ。
だから、いじめっ子がつけ上がるんだぞ。
お前ら、いじめっ子からリベートでも貰ってるのかよ？

いじめっ子いじめが世間で横行した。
「たとえ、いじめっ子でも、いじめたら可哀想じゃないか」
と、良識者が意見した。
「いじめっ子にいじめられた人間だって可哀想だろ」
と、言い返された。
「しかし、いじめ合っていたら、いつまでも平穏な状態は来ない」

「いじめられた側だけ、いじめられても我慢しろと言うのかよ！
とんだ不公平な平和主義だよな。
お前らは、そうやって、いっつも、被害者ばかりを押さえつけて、
トラブルを何となく静めちゃおうとしてきたんだ。
オレたちも善良だったものだから、
これまでは、それを受け入れて、自分ばっかり、泣く泣く損してきた。
でも、お前らのやり方には、もう騙されないぞ！
今度からは、いじめっ子の事を押さえつけろ！」

「私たちは君の事が好きで、死んでほしくないから、
いじめられても、自殺しないで」
と、賢明なる大人たちは、いじめ被害者たちにメッセージを送った。
しかし、被害者たちは、現状のいじめが辛すぎて、
死んだ方がマシだと思えるから自殺するのである。
いじめられている環境は放置したままで、
ただ「自殺しないで」とお願いするだけなのは、
被害者たちに残酷すぎる話なのではなかろうか？

皆で、憎たらしいいじめっ子の事をいじめていた。
「弱い者いじめはやめるんだ」
と、ひょっこり現れた良識者が止めに入った。
「うるさい、黙れ！
先に弱い者いじめしてたのは、このいじめっ子の方だ！
弱い者いじめしてた奴の事を庇ったりして、
お前の態度は矛盾してるじゃないか！」
と、ガンガン言い返された。

「たとえ、いじめっ子であろうと、いじめてはいけない」
と、ヒューマニストが熱弁した。
いじめを憎む人々は、皆でヒューマニストを責め立てた。
ヒューマニストが守ろうとしたいじめっ子たちは、
全然、ヒューマニストを助けてやろうとはしなくて、
ヒューマニストは、一人だけ損をして、孤立した。

「いじめられたって、そんなものは撥ね付けて、たくましく生きなくちゃダメだ」
と、一部の大人たちが、当たり前とばかりに豪語した。
その言葉は、いじめる側の人間への責任問題を曖昧にし、
いじめ行為をやりやすくし、より後押しした。
逆に、いじめられている子供たちは、
いじめを跳ね返せない自分はダメ人間だと考えるようになり、
人生への絶望から自殺する子がさらに増えた。
こんな一部の大人たちの思慮の浅い発言が、子供の自殺を増長させているのだ。
「いじめられたぐらいでクヨクヨする奴なんて、生きてる価値がない。
自殺したきゃ、勝手に死ねばいいんだ」
と、一部の大人が、ついホンネを漏らした。
この一部の大人へ、全ての人間の非難が集中した。
「いじめられても、たくましく生きろ」とか
「いじめられて自殺する奴は、生きてる価値がない」とか、
そんな事を言っている連中だけが、
一生涯、いじめられ続けて生きていればいいのである。

「いじめられても、相手を許してやろう」とか
「いじめられたら、努力して、戦え」とか、
大人や先生はいかにもカッコいい事を言うけれど、
それを自分で実践してない奴の言葉なんて聞く事ないよ。

とりあえず、偉そうな事抜かしてる大人の事は、
てってー的にいじめてみて、
本当に、自分の言葉通りの態度を取れるか、
確認してみればいいんだ。
「いじめられても、相手を許してやろう」って言う奴は、
自分をいじめる相手の事も許せるんだろうし、
「いじめられたら、努力して、戦え」って言う奴は、
どんな悪質ないじめ方をしても、自分の努力で何とかするんだろ？
「いじめる側に問題がある」って言い方をしない以上、
そう言う奴らは、いくら、いじめてもいいんだ。

いじめの話をすると、
「いじめっ子も本当は可哀想なんだ」
と言って、すぐ庇いたがる奴らがいる。
だったら、いじめられた被害者も可哀想なのだから、
被害者が、いくら悪い犯罪を犯したとしても、
「可哀想」の一言で全部、許してもいい事になる。

「いじめっ子だって、別の場所では、社会にも貢献している。
だから、むやみに、
いじめっ子の事はいじめてもいい、
なんて考えるべきではない」
と主張する人もいる事だろう。
しかし、必ずしも、皆が社会に貢献してるとも言えまい。
いじめっ子の中には、そのまま、悪質な犯罪者になってしまい、
社会への貢献よりも迷惑の方がはるかに上回った奴もいるだろう。
社会への貢献度を基準にして考えるのならば、
犯罪者のいじめっ子は、やっぱり、容赦なくいじめてもいい話になる。
ネットリンチで吊るし上げてやるのは、正しい行為なのだ。

「いじめを見てるだけで、とめない奴らも同罪だ」
と、先生が怒った。
別に、傍観者たちも、好きで、いじめをとめない訳ではない。
加害者のいじめ行為をうまく止めさせられないだけなのだ。
そばにいただけでも、いじめっ子扱いされては溜まったものじゃないので、
傍観者たちも、積極的に、いじめの事実を隠して、
自分もいじめっ子扱いされないように努めるようになった。
見当違いないじめ対策が、よけいいじめを悪化させているのだ。
そこで、いじめっ子と傍観者を明白に区別する事にした。
さらに、いじめっ子自身も、首謀者と取り巻きを分ける事にした。
全て、悪いのは首謀者だけである。
傍観者と一部の取り巻きはいっさい罪なしとした。
誰だって、首謀者になって、一人で悪者にはなりたくないのである。
子供たちは、首謀者にならない為に、競って、いじめをやめだし、
あっさりと学校のいじめは解消した。

皆がいじめ合うのを止めさせるつもりで、
「いじめっ子の事だって、いじめてはいけない」
と、ヒューマニストたちは言うだろう。
しかし、彼らのほとんどは口先だけであり、
実際にいじめっ子を制止したりはできていないのである。
被害者をじかに守るような行動だってしていないのだ。
ヒューマニストの偽善的言葉は何の効力も持たず、
いじめと言うものも、絶対に無くならないのである。
だから、いくら、いじめっ子をいじめても構わないのだ。
どうせ、このヒューマニストたちは、
いじめっ子がいじめられても、何もできないのだから。
「いじめてはいけない」
と言う言葉をバカ正直に信じた善人にばかり我慢をさせる事で、
今の人間社会は成立している。

そこで
「いじめっ子の事だけはいじめてもいい」
と言い換えてみる事にしよう。
誰もが、自分はいじめられたくないから、
いじめっ子にならないように努めるようになりだす。
皮肉にも、いじめがいじめを防ぐ抑止力となり、
社会の中のいじめを、逆に、減少させてゆくのだ。
「いじめっ子の事だって、いじめてはいけない」
なんて、善人ぶって言うよりも、
ずっと現実的な、いじめ対策の発想である。

「いじめっ子だって、根っからの悪人ではない。
彼らの正しい部分や可哀想な部分とかも考慮して、
一方的に悪い者扱いにするのは慎むべきだ」
と、優れた教育者たちは善意的に考える。
しかし、それって本当なのだろうか。
確かに、いじめをした事を反省して、
いじめ行為を二度と繰り返さないし、
自分の罪の償いまでするような子供の事は、
それ以上、責めるべきではないだろう。
むしろ、その改心ぶりを讃えてあげるべきだ。
しかし、一方では、
何度注意されても、いじめを繰り返す子供たちがいる。
それどころか、
「いじめは悪くない」みたいな屁理屈までこねて、
反省するどころか、自分を正当化する連中までいる。
果たして、これらのいじめっ子を、
全て、一緒くたにして考えても良いのだろうか。
前者のようないじめっ子は、悪者扱いすべきではないだろう。
しかし、後者のようないじめっ子は救いようもないし、
ヘンに庇えば、ますます、つけあがるだけなのだ。
だからこそ、いじめっ子を区別して、振り分ける必要がある。
その発想こそが、いじめっ子カーストである。

「弱いものがいじめられるのは自然の流れでは？
弱いものいじめは一切禁止して、いじめっ子だけはいじめていい、
と言う＜いじめっ子カースト＞の発想は、
自然の摂理に反しているのでは？」
と、哲学者ぶった論客が主張した。
「だったら、いじめっ子が弱ければ、いくら、いじめてもいいんだな？」
の一言であっさり論破された。

「いじめたりしたら、相手が可哀想じゃないか」
と言う説教をして、
先生はいじめっ子のいじめ行為をやめさせようとした。
「全然、可哀想じゃないよ」
と、いじめっ子にあっさり言い返されて、
この説教は無効になってしまった。
「いじめたりしたら、相手が可哀想だと思わないのか？」
と、先生は言い方を変えた。
「なぜ、可哀想だと思わなくちゃいけないの？」
と、逆に、いじめっ子に聞かれてしまった。
このように、普通の人と一部のいじめっ子では、
物の捉え方が全く違っているのだ。
それなのに、一般人の常識でいじめっ子を説き伏せようとしても、
最初っから不可能な話なのである。
教育者たちが、そんな事も分からずに、
いじめっ子にも、情愛に基づくモラルで説得しようとするのは、
教育者たち自身が、自分は情愛ある人間だと思われたいからである。
いじめっ子的なドライな考え方を理解できてしまう事で、
自分もドライな人間であるかのように、皆に思われてしまうのが怖いのだ。
こんな、自分の立場ばっかりを気にする教育者たちの方が、
ドライな考え方ができる教育者より、ずっと役立たずなのである。
いじめっ子は、相手（ 被害者 ）の視線では物を考えず、
常に、自分の損得勘定でしか、物事を判断しない。

「いじめをすれば、自分が不利になる」と言う結論のもとでしか、
いじめを止めようと言う考えには結びつかないのだ。
だからこそ、いじめっ子カーストの
「いじめっ子だけはいじめてもいい」
は、いじめ対策としては、もっとも有効な発想なのである。

いじめっ子に明日はない

いじめられた子が不登校になった。
どうせ、学歴を得られなくて、将来的に困るのは本人だ、と、
学校は不登校児を放置した。
しかし、いじめられっ子がいなくなっても、学校のいじめは無くならないのだ。
一番いじめられていた弱い子がいなくなると、
今度は、次に弱い子がいじめられるようになるのである。
自分がいじめられたら堪らない、と次々に生徒が不登校になりだした。
学校の各教室には、いじめっ子若干名しか登校しなくなった。

いじめっ子の本名が世間にバレてしまい、ネットリンチを受けていた。
「ネットリンチなんてやめなさい」
と言う書き込みがあった。
「いじめっ子をかばう奴も同罪だ。
素性を暴いて、やっつけてやれ！」
と言うレスがついて、炎上した。
いじめっ子をかばうような事は、誰も書かなくなった。

ネット上に、いじめっ子を罵倒する書き込みが氾濫したが、
それに対抗するようないじめっ子自身の書き込みはなかなか現れなかった。
しょせん、いじめっ子なんて、
学校内や友人グループ内など、自分が威張れる小さな空間でしか、
でかい事が言えない人種なのだ。

それでも、ようやく、
いじめっ子の一人が、いじめっ子いじめを批難する書き込みを行なった。
すると、その書き込みには、
匿名で、多数のいじめっ子の賛成レスが付いた。
間もなく、そのいじめっ子の書き込みに対して、
大量の猛反対コメントが付いてしまった。
匿名で応援していたいじめっ子たちは、蜘蛛の子を散らすように居なくなり、
最初の書き込みをしたいじめっ子だけが袋叩きになった。

後輩いじめが蔓延している体育系クラブがあった。
状況を憂いた学校は、思い切って、そのクラブを廃部にする決定を下した。
その決定に、一番猛反対したのは、
意外にも、いじめられていた一年生たちだった。
一年生たちは言った。
「今、廃部にされたら、俺たちだけがいじめられっ放しで、
俺たちは誰もいじめる事ができないじゃないか！」

赤字に苦しむ政府が、いじめっ子税の導入を決定した。
これは、学生時代にしたいじめの量だけ、その人の税金を増やす、と言う税制度である。
いじめっ子を多く産出するほど、政府にも奨励してもらえるので、
あちこちの学校が、積極的に、いじめの発見に励むようになった。
いじめられていた子供たちも、
大人になってから、いじめっ子が重税で苦しむ事を考えると、
胸がスッとしたので、自殺もしないし、クヨクヨしなくなった。
子供たちは、成人してから、必要以上に税金を取られたくないので、
いじめをしないように、気を付けて、学校生活を送るようになった。

「いじめをした事のある奴は、皆、同罪だ！
お前ら、オレの事を責められるのかよ！」
と、いじめっ子が、罪逃れしようと、言い放った。
「バーカ！ 皆が平等に同罪のはずがねーだろ！
先頭に立って、いじめをしたお前と、
仕方なくいじめに付き合った俺たちを一緒にするな！
もし、同罪だって言うのなら、
お前と、殺人をしたいじめっ子も、全くの同罪って事になるな。
お前なんか、殺人犯同様に、刑務所に入って、死刑になれ！」
とどやされた。

人が弱いものいじめをするのは、
いじめ行為を通して、優越感を味わいたいからにすぎない。
いじめをする連中は、いろんな理屈で、いじめを正当化したがるが、
しかし、同じ状況でも、いじめをしない人間は沢山いるのだ。
いじめをする、しないは、いじめる側の判断に任されているものなのである。
「時間や規則を守れなかったり、能力が劣っていたり、
社会のルールを守れない奴がいじめられるんだ」
なんて言い方をするいじめっ子もいるだろう。
しかし、そう言ういじめっ子自身も、
「いじめをしてはいけない」と言う社会ルールを守っていない事になる。
だったら、いじめっ子の事だって、いくらいじめてもいい事になるのだ。
実は、いじめっ子自身が、先に、
大人とか先輩とかの社会的強者にいじめられているケースが多い。
連中は、そうやって、自分もいじめられ悔しかったものだから、
今度は、自分がいじめる側に回って、気持ちを紛らわしているのだ。
だから、連中は、いじめをしたあと、こんな理屈も述べる事だろう。
「社会は弱いものいじめの連鎖で成り立っているんだ。
俺にいじめられた奴も、悔しんだったら、
自分より弱い奴でもいじめて、ストレスを発散すればいいんだ」
だが、そんな考え方をしている人たちのせいで、
むしろ、社会の中に、いじめの連鎖がはびこってしまっているのである。
いじめっ子は、いじめの連鎖は無くならなくてもいいと考えているらしい。

裏返せば、「私の事は、いくら、いじめられてもいい」と言ってるようなものなのだ。
だったら、誰かをいじめて、ストレス発散したい人は、
大いにいじめっ子の事をいじめればいいのである。
本人公認のいじめなのだから、筋は通っているのだ。
（「家族虐待やら、あおり運転やら、パワハラやらを正当視して、ストレス発散をしている連中に告ぐ！」より ）

社会一般の認識では、いじめが非難されているのを見て、
良心の呵責を感じてきたいじめっ子が、
気持ちを紛らわす為に、こう言った。
「いじめられる奴は、偉いよ。
こんなに沢山いじめられても、我慢できるんだからな。
将来、きっと出世できるよ」
それを聞いた周囲の人間が怒鳴りつけた。
「なに、偉そうに、上から目線で語ってるんだよ！
ほんとに、そう思ってるんだったら、お前の事もいじめてやる！
我慢して、お前も出世できる人間になればいいんだ」
（「「上から目線」いじめっ子」より ）

「他人をいじめてでも、必死に生きようとする方が、
人間としては、活力があって、優れているのだ」
と、いじめっ子はうそぶいた。
しかし、いくら活力があっても、
それを自分の為にだけ使っている人間なんて、
むしろ、他人にとっても、社会にとっても迷惑なだけなのである。
そんな人間は、無気力な人間以上に、いない方がマシだ。

いじめっ子の悪行が、世間一般にバレて、
いじめっ子は皆から集中的に責められた。
しかし、いじめっ子の親だけは、
我が子は可愛いから、色々な言い訳を用いて、
必死に、いじめっ子の我が子を正当化しようとした。
結果として、その親も、皆から責め立てられるようになった。
いじめっ子の親が、本当に我が子が可愛くて、守りたいのであれば、
嘘をついてでも、我が子が正しいと言う事にして、かばうのではなくて、
むしろ、我が子にきちんと謝らせるべきなのである。

「子どもの頃にやった事じゃないか。そんなの、もう無効だろ」
と、元いじめっ子が言った。
元いじめっ子の主張は聞き入れられ、
子供時代のいじめの罪は償わなくてもいい事になった。
代わりに、
「子供の頃は、ずるくて、卑怯で、意地悪ないじめっ子で、
今でも、その性格が直ってないのかもしれない人間」
という肩書きを背負って、生涯を送る事になった。
そんな奴のことは、誰も信用しないし、親しく交際もしないのだ。

「いじめっ子は、俺の仲間だから、俺の事はいじめない。
反いじめっ子は、いじめ行為を否定しているのだから、
やっぱり、俺をいじめる事はできない。
つまり、いじめっ子でいるのが、一番いじめられないんだ」
と、いじめっ子が豪語した。
「なに、自分に都合のいい事ぬかしてやがる。そんな訳ねーだろ！」
と言って、皆はよってかかって、そのいじめっ子の事をいじめた。

いじめっ子カーストと言う発想が気に食わなくて、
「そんな理屈なんかコネなくて、
いじめられた奴がいじめた奴にやり返せばいいだけの話じゃないか」
と文句をつける人もいるかもしれない。
でも、それこそ、
いじめっ子カーストが不愉快だと言うのであれば、
いじめっ子自身がやり返せばいいだけの話なのではないか？

いじめっ子の事は、いくら、いじめてもいいのである。
何故ならば、
いじめっ子自身が、いじめ行為を肯定しているのならば、
自分自身がいじめられる事も肯定している事になるし、
逆に、いじめっ子が、いじめ行為を否定しているのならば、
その否定しているいじめ行為を、そいつ自身は行なっている訳なのだから、
そんな矛盾した卑怯者は、制裁（ いじめ ）を受けても仕方ないのである。
それなのに、現実のいじめっ子が、必ずしも、いじめられていないのは、
そいつ自身が正しいからではなく、
被害者や周囲の人間の善意や優しさに守られているからに過ぎない。
ほんとは、いじめっ子は、ガンガンいじめられるべきなのだ。
自分がいじめられるのが怖いものだから、
いじめっ子は、結局は、最後は、
「自分をいじめたら、いじめ返してやる」と言う脅しを振りかざして、
身を守る事しか出来ないのである。
もちろん、そんな脅しなんか、全ての人間に通用するのでもない。
いじめっ子は、常に、自分もいじめられる恐怖に脅かされ続けるのだ。

いじめっ子の事を「悪い」と言って、責めると、
いちいち、文句をつけてくるヒューマニストたちがいる。
いじめっ子自身も「悪い」と言われても、
悪ぶるのがカッコイイと気取っちゃったりもする。
だから、いじめっ子を「悪い」と言うのはやめにしよう。
「悪い」のではなく、
いじめっ子とは「バカ」なのである。
「善悪の区別もつかない、未熟な低脳児」なのである。
あるいは「頭がおかしい、精神病持ち」なのである。
頭のデキの悪い未熟児だと思えば、
まあ、いじめをしても、しゃあないか、とも思えるだろう。
頭が狂った病人だと思えば、
まあ、いじめをしても、しゃあないか、とも思えるだろう。
バカや知恵遅れやキチガイ扱いされたくなければ、
いじめをやめればいい。
（ 一部、偏見用語が混ざっている事を謝罪いたします ）

いじめっ子カースト

いじめっ子「いじめられる方が悪ければ、いじめてもいい」＋いじめっ子以外の被害者「私はいじめられたくない」＝「いじめっ子だけはいじめていい」は、双方の言い分を矛盾なく満たす

誰だって、いじめた事もあれば、いじめられた事もある。
「いじめは全部悪い事だ」
と言う言い方をするから、話がややこやしくなるのだ。
だから、いじめっ子を一緒くたにするのではなく、
いじめっ子にランクを作る事にしよう。
一番悪いランクのいじめっ子にだけ、全責任を負わせるのだ。
誰だって、一人だけ悪者扱いはされたくないから、
皆で、ワーストいじめっ子にならないように競い合いだし、
結果的に、皆はいじめをしないように努めるはずである。

「いじめはしてはいけない」と指示を出しても、
子供たちは一向にいじめをやめないので、
正攻法のやり方に限界を感じた政府は、とうとう、
「一番悪いいじめっ子の事だけは、いくら、いじめてもいい」
と言う、新しい学習指導を採用した。
自分がいじめられたら、たまったものじゃないので、
子供たちは、競うように、いじめをしなくなり、
学校からはいっきにいじめが消え去った。

いじめっ子の横暴な態度にブチ切れて、
周りの人間がいっせいに、いじめっ子の事をいじめ出した。
「たとえ、いじめっ子であろうと、いじめたりしてはいけない」
と、ヒューマニストが口を挟んできた。
「ほざくな！
オレがいじめられていた時は何もしなかったくせに、
今ごろ、のこのこ出てくるな！」
と、被害者が言い返した。
あまりにもっともな話なので、
誰もヒューマニストの言う事など聞かなかった。

いじめっ子の横暴な態度にブチ切れて、
周りの人間がいっせいに、いじめっ子の事をいじめ出した。
「たとえ、いじめっ子であろうと、いじめたりしてはいけない」
と、再びヒューマニストが口を挟んできた。
「なぜ、いじめっ子の事をかばう？
オレがいじめられていた時は、止めてくれなかったくせに」
と、被害者が言い返した。
「それは、いじめられていた君にも原因があったからだ」
と、ヒューマニストが答えた。
「だったら、今、いじめっ子がいじめられているのも、
本人に原因があるからなんだから、とめるなよ」
そう言って、やっぱり、皆はいじめっ子をいじめるのをやめなかった。

いじめっ子の横暴な態度にブチ切れて、
周りの人間がいっせいに、いじめっ子の事をいじめ出した。
「たとえ、いじめっ子であろうと、いじめたりしてはいけない」
と、またまたヒューマニストが口を挟んできた。
「なぜ、いじめっ子の事をかばう？
オレがいじめられていた時は、止めてくれなかったくせに」
と、被害者が言い返した。
「私だって止めようとはしたが、いじめっ子がやめなかっただけだ」
と、ヒューマニストが弁解した。
「だったら、俺たちも、あんたに止められても、言う事を聞く必要はないな」
いじめっ子いじめはおさまらなかった。

「弱い者いじめをしてはいけない」
と言う教えは、どこの社会や集団にも存在している。
しかし、
「いじめっ子いじめをしてはいけない」
と言う教えは、どこの社会や集団にも存在しない。
皆は、社会ルールを破る恐れなく、心ゆくまで、
いじめっ子だけをいじめるようになった。

世の中に、いじめっ子だけをいじめるいじめっ子カーストの発想が広まり出した。
弱い子を押さえつけて、いじめてきた人たちには、その風潮が実に面白くない。
そこで、彼らは、いじめっ子カーストへの反対運動を巻き起こそうとしたが、
その事によって、逆に彼らはいじめっ子認定されてしまい、
よけい世間から責められるようになってしまった。
いじめっ子カーストに反対するような人間なんて、
根っからのいじめっ子か、考えの浅いヒューマニストぐらいなものだからである。

いじめられっ子が、いじめに耐えかねて、自殺した。
クラスメートが、級友をいじめから救ってあげられないのが辛くて、自殺した。
担任の先生が、いじめを止められなかった事に責任を感じて、自殺した。
いじめっ子の親が、世間に顔向けができなくて、苦悩の末、自殺した。
いじめっ子だけが自殺をしなかった。
何があっても、いじめっ子は自殺しないのかもしれない。
皆は、安心して、いじめっ子だけを責め立てる事にした。
　ーーーーーーーーーーーーーーー
「いじめっ子だって、本当は罪の意識を抱いて、反省してるんだ」
と、いじめっ子自身が弁解した。
ーーいじめられた側は、自殺するほど苦しんでいるのだ。
いじめっ子自身が、罪悪感で反省してると言っても、
自殺するほどじゃないんだから、大した事ないのである。
むしろ、口先だけで反省してるとか言われても、
それは、自分を良く見せたくて、そう言ってるようにも感じられて、
こんな奴ら、よけい腹がたつのだ。ーー
「じゃあ、どうすればいいんだ？」
と、いじめっ子が聞いてきた。
ーー形のある誠意を見せてみろ。言葉じゃなくて、行動しろ。ーー
いじめっ子は、どうすればいいか、一生懸命考えた。
そして、
自分もいじめっ子をやめて、
いじめっ子を積極的に憎む人間になればいい、
と気づいたのである。
こうして、いじめっ子がいじめっ子をいじめるようになった。

いじめ絡みの自殺や少年犯罪が相次いだ為、
世間では、いじめっ子という存在そのものへと、非難や怒りの声が集中するようになった。
「いじめっ子」の事を人間扱いしないような誹謗や中傷が、ネットにも連日、書き込まれた。
「そこまで、いじめっ子の事を叩くのは偏見、差別じゃないか？」

と言う、良識者からの声が上がった。
「もし、人権侵害だと言うのなら、迷惑を被ったと思ういじめっ子自身が訴えればいいんだ」
と、誰かが言った。
しかし、迷惑を被ったと名乗り出るいじめっ子はいっこうに現れなかった。
自分から、しゃあしゃあと、自分がいじめっ子だと表明する奴などいないのである。
しばらくすると、
「いじめっ子扱いされて、被害を被った」と言う、
いわゆる「冤罪」を訴える男が現れた。
ところが、その男が本名を公表して、活動すると、
あちこちから、その男にいじめられた事がある、と証言する人間が名乗り出てしまった。
その男は、冤罪を主張するのをやめ、慌てて引っ込んだ。
こうして、ますます、いじめっ子への誹謗や中傷は、世に広がった。

積年の恨みがとうとう爆発して、
皆がいじめっ子の事ばかりを目の敵にして、いじめるようになった。
「いじめっ子だからって、いじめちゃいけない」
と、その状況に反対する者が現れた。
「だったら、いじめっ子にも、いじめをするなと言え！」
と、言い返された。
「もちろん、言ってるよ！
しかし、いじめっ子は、いじめをするなと言っても、やめないだけだ」
「それなら、オレたちもいじめっ子をいじめるのをやめないよ！」
「いじめられたくなければ、
いじめられた子自身が、努力して、強くなればいいんだ」
「それなら、いじめっ子も、
いじめられたくなければ、努力して、強くなればいいんだ」
「いじめられる人と言うのは、きっと要領が悪いんだ」
「それなら、要領の悪いいじめっ子の事は、いくらでもいじめてやる」
「いじめられても、怒ったりせず、運命だと思って、受け入れよう」
「それなら、いじめっ子も、いじめられたら、
運命だと思って、受け入れればいいんだ」
こうして、いじめっ子をいじめる運動はますます勢いづいた。

頭の悪いいじめっ子は、
自分本位に、自分が嫌いだと思った子や弱い子、無抵抗な子をいじめる。
利口ないじめっ子は、
いじめっ子カースト側について、
悪者認定されたいじめっ子の事だけをいじめる。

「どうして、オレのことばかり、目の敵にして、いじめるんだよ」
と、いじめっ子が、いじめっ子カースト主義者へ抗議した。
「いじめられたくなければ、
お前が、いじめっ子じゃなくなるように努力すればいいだけだろ」
と、言い返された。

いじめっ子カーストが世間で横行した。
通常の弱い者いじめとは違って、
いじめっ子カーストのいじめは、
いじめっ子である事さえ止めれば、確実に回避する事ができる。
世の中では「いじめっ子をやめる為の方法やビジネス」が広まり、
経済効果にもつながった。

いじめっ子は、
弱い人間や劣った人間は、強者が作った財産を食いつぶしているから、

「こんな連中はいじめてもいい」と考えているようだ。
しかし、そう言ういじめっ子も、
「悪い事をした人の事も、すぐに責めてはいけない」と言う、
他人や被害者の善意や優しさに守られているから、
弱い者いじめをしても許されているのだ。
平和な社会の善意や優しさをすっかり食いつぶしているいじめっ子の事も、
「こんな連中はいじめてもいい」と言う論法に当てはまる事になる。

世の中は、結局、誰かがいじめられる仕組みなのかもしれない。
一番弱者がいじめられる状況では、弱者の立場はすぐに変動するため、
必ずいじめられないで済むようになるのは、
自力だけでは難しいものがある。
しかし、一番悪い奴（ いじめっ子のボス ）だけをいじめていい環境にすれば、
いじめっ子のボスにならないようにするのは、
自分の判断や心がけだけでも十分に可能だ。
いじめっ子をいじめる社会（ いじめっ子カースト ）の方が、
ずっと、万民が安心できる社会状況なのである。

いじめっ子が、反撃されないで済んでいるのは、
被害者や周りの人間による、
いじめっ子への優しさや善意の配慮のおかげだと言えば、
当のいじめっ子自身は、
「オレは、優しくしてくれ、なんて言ってない。
勝手に、連中が善人ぶって、優しくしてくれてるだけだろう」
と、被害者や周りの人々に感謝もせずに、強がるはずだろう。
自分から「優しくしてくれなくてもいい」と言っているのだから、
いじめっ子の事は、いくらいじめても構わないのである。
被害者や周りの関係者以外の人たちも、
いくらでも、いじめっ子いじめに加わっていいのだ。

我々は感謝する。
いじめっ子という、素晴らしい隷属階級を作ってくれた事を。
反省したいじめっ子は、自らの意思で償って、
世の中に無償で貢献してくれるだろうし、
反省しようとしないいじめっ子の事は、
とことん憎んで、虐待しても構わないのだ。
皆のストレス発散の為に、立派に活用できるのだ。
　ーーーーーーーーーーーーーーー
こんな風に書いたら、ムカッとする人もいるかもしれない。
しかし、学校でいじめをしている奴らも、
こんな風に考えて、被害者をいじめているものなのだ。
しかも、こうしたいじめっ子たちは、
いじめたあとのフォローはしないし、
そのまま、謝らないし、償わないでも済むと思っていやがる。
いじめっ子カーストに腹を立てるんだったら、
まずは、いじめっ子に対してもムカついたら、どうなんだ？

いじめっ子カーストを非難する人がいたとしても、そんなのは気にしなくていい。
だって、そいつらは、
いじめっ子カーストは非難しても、いじめっ子の事は非難しなかったのだから。
もし、連中が、これまで、いじめっ子の事も非難していたとしても、
やっぱり気にしなくてもいい。
だって、連中のいじめっ子非難で、いじめっ子は居なくなっていないのだから。
連中のいじめっ子カースト非難で、
いじめっ子カーストの方だけをやめる事もないのだ。

一番悪いのは「いじめっ子のボス」だけ、
と言う、いじめ判定を取り入れた途端、
急に、子供たちは、互いにいじめの罪をなすりつけ合いだした。
皆が「自分はボスじゃない」と言い張るため、
本人たちだけでは、誰がいじめっ子のボスかは決められなかった。
「おいおい。
いじめがいきなり空から降ってきたとでも言うのかい？
最初にいじめだした奴が、いじめっ子のボスなんだよ。
例えば、被害者を中傷する悪口が広まったとする。
最初に、その悪口を考えた奴がボスなんだよ。
その悪口を面白がって、いっぱい口にした奴も準ボスだよ。
悪口の発案者も、言い広めた奴も居ないと言うのかい？」
と、大人は呆れた。

世の中では、いじめっ子だけを槍玉に挙げる傾向が強まった。
「いじめに文句があるんだったら、いじめをしている時に言えよ。
あとから蒸し返したりするな」
と、いじめっ子たちが匿名でネットに書き込んだ。
「いじめっ子カーストに文句があるんだったら、実名でじかに言い返せよ。
いじめ自殺の被害者は、皆、実名で戦ってるんだぜ。
コソコソと匿名で書いてるような奴が、偉そうな文句を垂れるな」
と、反論された。
実名を出すような正々堂々としたいじめっ子は現れなかった。

確かに、いじめっ子だって、
いじめをした過去をチャラにしてもらって、
将来は、普通に幸せな生活を送らせてもらう権利がある。
しかし、その権利を主張したければ、
きちんと過去のいじめの罪は償い、清算しなくてはいけない。

もし、いじめっ子のした悪い事はもう許していい事にしたら、
いじめられて、心の屈折した被害者が、
その心の屈折が原因で、何か犯罪を犯しても、
それも全部許してやらないといけない事になってしまう。
今日の、いじめっ子をただ見逃している現状だったら、
被害者がいくらいじめっ子に仕返ししても、全て許されるし、
その事を非難される筋合いもないのだ。
いじめっ子カーストをやめさせる前に、
いじめっ子が先にきちんと償え。

いじめっ子カースト（ いじめっ子いじめ ）主義に対しては、
「お前は、自分や自分の身内がいじめっ子でも、
いじめっ子が悪い、ってきちんと言えるかのかよ」
と言い返す事で、
論破してやった、と思ってる奴もいるかもしれない。
そう言う奴が、一番ろくでもないかもね。
もし、自分や身内がいじめっ子だったら、
素直に自分らの非を認めて、被害者に謝るのが当たり前だろ？
それが、まっとうな人間の態度ってものだろ？
皆がそう言う態度を取れるように目指していかなくちゃいけないし、
それなのに、そんな認識を持とうともしない上に、
自分のした悪事（ いじめ ）を見逃してもらう事ばっかり考えて、
あげくは、他の皆もそんな汚い考え方をしていると思ってるような奴だけが、
いじめっ子カーストの一番の攻撃対象になるんだよ！

いじめっ子カーストに対して
「一部の人間（ いじめっ子 ）だけをいじめていいなんて、
そんな考え方は、いじめっ子と同じじゃないか」
と批判する人もいるかもしれない。
しかし、いじめっ子といじめっ子カーストは、実際は全然違うのだ。

いじめっ子は、自分の価値基準や集団の価値基準を元に、
いじめてもいい対象を選択する。
一方の、いじめっ子カーストは、
「いじめをしてもいい」と言う考え方をする人だけをいじめるのだ。
いじめる側の価値基準ではなく、
いじめられる側（ いじめっ子 ）の考え方を、
そのまま本人に返しているだけの話なのである。
いじめっ子カーストのもとで、いじめられる奴というのは、
そいつ自身も、いじめを肯定しているからいじめられるのであり、
いじめられたくなければ、
その本人（ いじめっ子 ）が「いじめ」を放棄すればいい。
そうすれば、いじめっ子カーストのターゲットから回避できるのだ。
「自分はいじめをしてもいいけど、自分はいじめられたくない」
なんて、自分に甘い考え方は、
本当に厳しい世界では通用しないのである。

どんな事だって「いじめられる理由」にはなる。
だから、絶対にいじめられないで済む極意などはない。
しかし、いじめっ子にならない方法は簡単である。
自分さえ、いじめをしないように、心を抑えればいいだけの話だからだ。
よって、本気でいじめを無くしたければ、
被害者に、いじめられないようにアプローチするのではなく、
加害者に、いじめっ子にならないように学ばせるのが、正しい対応なのである。
だが、現状では、いじめっ子になったところで本人は困らないので、
誰も、本気で、いじめっ子にならないように努力しようとはしない。
そこで「いじめっ子の事だけはいじめてもいい」と言う制度を導入する。
皆、いじめられたくはないから、
必死になって、いじめっ子にならないように努力するようになるのだ。

あとがき

「こんなに、いじめっ子の事をボロクソに書いたら、
いじめっ子の心が傷ついてしまい、可哀想だと思わないのかい？」
と、ある人が「いじめっ子の笑い話」の作者に尋ねた。
「大丈夫だよ。
そもそも、本物のいじめっ子は、こんな笑い話は読んでないもん。
連中は、自分に都合の悪い事からは、すぐ目をそらして、逃げるからね。
この笑い話だって、見かけても、すぐに読むのをやめちゃったよ。
読んでない以上、心が傷つくはずもない。
よって、心の傷ついたいじめっ子なんてのは一人もいないから、
ボクも、可哀想だと気遣う必要なく、いくらでも存分に書けるのさ」
と、作者は言った。

「こんなに、いじめっ子の事をボロクソに書いて、
いじめっ子の仕返しが怖くないのかい？」
と、ある人が「いじめっ子の笑い話」の作者に尋ねた。
「いじめっ子に嫌がらせでもされたりしたら、それこそ思う壺さ。
『いじめっ子は、自分が悪いクセに、卑怯な反撃をする奴らだ』
と言う、この笑い話の主張を、逆に立証しちゃう事になるからね。
いじめっ子は、ますます、嫌な奴らだと世間に思われるようになるんだ」
と、作者は言った。
「でも、たとえば、正攻法で、裁判で訴えられたりしたら？」
「よく、この笑い話の細部まで読めよ。
具体的な事や個人情報などは何も書いてないぜ。
法に引っかかる部分は何もないから、訴えようがないよ。
この笑い話で被害を被るのは、
唯一、いじめっ子か、いじめっ子を庇って、卑怯な事をした連中だけであり、
もし、訴えるような奴がいたとすれば、

そいつは、自分で自分が『いじめっ子』だと認めて、逆に自身が恥を晒すだけさ」
「それでも、訴えられたとしたら？」
「まず、重要な事として、この笑い話は実話ではなく、あくまでフィクションだ。
もし、このような内容のフィクションがＮＧ扱いにされるのならば、
この世に存在する、いじめっ子をやっつける内容の小説やマンガ、映画などは、
全て、禁止しなくちゃいけない事になるだろうね。
果たして、この笑い話を訴えようとする誰かさんに、
あの有名な小説とか、あの大人気のマンガまで敵に回す覚悟はあるのかな？」

「いじめっ子の笑い話」を読んで、
笑えないどころか、不快や憤りを感じてしまった、と言う人もいるかもしれない。
しかし、このような見下しや中傷行為を、
いじめっ子だって、被害者に対して行なっているのだ。
もし、あなたが、
いじめっ子の立場で、不快や憤りを感じたと言うのであれば、
反感を抱くよりは、まずは自分のした行為（ いじめ ）を顧みなさい。
被害者の受けた不快や苦痛、悲しみを、我が身で感じてみて、
今すぐでも、あんたの被害者に謝って、
誠意を込めて、罪滅ぼしでもすればいいのだ。
「いじめっ子の笑い話」を非難したいのであれば、
そうやって、あんた自身が、まず、我が身を正してからである。

あなたが、いじめっ子でないにも関わらず、
「いじめっ子の笑い話」だけに不快や憤りを感じたと言うのであれば、
それはそれで、タチが悪い。
何故ならば、「いじめっ子の笑い話」に対して抱く不快や憤りは、
現実の「いじめ」に対しても抱くであろうはずものだからだ。
にも関わらず、これまでは、現実の「いじめ」の話には何も感じなかったのに、
「いじめっ子の笑い話」にだけ、不快や憤りの反応を示したと言うのは、
とんでもない不公平なのであり、偏見であり、いじめっ子びいきなのである。
「いじめっ子の笑い話」を怒りたいのであれば、
同じぐらい、現存するいじめっ子族に対しても、怒りを持つのが当然だ。
そして、いじめ加害者に対して、素直に怒りを向けられる人ならば、
「いじめっ子の笑い話」にだけ、不快や憤りを感じる事はないはずなのである。

ここまで説明しても、まだ分からないような人がいたとすれば、
そんな奴は、もはや、これ以上は説得のしようもなく、
いじめっ子カーストの最悪ランクにでも指定してしまうしかないのである。

「いじめっ子カースト」のロジック

「いじめっ子カースト」の始まり

いじめっ子だけは、いじめてもいい？（「いじめっ子の笑い話」紹介文）

私が「いじめっ子カースト」なんて概念を思いついたのは、決して最近の話などではなく、２０１７年には、すでに、その原案はまとまっていたし、文章にも書き起こしていた。

にも関わらず、なかなか公表しなかったのは、「いじめっ子カースト」と言う発想は、既存の良心的ないじめ対策とは、あまりにも方向がかけ離れていて、とても世間には認めてもらえそうになかったし、ちょっと間違えれば、ただの「被害者の復讐」の妄想としか受け止めてもらえない事も懸念したからであった。

しかし、いじめっ子自体を被害者にするのが、もっとも有効ないじめを止めさせる方法である事は、すでに拙著「新編かげこの玉手箱」でも紹介済みだし、そもそも、私は、いじめ問題の研究家を気取りたいのではなく、現実にいじめを無くしていく目的で活動したいのだ。

現状の善意的な発想のいじめ対策では、とてもとても、いじめは無くなっていきそうにないし、40 年前から、ちっとも状況は変わっておらず、きっと、これからも何も変化はないであろう。対策する側として「我々は、これだけ努力したんだ」と自己満足で落ち着くのではなく、私は、はっきりした成果に結びつけたいのだ。その為には、他のいじめ対策の専門家と袂を分かつ事だって、いっさい辞さないのである。

20 年ほど前、私は、いじめを解決する事を目的としたサイト「かげこの玉手箱」を開いていた。当時は、「＜いじめを無くしたい＞と考える世間の善意」をネット上で集める事で、それを大きく全国に広げれば、世の中のいじめへの志向性を弱体化できるのではないか、と考えていたのであった。

しかし、この計画はうまくいかなかった。思ったほどの大量の善意は集まらず、私が期待したような協力も得られなかったのである。参加者の少なさから、方向性の違う人間の意見もどんどん取り入れていった私の運営方針もマズかったのだと思う。やがて、「これ以上、このサイトを続けていても、何の収穫も無いだろう」と判断した私は、サイト内で内輪揉めが起きたのを機に、このサイトを解散してしまったのである。

こうして、身軽になった私が次の手を模索していた最中に、あの大津市でのいじめ加害者の名前漏洩事件（２０１２年）が起きたのであった。これを目にして、私は、世の中というものは、善意よりも、憎悪の方がはるかに上である事を悟ったのだ。

この事件の時は、これまでは少年法に守られていた加害者（ いじめっ子 ）の名前や個人情報が、沢山の第三者によって、公のネット上でガンガン晒されまくり、まさに「いじめっ子が社会にいじめれてしまった」と言える状況になった。私が大昔に書いたテレビドラマ用シナリオ「如月未代の奇妙な体験」（ １９９５年 ）の内容が、とうとう現実になってしまったのである。

その後は、いじめ自殺事件が起きるたびに、ネット上での加害者探しや素性晒しが、まるで恒例行事のようになった。もっとも、だからと言って、「ネットで名前を晒されるから、いじめは止めよう」という認識が世間に広がって、加害者（ いじめっ子 ）が震え上がって、いじめが無くなっていったかと言うと、そういう訳でもない。むしろ、良識ぶった連中に、「これは、いじめの連鎖だ」などと、得意げに揶揄されてしまっている有様なのである。

もっとも、私の作品「如月未代の奇妙な体験」では、世間にいじめっ子いじめが蔓延してしまう展開の後に、まだストーリーに続きがあった。加害者（ いじめっ子 ）が自分の非を自覚して、自主的にいじめを止めただけではなく、被害者に対しても優しく接するようになるのだ。

そして、私は、現実世界においても、ネットにおける加害者リンチが、ただのいじめ返しで終わってしまうのではなく、もっと建設的な方向、すなわち、加害者の反省・更生などへと繋げていく事はできないものかと考えたのである。

そのシステムの理想的な形を、何年もかけて、思案し続けた。そうして出来上がったのが「いじめっ子カースト」であり、さらには、この「いじめっ子カースト」を、どのように世に紹介すれば、一番効果的なのかと言う点でも、さらに色々と試行錯誤する事になったのである。

善悪の彼岸

- 自分がされたくない事は他人に対しても行なってはいけない。これが、何が悪い事かを決める本質的な基準であり、聖書（ バイブル ）にすら記されている黄金律だ。（「いじめっ子って悪くない？」）

いじめの問題に触れた時、「そもそも、なぜ、いじめが悪い事だと言い切れるのだ」と、根本的な部分から疑問を蒸し返して、得意げに論破した気になっている人も、世間には居るものである。

もちろん、「いじめが悪くない」と言うのであれば、そう思ってくれても、いっこうに構わないのだ。しかし、「いじめは悪くない」と言う主張に立つのであれば、当然、他人をいじめる事だけを正当化するのではなく、自分がいじめられた時（ 自分が被害者になった場合 ）だって、その状態を受け入れなくてはいけない。

つまり、「いじめは悪くない」と考える人、あるいは、そのような認識のもとで他人をいじめる人間は、自分がいじめられたって、文句は言えないし、自分をいじめた人間の事も悪者扱いして責めてはいけないのだ。だって、彼らの考えでは、「いじめは悪くない」のだから。

だが、実際には、そんな態度をとる加害者（ いじめっ子 ）や、いじめの擁護論者は、まるで居ないようである。連中は、他人のいじめの話では、しゃあしゃあと「いじめは悪くない」とか言うクセに、いざ、自分の身に実質的な被害が及んでくる（ いじめられる ）と、必死に悪あがきをして、自分がいじめられないように、ひたすら回避しようとするのだ。

このような連中は、実は、「いじめ行為そのものが悪くない」と思っているのではなく、「自分のいじめ行為は悪くない（ 肯定したい ）が、自分はいじめられたくない」だけなのである。

ある程度、道理が分かっている加害者は、「いじめは悪くない」と定義してしまえば、自分が墓穴を掘ると、それとなく気付いているので、まず「いじめは悪くない」などとは口にしたりはしない。うっかり「いじめは悪くない」などと主張してしまうのは、よほど軽率ないじめっ子か、ほんとは何も分かってない第三者ぐらいなものだ。

大多数の人間が「いじめは悪い事」と考えて、加害者（ いじめっ子 ）にならないように努めているのは、すなわち、「自分がいじめられる」場合も、きちんと考慮しているからである。たいがいの人間は「自分もいじめられたい」とは思っていない。だったら、「いじめは悪い行為だ」と認めるしかないのだ。

しかし、そうであっても、「自分はいじめられたくないけど、自分は誰かをいじめたい」と思っている人間が、世の中には、うじゃうじゃ居るのである。そこで、彼らは、「いじめは悪くない」と言う代わりに、「自分のしているいじめは悪くない」と言う論法を、一生懸命に色々と捻り出すのだ。

例えば、「世の中には、いじめてもいい人間がいる。私がいじめている相手が、それだ」とか「いじめられたくなければ、やり返せばいい。やり返さない奴が、いじめられるのだ」とか「相手が先に、私をいじめたのだ。だから、私の方も、いじめ返しているのだ」など。

でも、悲しいかな、これらの理屈だって、どれ一つ、完璧な「自分はいじめられないで済む弁証」にはなっていないのである。相手が、同じ理屈を使って、いじめを仕掛けてきたら、結局は、自分の方がいじめられてしまうのだ。

要するに、「誰かをいじめよう」と言う発想を何とか正当化しようとする限りは、「自分がいじめられる」危険からも、絶対に逃れられはしないのである。

ゆえに、「いじめっ子の事だって、いじめてもいい」のだ。

いじめのパラドックス

- あなたはね、なぎささんや周りの人たちの優しさに甘えていただけだったのよ。なぎささんが抵抗しなかったから、いじめれたんじゃない。なぎささんが、優しく、あなたの意地悪行為を許してくれていたから、何のお咎めもなく、いじめを続ける事ができたのよ。あなたは、何も知らなかったのよ。赤ん坊と同じだわ。自分の事だけしか考えないで、他人から愛情や恵みを受け取ってばかりいる。そして、自分は誰にも何も与えようとしないのよ。全く、なんで、あなたみたいな人がこの世に生まれてしまったのかしら。（「如月未代の奇妙な体験」）

もっとも、実際のいじめの現場では、いじめっ子が一方的に被害者をいじめている状況の方が、圧倒的に多数を占めているようである。

その原因の一つとして、「いじめは悪くはない」が加害者にとっても諸刃の剣であるのと同様、「いじめは悪い。してはいけない」と言う主張もまた、被害者や第三者にとって、大きな足枷になってしまっているからなのだ。

「いじめは悪い。してはいけない」と言い切ってしまうと、当然ながら、いじめっ子や加害者のことも、いじめてはいけなくなってしまう。こちら（ 被害者や第三者 ）としては、少し言い返したり、拒絶しただけのつもりであったとしても、いじめっ子や加害者の方が、それを大げさに「いじめられた」と騒ぎ広めたりする。こんな態度を取られ続けてしまうと、「いじめは悪い」を心底から信じている被害者や第三者としては、どんどん心が折れてしまうのだ。

やがては、被害者や第三者の方が、先に、争い続けていく気持ちが萎えてしまって、抵抗するのもやめ、ついには、いじめっ子や加害者の一方的にやり放題の状態にと落ち着いてしまうのである。そうなる事によって、いじめっ子や加害者の方も、「自分もいじめられる」と言うジレンマとは向き合わなくても済むようになるのだ。

一般の人が、いじめっ子や加害者のことを強く責める事ができない原因としては、他にも、「いじめられている加害者の姿を見ても、可哀想に思えてきてしまう」事が挙げられる。「いじめは良くない」と言う概念を盲信しすぎる事によって、そんな感情移入まで心の中に芽生えてしまうのだ。結果的に、そのような人は、自分の手では、明白な悪人の事すらも責められなくなってしまうのである。

それどころか、「いじめっ子（ 悪い加害者 ）の事だって、いじめてはいけない」なんて事まで言い出す。当のいじめっ子に対しては、十分に「いじめてはいけない」とたしなめていないにも関わらずだ。

困った事に、この「いじめっ子（ 悪い加害者 ）の事だって、いじめてはいけない」を最高の美徳だと賞賛するような連中まで居るのであった。

そして、肝心のいじめっ子たちの方は、このように庇ってもらえたところで、実は、何も心には響いてはいない。そもそも、連中は、自分がいじめられないで済む事しか頭にないので、自分が庇ってもらえたところで「他人の事もいじめないようにしよう」と言う善意が芽生えるはずもないのだ。

しかも、他人を平気でいじめる事ができる点からも分かるように、彼らは、一般人よりも、はるかに感情移入の能力が鈍いのである。よって、「＜いじめっ子の事だって、いじめてはいけない＞と思える人」と同じ目線で考えるようになってくれるはずもないのだ。

つまりは、「いじめっ子の事だって、いじめてはいけない」なんて事を言うのは、その主張者自身の善人意識を自己満足させているだけで、実際のいじめの現場には、何の役にも立たないのである。むしろ、いじめっ子や加害者のことを、よけいに甘やかして、反省から遠のかせてしまうのだ。

全く、このような矛盾だらけの悪循環をクリアしない事には、いじめの解決なども望めるはずがないのである。

目には目を！

- 「なぜ、アタイばっかりが辛い目に会わなくちゃいけないんだよ。アタイだって、同じ事を誰かにしたっていいじゃないか」「バカ。そしたら、あなたに何かされた誰かも、同じ言い方をして、またあなたにお返しする事になるんじゃない」（「影の少女 rewrite」）

「いじめをしてはいけない」と言おうが、「いじめは悪ではない」と言おうが、結局は、いじめる側の人間が得をするのであれば、果たして、どんな理論展開のもとでならば、「自身はいじめ行為もしないし、被害者にもなりたくない一般人」の望みである「いじめられないで済む」は正当化できるのであろうか。

いや、実は、これは、必ずしも難しい命題でもなかったのだ。つまり、「いじめ行為」そのものに善悪を当てはめようとするから、うまい帰結にたどり着かなかったのであり、もっと率直に「他人をいじめない人間の事は、いじめてはいけない」で良かったのである。

より簡素な文章に直して言うと、「本人の主義を、そのまま、その人自身へと返す」のだ。まるで鏡のように。それを基本ルールと設定して、諸々のケースを考えるのである。

だから、「いじめをしない人の事はいじめてはいけない」し、「いじめをする人の事はいじめてもいい」事になる。同じように、あらゆる行為について、この法則を適応していく。すると、自然と、善良な人同士は互いに相手に親切になるし、他人を踏みにじる人間は、自ずと、その優しさの恩恵からは外されて、自分が損をするようになっていくのだ。損をしたくなければ、自分本位な人間も、他人に優しくならざるを得ない。この淘汰が繰り返される事によって、いずれは、社会全体が善良な人間ばかりになっていくのである。「別に、俺は、人から優しくされたいとは思わない」と反発する人もいるかもしれない。だったら、それでも構わないのだ。その人が、他人に優しくしなければ、他人だって、その人の事はいたわらなくなる。きちんとお望みの状態に落ち着いてくれるのだ。

ただし、優しくしないどころか、積極的に他人を傷つけるような事をすれば、今度は、シッペ返しを食らう事になる。皆が、その人の事を傷つけるようになるのだ。ひどいようにも感じるかもしれないが、ほんとは、ただの自業自得である。自分の態度が、そっくり、自分に跳ね返っているだけの話なのだ。他人から傷つけられるのが嫌ならば、その人自身も他人を傷つける行為をやめたらいい。

周囲の人々も、その人（ 加害者やいじめっ子 ）を傷つけるに当たって、良心の呵責を感じる事もないだろう。と言うのも、その人（ 加害者やいじめっ子 ）をどんなにいじめ

ようが、それは、その人をいじめている人の意思なのではなく、相手の態度を、そのまんま、本人へと返しているだけなのだから。

この私が提唱するルールにおいて否定されているのは、「いじめ行為」そのものではなく、前述した「自分のいじめ行為は肯定したいが、自分はいじめられたくない」と言う、各々の人間の心の内にある、ムシのいい考え方である。誰だって、自分に甘くなって、自分に有利な発想を選びたくなる気持ちが、少しはあるものなのかもしれないが、それこそが、いじめを無くせない一番の弊害なのだ。

いじめとは、実際には、「他人への悪意」と言うよりも、「自己中心的なエゴの心理の表れ」なのである。

全ては同格である

- この世には、悪よりも、タチが悪いものがあるわ！ それは、自分ばかりが正しいと思っている正義よ！（ コミ Po!版「ミーちゃん千一夜」）

「人を殴れば、自分も殴られる」「人の悪口を言えば、自分の悪口も言われる」「人をわざとシカトすれば、自分も皆から無視される」

こんな感じで、どんないじめ行為をしても、そっくり自分に返ってくるとする。自分が嫌な思いをしたくない人間であれば、こんな状況に置かれたら、さすがに「いじめ行為はやめよう」と考えそうなものだ。

ところが、こんな風に素直に連想しない加害者もいるのである。彼らは、今度は、次のように弁明をするのだ。

「俺のいじめている誰それは、特別な存在だから、いじめられるのだ」と。

例えば、「デブだから、いじめられる」とか「逆らわないから、いじめられる」とか「ノロマだから、いじめられる」とか。

なぜ、デブや無抵抗やノロマがいけないのか、全く根拠はないのだが、いじめる側にしてみれば、「その事で、この人（ いじめの被害者 ）は皆に迷惑をかけているから、その罰でいじめられている」と言う理屈になるらしい。

このように話を持っていくのが、いじめっ子（ 加害者 ）にとっては、一番、都合がいいのである。なぜなら、自分は（ 多分 ）デブでもノロマでもないからだ。よって、「デブでもノロマでもない自分はいじめられない」と言う結論になり、自分はいじめられないで済む事となるのである。

こんな考え方をしている人が、そうとう居るのではないかと思う。もっと広義な差別や虐待だって、この発想をベースにして成立している。「黒人は迫害していい」とか「我が子には体罰を与えていい」とか。

これらの「いじめられる要素」が自分に絶対に当てはまっていなければ、いじめる側にしてみれば、なおさら、こんな便利な言い草はないのだ。自分は、絶対にいじめられないで、一方的にいじめ行為ができるのである。あげくは、被害者の方へ「お前の方が悪いんだから、いじめられたくなければ、お前が自分の悪い部分を直せ」と言い放つのである。

だが、こんな認識にどっぷり浸かってしまっている奴らは、やっぱり、自己中心になってしまっていて、正しい道理が全く分からなくなってしまっているのだ。

と言うのも、もし「デブはいじめてもいい」と言う定義を確定していいのだったら、「いじめっ子はいじめていい」と言う定義も、全然、確定してしまっていい事になるからだ。

なぜなら、デブだろうが、いじめっ子だろうが、黒人だろうが、その他諸々だろうが、そうした特性そのものには、何の正否の属性も備わっていないからである。つまり、それらの特性自体は、全て、同格なのだ。これらの特性が、悪いだの正しいだのと言う話になるのは、あくまで、あとから、諸個人が自分の価値観をそれらに当てはめるからなのである。

だから、一方の人が「デブは見苦しい」と言ったとしても、他方では「デブの方が愛らしい」と言う意見が出たりもするのだ。どちらの意見も、その主張者の価値観に基づくならば、まごう事なき真実なのである。よって、「デブは見苦しいから、いじめていい」と断言するのも、その主張者の個人的意見に過ぎない事となり、この主張（「デブはいじめていい」）に普遍的正当性はいっさい無いのだ。

しかし、自分本位の正義に凝り固まり過ぎて、こんな簡単な理屈も理解できない人間が、世の中には、いっぱい居るのである。そんなんだから、そんな奴らに対する当て付けの意味で、私は「いじめっ子の事もいじめていい」と言いまくる事にしたのだ。

これで、すっかり、形勢は逆転である。これまで、自分は余裕で安全圏からいじめ行為をしていた連中は、完全に言い返せなくなった事だろう。でも、それが、この連中が今まで用いてきた御都合主義の詭弁でもあるのだ。

私は、連中（ 加害者 ）に、鏡のように同じものを返してやったに過ぎない。私個人の価値観で「いじめっ子は悪い奴だから、いじめてもいい」と主張している訳でもないのである。彼ら（ 加害者 ）は、自分の主義や態度によって、自身がいじめられたらいいのだ。

ここで、揚げ足をとるように「じゃあ、＜いじめっ子をいじめる人＞の事も、いじめてもいいのかい？」と指摘して、マウントを取りに来る人もいる事であろう。

いや、その意見は、確かに正しい。理屈上は、「いじめっ子をいじめる人」もいじめていい話になるのだ。

ただし、実際に「いじめっ子をいじめる人」もいじめてしまうと、さらに、その「＜いじめっ子をいじめる人＞をいじめた人」の事も、いじめていい事になってしまう。このいじめの連鎖が、えんえんと続く事になるのである。

果たして、わざわざ「＜いじめっ子をいじめる人＞の事も、いじめてやる」と言って、自分もいじめられる「いじめの輪」の中に入って、何の得があるのだろうか？ 普通に「自分はいじめられたくない人」なのであれば、「＜いじめっ子をいじめる人＞の事も、いじめていい」などと、余計な事は口にはしないのである。

子供たちのいじめ

- 私、子供の頃は、ずっと、いじめられっ子だったんです。小学生、中学生、高校に入ってからも。いつも、いじめられるのは、私ばかりで、本当に沢山いじめられました。だけど、ずっと我慢してたんです。私だけ辛い思いをすれば、それで済む事なんだ、と思って。でもね、高校を卒業して、いじめの生活から離れてみたら、私は、急に、ある事に気付いたんです。実は、私は、＜影子＞と言う一人の少女に対しては、ずっと残酷な事を強いらせ続けていたんだって。（「かげこのお部屋」）

いじめと聞けば、「＜被害者のことが憎くて（ 腹が立って ）、いじめる＞のがいじめだ」と解釈してしまっている人もいるかもしれないが、子供同士のいじめに関して言えば、このパターンに当てはまらないケースも多い。

すなわち、子供たちの間では、「遊んでた」つもりでも、実は「いじめになっている」事例も少なくないのである。むしろ、このような事例の方が多数派なのであり、深刻かもしれない。

なにぶん、加害者（ いじめっ子 ）たちは「楽しく遊んでいる」としか認識していないので、第三者から「いじめだ」といきなり指摘されても、すぐには認める事ができないのだ。その遊びの内容と言うのが、「被害者に見下したアダ名をつける」「被害者にとって不利な情報をばらまく」「被害者の持ち物を隠して、困らせる」「被害者に直接的な暴力を振るう」「表向きは借りたフリをしているが、実際には、被害者からお金や物品を取り上げる」などの、いじめどころか、立派な犯罪行為であったとしても。

そして、彼ら（ 加害者 ）は、「なぜ、いじめたのだ？」と詰問されたら、「被害者のことをイジっただけだ」「ただ遊んでただけだ」「ちょっとフザけすぎただけだ」と言うような事を答えるのである。連中は、本心から、そのように思っている訳なのだから、なお、タチが悪い。

彼らにしてみれば、「遊んでただけなのに、なんで、俺たちが悪者扱いされなくちゃいけないの？」となるのだ。

よって、注意されれば、彼ら（ 加害者 ）は、いったんは、いじめを止めるかもしれないが、心の底では正しく理解できていないので、しばらくすると、また同じいじめを再開してしまうのである。

「いじめは良くない」と言うモラルが分かっている大人や教師たちと比べたら、子供たち（ 特に、加害者 ）が抱いている「いじめ」の認識は、全く出発点が違うのだ。その隔

たりも気付かずに、大人の目線で、いじめを止めさせようとする限りは、子供たちも絶対に思い通りになるはずもないのである。

困った事に、こんな子供たち（ 加害者 ）の気持ちの方に寄り添ってしまう大人まで居る。そんな大人たちは、「自由に遊びたい子供たちの権利」も尊重するあまり、うっかり「まだ子供のやる事だから、大目に見てやれ」なんて事も言い出してしまうのだ。子供に寛容に接する事もまた、大切な善意である。しかし、この善意を過大に膨らませすぎると、結果として、いじめを放置せざるを得なくなってしまうのだ。

そもそも、「子供同士でいじめ合っている」から、うまく裁けないのだとも言える。子供（ 加害者 ）に自由に生きる権利があるのならば、被害者にだって、いじめられない権利があるのだ。「まだ子供だから」と言う善意で、加害者を責める事を否定している連中には、この発想が欠けている。このような人たち（ いじめっ子をきちんと責めない奴ら ）と言うのは、自分では、子供の権利を守っている善人のつもりでも、実際には、いじめっ子の盾になって、一緒に被害者の事をいじめている加害者の一角に過ぎないのだ。

子供が、いじめと遊びの区別がつかない原因もまた、彼ら（ 子供たち ）が自己中心的な認識しか持っていないからだと言える。加害者は、自分の「遊んでて楽しい」と言う基準でしか考える事ができず、いじめられた側の子供の気持ちに同調するだけの能力がないのだ。その為、「自分はこんなに楽しいのだから、相手（ いじめられている側 ）も楽しいはずだ」と言う、間違った捉え方をしてしまうのである。

とは言え、子供は、まだ精神が未熟で発達途上だから、そのような自己中心的な考え方をしてしまうのも、しごく当たり前の話なのだ。

問題なのは、その前提に対して、どのように対応していくかである。

前述したように「子供は未熟なんだから、いじめをしても、仕方ないのだ」と、そのまま放置して、何をしても許してしまうのではない。「未熟だからこそ、心が十分に成長するように、いじめをしない子になるように指導していく」と言うのが、本来、大人たちが子供（ 加害者 ）に行なわなくてはいけない、正しい教育やしつけなのだ。

そのへんの正論を、まるで分かってない大人や教師たちがいる。そんな奴らが、「まだ子供のやる事だから、大目に見てやれ」のような事をしゃあしゃあと言ってしまって、しかも、同じように、考えの浅い大人たちが、この意見に賛同して、ますます、いじめ対策の大きな邪魔立てとなっているのである。

メディアを悪者扱いする件

- いじめを止めさせる為に、押さえつける事ばかりが、指導なのでもない。子供たちの興味を広げ、目を別の方向へと向けさせ、いじめ離れさせる事もまた、上手ないじめ対策の手段となるのである。（「新編かげこの玉手箱」）

親や大人たちの中には、「子供がいじめをしたり、悪い行為に走るのは、テレビ番組とか漫画などの影響だ」と言う事にしたがっている人たちもいるようである。

よって、彼らは「有害なテレビや漫画などは子どもに見せるべきではない」と主張して、場合によっては、そうしたテレビ番組や漫画そのものの根絶さえ訴えるのだ。

しかし、その考えは、本当に当たっているのだろうか。

確かに、子供たちは、俗悪なテレビ番組や漫画などに出てくるフザけたセリフとか態度などを真似するし、それも、自ら真似したがる。でも、それって、本人（ 子供自身 ）が「それをやりたい」と言う意志のもとで行なっている行為なのだ。つまり、その子自身の心の中に元々あって、それが表面化した事による行動なのであり、その見本となったテレビや漫画が真の原因ではないのである。

それなのに、極端な考え方の親や大人たちは、「きっかけとしてのテレビや漫画さえ無ければ、子供も、ヘンな考え方を心に芽生えさせる事はなかった」と言う事にしたらしい。だからこそ、「有害なメディアそのものを追放してしまえば、子供たちも真っ直ぐな人間に育つ」と言う事にしたいらしいのだ。

いいや。そんな考え方は正しくはない。

有害なのは、メディアだけではないのである。実生活からだって、様々な悪い情報は入ってくるものなのだ。じかに接触している分、実生活からの悪影響の方が強いかもしれない。特に、いじめ行為なんかは、遊び友達や身近な大人などから学ぶケースが多いであろう。

と、そんな訳で、もっと強硬派の親とかになると、ついには「悪い子とは遊ばせない」なんて形にまで、教育方針を暴走させたりするのだ。そうやって、我が子を温室の中にと押し込めて、その視野をどんどん狭めていってしまうのである。実際には、そんな事をやりすぎる方が、我が子の成長には悪影響をもたらすだろうと思われるのに。

私は、むしろ、「俗悪に見えるテレビや漫画の方が、ほんとは、子供の情操教育には役立っているのではないか」とも考えているぐらいなのだ。なぜなら、鑑賞するだけのフィクションで先に接しておいた方が、現実で出くわす前の予行練習にもなるからであ

る。一発勝負の現実で、いきなり出くわして戸惑うよりは、ある程度、フィクションで慣らしておいた方が、子供自身にとっても、有利に実生活を進められるのだ。

それに、一見、俗悪そうなテレビ番組や漫画に見えても、実際は「悪い行為」を推奨しているようなものは一つもない。確かに、犯罪とか暴力とかを扱っている作品は沢山あるが、それらだって、きちんと鑑賞すれば「犯罪や暴力は悪い事だ」と言う前提のもとで、内容が構築されているのだ。仮に、犯罪者や暴力的な主人公が出てくる作品があったとしても、それらの主人公は「弱い者は助ける」とか「仲間を大切にする」など、良き人間として大切な本質だけは、しっかりと押さえているものなのである。

だから、「善良な心」を子供に学ばせる為には、意外と、漫画とかテレビとかは向いているのだ。本当に重要なのは、子供たちに、テレビ番組や漫画などの中の教訓を、正しい形で伝える事であろう。幼い子供の読解力だけでは限界があるようならば、周りの大人たちが理解のサポートをしてやる必要がある。子供たちが誤解した認識で学んでしまわないように、上手に誘導してあげなくてはいけないのだ。

つまり、「テレビや漫画などの情報を、上手に利用して、子供の心を育てていく」方が、ずっと優れた教育方法なのである。それなのに、「有害と思えるテレビや漫画を、何でもかんでも遠ざけてしまう」のは、単に子供の成長のチャンスを奪っているだけではなく、親が子供の心を育てる為の大事な作業を怠っているようにも感じられてしまうのである。

そう、我が子をダメな人間にしてしまう真の原因は、テレビや漫画なんかではなく、実は、「メディア（ 外部の情報 ）ばかりを悪者扱いする親自身」の方だったのかもしれないと言う事である。

いじめられるのは運が悪い？

- フィクションで、いじめっ子をやっつけたり、被害者が強くなったりする話は、それはそれで楽しい。とは言え、作り話（ フィクション ）でその種の話が提供されやすいのは、逆に考えると、「そうなって欲しい」という憧れや願望の為なのであり、むしろ、現実では、そういう理想的な展開が難しいと言う事を暗に示唆しているのだ。（「いじめられっ子の気持ち」）

さて、世間には、いじめの問題に関して、深く検証しないで、「いじめられるのは運が悪いからだ」とか「結果として、いじめられているのだから、被害者に何か原因があるのではないか？」みたいな事を主張している人たちもいる。

なるほど、自分はいじめの事で深刻に悩んでいない人間にしてみれば、そんな他人事の問題（ いじめ ）でよけいに煩わされたくない訳であり、こんな理屈で片付けてしまうのが、一番、気が楽なのであろう。

ところが、このような言い分は、ちっとも安全ではないのだ。なぜなら、もし、自分が被害者になろうものなら、いきなり、自身が切り捨てられてしまう立場になってしまうからである。

言っておくが、自然災害や病気などと違って、いじめや犯罪などの被害は、そこまで、明確に運だけに左右されているものでもないのだ。それら（ いじめや犯罪 ）は、運や偶然とは関係なく、むしろ、加害者側の悪意や指向性によって、その内容は強く影響され、いくらでも被害対象も特定化されるものなのである。

この事をもっと分かりやすく、具体的に説明すると、「＜いじめられるのは運が悪いからだ＞と言う投げやりな考え方が気に入らないから、この主張者の事をいじめてやれ」と言う話になったら、それだけでも、加害者側のいじめる理由は成立してしまう、と言う事なのだ。しかし、こんな理不尽な言い掛かりでいじめられたとしても、もし「いじめられるのは運が悪いからだ」と主張しているのであれば、自分がいじめられる事をそのまま受け入れないといけない事になる訳である。

「結果として、いじめられているのだから、被害者に何か原因があるのだ」と言った場合でも同じだ。このような発想だと、いじめられた時点で、もう問答無用で、被害者が悪い事になってしまう。

と言うか、こんな考え方をする奴らも居るからこそ、私も、思い切って「いじめっ子だけは、いじめてもいい」と言ってやる事にしたのだ。

いじめを「運が悪い」と言う結果論で済まそうとしている連中では、もし、加害者（いじめっ子）がいじめられてしまった場合、その加害者の事は、いっさい庇えなくなる事となる。実際、このテの考え方（「いじめられるのは運が悪いからだ」）の連中は、いじめられる加害者の事だって、まるで擁護はしないだろう。どうせ、この人たちにしてみれば、自分さえ渦中に巻き込まれなければ、弱い子がいじめられようが、いじめっ子がいじめられようが、どっちでもいいのだから。

残念ながら、「いじめられるのは運が悪いからだ」的な考え方に傾向している第三者（部外者）は、意外と多数派なのかもしれない。まあ、だからこそ、それだったら、このような人たちには、いちいち、いじめの問題には口を挟んでほしくないし、加害者に有利になるような事も適当に言い触らしたりしてほしくない訳で、その為にも、これらの主張者相手では、「いじめっ子をいじめる」と言って、対抗してやるのが、たいへん有効なのである。

資本主義の問題点

- 分からないの！ この子は、こんなに怯えて泣いているのよ！ その気持ちが、何故、理解できないのよ！ その冷たい心ゆえ、あなたたちは怪物なのよ！（「秘密美少女ドクガール」）

世の中には、そもそも、「いじめなんて、別に無くならなくてもいい」と本気で考えている人たちも少なくないらしくて、彼らにしてみれば、私のこれまでの主張の方が「よけいなお節介」のようにも感じられている事であろう。

彼らは、恐らくは、こんな風に考えている。

「いじめなんて、被害者自身の力で解決すればいいのだ。それが出来ない弱い奴がいじめられるのだ」と。だから、彼らは、いじめの被害も自己責任と見なして、「わざわざ、他人が被害者を助ける必要はない」と判断するのだ。

もちろん、このような主張も、別に間違っている訳ではない。しかし、一般的な温かい心を持つ人間の目から見たならば、このような考え方は、あまりにも「優しさ」がなさすぎるような気がする。

彼らは、なぜ、平然と、こんな冷たい考え方ができるのであろうか。きっと、彼ら個人が育った生活環境のせいばかりとも言い切れまい。

実は、現代の民主社会の根底にある資本主義の仕組みも、彼らをこんな考えに傾向させている理由のようにも思える。

資本主義とは、言わば、競争社会だ。戦って、勝ち上がったものほど、高次な幸せや権利を掴む事ができるのである。しかも、そこには、合理的科学万能思想も加わった為、かつての宗教的な「優しさ」とか「自己犠牲」などの精神が、ますます薄れてしまった。とにかく、自身が優秀な人材になって、自分が成功する事だけが正解だと見なされるようになったのである。

もっとも、戦略（戦い方）を何でもアリと言う事にしたら、最終的には、暴力や実力行使ばかりがものを言うようになってしまう。それでは社会全体の治安まで悪化してしまうので、国の方でも、一定のルール（法律）を作って、暴力や卑怯な手段を禁止して、それらを使う人間のことは摘発して、罰するようになった。マトモな人ならば、これで、素直に、卑怯な事はしなくなり、正攻法だけで競争社会を生きるようになるはずだろう。

ところが、ここで、エゴイスティックに資本主義思想に染まり過ぎた人間の場合は、「卑怯な事をやめよう」と思うのではなく、「バレなければ、卑怯な事もしていい」と言

う風に考え方を変えるのだ。こいつらは、あくまで、最終目的の「勝つ」事の達成を中心にしか、理屈を組み立てないのである。素直にルールに従おうなんて発想は、二の次なのだ。まずは、自分が得できる方法を優先して選ぶのである。

そう、これって、いじめっ子（ 加害者 ）が「バレなきゃ、いじめをする」とか「怒られなきゃ、いじめをする」のと、全く、発想が同じなのだ。

つまり、学校に、自己中心的ないじめっ子がはびこったり、そのような人間の横行をつい許してしまうのも、結局は、現実の大人たちの資本主義社会の悪い部分が、そのまま、投影されてしまっているからとも考えられるのである。大人の社会で、ルールすれすれで卑怯な事をしている人間が、何となく、のさばっているのならば、子供の世界でだって、「いじめは黙認せざるを得ない」と言う空気になってしまうのは、自然の成り行きなのだ。

とは言え、だからって、「卑怯者やいじめっ子の天下のままの状態が正しい」と言ってるのではない。

連中（ 卑怯者やいじめっ子 ）の主義が「勝つ事だけが正しい」なのであれば、それこそ、連中の事なんて、連中以上の力を使って、蹴散らして、やっつけてしまってもいいのである。連中も、自分の主義で、自分が踏みにじられるのだから、もう言い返す事もできまい。

そして、「連中以上の力」と言うのは、別に「自分一人で強くなる」だけが全てではないのである。複数の弱い人間が共闘したり、より強い人間を味方につけるとか、ルール違反に相当しない「強くなる方法」なんて、実はいっぱいあるのだ。よって、資本主義的な「勝った者が正しい」と言う発想のもとに立とうと、いじめっ子の事はいくらでも皆でやっつけてもいいし、「優しさ」の感情を大事にして、被害者を助けたとしても、全然、間違ってはいないのである。

つまり、資本主義的な世界観においても、より熟考するのならば、「自分の為だけに、ずる賢く立ち振る舞う」よりは、「卑怯な人間は駆逐して、正しい者同士で互いの利益を守って、協力し合う」方が、戦略的には上位に位置して、ずっと賢明な生き方なのだ。

実力主義のつもりで「いじめや犯罪被害は、被害者一人の力で解決すればいい」と言い切ってしまう方こそが、むしろ、ホントに自分の事しか考えておらず、視野が狭くなり過ぎているのだとも言えよう。

リンチ行為が正当な訳

- なに、おかしな事を言っているのよ。あなたは、いじめられる子の事が可哀相だとは思わなかったんでしょう？ それと同じよ。皆が、いじめっ子はいじめられても仕方がない、いじめっ子側にいじめられる原因がある、と考えるようになったから、いじめっ子をいじめるような事が平気で行なわれるようになったのよ！（「如月未代の奇妙な体験」）

「いじめの問題なんて、当事者たちで解決すればいいのだ。第三者が口を挟む問題ではない。ましてや、無関係の人間が加害者のことを袋叩きにする（ リンチにかける ）なんて、とんだ出過ぎた行為だ」

上述のような意見が、実は、とんだ矛盾をはらんでいる事を、もう少し解説する事にしよう。

まず、「被害者と加害者の問題は、この両者だけで解決すればいい」と言う定義を完全に認める事にする。

だが、そうなると、「いじめの加害者がネットリンチを受けた」と言うのであれば、それはもう「いじめの加害者」と「ネットリンチをしている連中」の間の問題という話にもなるのだ。「第三者は口を挟むな」と言うんだったら、それこそ、ネットリンチ行為を非難する事も「第三者が口を挟んでいる」事になるのであり、出過ぎた行為だと見なせてしまう訳である。

つまり、「いじめは当事者だけで処理すればいい」と言っておきながら、一方で、ネットリンチを否定するような発言をするのは、すでに、その言動自体が矛盾しており、破綻しているのだ。よって、このような主張そのものが、存在的に内部崩壊しているのである。もし「第三者が口を挟む行為（ ネットリンチ ）」がやってはいけない行為だと主張するのであれば、その主張者もネットリンチに口を挟んではいけない。ネットリンチと戦ってもいいのは、今リンチされている当事者だけとなるのだ。

そして、この意見（「いじめは当事者だけで対処すればいい」）には、もう一つ、この主張をした人にとっては不利な部分がある。

それは、このような意見を主張する人間のことも、いじめようが、ネットリンチにかけようが、いっさい構わない、と言う点だ。なぜなら、この意見の中には「いじめは良くない」と言うモラルは含まれていないからである。よって、この主張をした人間が理不尽にいじめられたとしても、勝手に、自分で抵抗すればいいだけの話なのだ。いじめ

る側は、この人物をいじめるに当たって、何の良心の呵責を感じる必要もない。この人物がいじめられて、自力で処理できなくて、ボロボロになったとしても、自分の主張に従ったまでの話なのであり、全くの自業自得なのだ。

果たして、「第三者は口を挟むな」と言っている連中は、そんな事態になってしまう事も想定して、しっかりと覚悟の上で、この意見を述べていたのであろうか？

そこで、「自分も巻き込まれたら堪らない！」って事で、上記の主張の中に、一般通念としての「いじめは良くない」と言う考え方も、きちんと加えたとする。

だが、そうなると、今度は「当事者たちだけで解決させればいい」なんて事が、言えなくなってくるのだ。なぜなら、「いじめは良くない。無くしていこう」が一般通念であるならば、それは皆で実行しなくてはいけない共通の課題と言う事になるからである。「いじめの問題は、第三者だって積極的に関与して、いじめを無くしていかなくてはいけない」と言う理屈になるのだ。

そんな次第で、「第三者は口を挟まない方がいい」なんて事は、ほんとは力説しない方がいいのである。自分に降りかかる災いを真に自力だけで解決できるような人でない限りは。

なぜ、加害者が許せないのか？

- 人間はプラスとマイナスの均衡を保つ事によって、精神状態が維持され続けています。加害者というのは、何とも、第三者にしてみますと、プラスばかりを貪った、ずるい奴に見えてしまうのであります。だから、周囲の人間は、罰やら制裁やらのマイナス的行為を、地に堕ちた加害者には押し付けたくなってしまうのでしょう。（「かげこの玉手箱」ホームページ ）

第三者が、自分には関係ない犯罪やいじめなどについて、怒りを感じて、積極的に加害者攻撃をする現象は、恐らく、加害者（ いじめっ子 ）にしてみれば、非合理的にすら感じられる事であろう。

彼ら（ 加害者 ）にしてみれば、第三者の事なんて、どうでもいいのである。大事なのは、自分の為に生きる事だ。よって、「いじめられたら、いじめられた奴（ 被害者 ）だけがやり返せばいいのだ」と言う発想になるのである。自分の直接の利害に繋がらない他の事件やいじめ等に干渉するのは全くの労力の無駄だし、そもそも、そんな考えが頭の中によぎりさえもしないのだ。まさに、自分中心なのである。

対して、一般的なマトモな人間が、加害者へと感情的に憎しみや怒りを抱いたりするのは、一つは、前にも記した「感情移入」の能力の為だ。可哀想な被害者の側に感情移入して、肩入れしてしまうのである。

そして、この「感情移入」の作用は、加害者に対しても、ひっくり返った形で働くのだ。

多くのマトモな人間は、いじめや犯罪などには手を染めていない。彼らは、そのように善良に生活する事が正しいものだと信じ込んでいるからだ。しかし、だからこそ、真っ当に生きている自分たちよりも、加害者（ いじめっ子や犯罪者 ）が、愉快に、ラクして、好き放題に生きていたりしたら、納得がいかないのである。

そうではないか？ 自分たちは、ルールとか正義とかを守り、頑張って、他人を傷つけないようにして、それどころか、時には、自分の方が身をひいて（ わざと不利になって）、他人には優しく接して生きているのである。それなのに、ルールや正義を無視して、他人を踏みにじって生きている人間（ 加害者 ）の方が幸せだったりしたら、自分たちが、ひたすら辛抱して、ルールや正義を守っている意味がなくなってしまうのである。

だから、皆は、加害者の存在が許せないのである。少なくとも、彼ら（ 加害者 ）には、幸せになってもらいたくないのだ。自分たちが手を下してでも、彼ら（ 加害者 ）は不幸になってもらいたいのである。

もはや、加害者と被害者の間だけの問題ではない。加害者と、それ以外のマトモに生きている人間の間の確執と言ってもいいのだ。
「そんなに加害者が羨ましいんだったら、お前らも加害者になればいいじゃないか」と、加害者の立場の人間は反論するかもしれない。
確かに、そのような考え方に流されて、自分も加害者に変わってしまう一般人も、決して居ない訳ではないのであろう。しかし、多くの一般人は、その方向には流されず、踏みとどまるものなのである。
なぜなら、そうやって、皆が加害者になってしまったら、自分が被害者になってしまう確率もグンと上がってしまうからだ。そのへんの常識的な発想ができるからこそ、ほとんどの人間は、犯罪者やいじめっ子にはならず、ルールやモラルに従って、多少は息苦しくても、善良に、慎ましく生きているのである。そして、それが文明人として、もっとも利口な生き方なのには違いないのだ。
この「全員がルールやモラルを守る」と言う前提が無視されたり、放棄されてしまうと、その社会は、たちまちグチャグチャになってしまい、あちこちで暴力や犯罪が溢れ、誰も安心して生きられなくなってしまう。そのような内乱状態の不幸な国は、現在でも、地球の各地に存在している。そんな恐怖の社会を望まないのであれば、やはり、社会の構成員の絶対数が「全員でルールやモラルを守る」側に所属していた方がいいのだ。
その結果として、少数派の「ルールやモラルを守らず、他人を傷つける人間」が皆から憎まれ、迫害される事になったとしても、それは「全体の平和や幸せ」に付随した、やむを得ぬ犠牲だとも見なせるのである。
ある有名人が「集団の意志だけで悪人をリンチする事を許したら、社会は無法地帯になってしまう。人を裁いてもいいのは法だけだ」と力説していた。いやいや、全く、事実が逆さまなのである。法や裁判だけでは悪人を裁き切れず、悪人たちが自由に放置されている方が、社会はずっと無法状態となるのだ。無法地帯にしたくないからこそ、集団の大きな正義の意志（ リンチ ）だって自然発生して、浄化（ 悪人の駆逐 ）の作用をもたらすものなのである。

いじめの連鎖

- 「あたしだって、本当は何もしたくないわ！ 皆と仲良くしたいのよ。でも、皆があたしに干渉してくるのよ！ あたしだって、本当ははね返したりなんかしたくないわ！」「復讐からは復讐しか生まれないんだ」「でも、復讐しなきゃ、何も変わらないじゃない。復讐し続けるしかないのよ」（「ゼカリヤ！」）

いじめに肯定的な人間と否定する人間がいる事で、結果的に、前者が後者ばかりをいじめてしまう。すなわち、特定の加害者が常に同じ被害者ばかりを一方的にいじめるような状態になる。つまり、そこには公平性がない。いじめ自体も良くないかもしれないが、加害者と被害者の間に露骨な格差（ 差別 ）ができてしまう事も、大きな問題の一つなのである。

以前、私がこの事を話すと、「加害者（ いじめっ子 ）だって、他の場所では辛い思いをしている（ 例えば、いじめられている ）被害者なのだ。加害者ばかりを非難するような発想の方が見苦しい」と言い返された事があった。

なるほど。確かに、そう言う見方もあるかもしれない。

だが、加害者が他の場所で何をされていようと、ひとまずは関係ないのである。「他の場所では被害者だったのだから、別の場所で加害者になっても仕方ないだろう」などと考えるのは、まさに、その加害者だけの視点に立った自己中心的な発想だ。他の場所でいじめられて悔しかったのであれば、違う場所で別の人間をいじめるのではなく、元の場所で自分をいじめた張本人にやり返すのが、スジと言うものであろう。

ところが、被害者にとって、「自分への加害者をやっつけて、いじめられない生活を取り戻す」と言うのは、なかなか難しいミッションなのだ。

なぜなら、被害者がやり返せば、次は加害者だって反撃してくるからである。被害者もいじめられたくないかもしれないが、加害者も悪者扱いされたままでは引き下がりたくはないのだ。こうして、いじめ合いがえんえんと続く事になり、結局は、何のいじめの解消にも向かわないのである。

まあ、双方がいじめ合いの虚しさを悟り、自己主張を引っ込められるようになれば、あるいは停戦もありうるのかも知れないが、どうも、加害者の方が攻撃をやめようとしない。連中（ 加害者 ）は、攻撃をやめた途端、自分の方が被害者になってしまうような事態が一番怖いのだ。よって、加害者は、いじめ抜かれた被害者側が無力化してしまい、完全な無抵抗になったとしても、まだ攻撃（ いじめ ）をやめようとしないものなのである。

さて、加害者と被害者の間に大きな格差がある事は理解していただけたのではないかと思うが、そんな訳だから、「加害者がいじめを止めた」だけでは、実際には「いじめが解決した事」にはならないのだ。

と言うのも、「加害者がいじめを止めた」だけでは、それまでの加害行為（ いじめ ）で受けた被害者側の被害損失がそのままの状態だからである。この場合、「いじめられなくなっただけでも、十分に有難いと思え」みたいな感じで、被害者が言いくるめられてしまうパターンも多いのだろうが、しかし、それでは、被害者側に遺恨が残ってしまい、次の別のトラブルも引き起こしてしまうのである。

被害者自身が、いじめの実質的被害や後遺症で苦しむ事もあるが、前述の話のように、この被害者が新たな加害者になったりもするのだ。自分一人が被害者になって、自分だけが損をするような結果を、バカ真面目に受け入れたくないからである。そこで、この被害者は、自分も加害者になって、誰かから、自分の被害損失の分を取り返そうとするようになるのだ。

そうやって、一つのいじめが解決したどころか、全く別の場所に、新たないじめを飛び火させてしまう。この事態の方が、ネットでの直接的な加害者リンチよりも、はるかに深刻な「いじめの連鎖」だ。かくて、いじめの中途半端な事後処理をしている限りは、世の中のいじめも拡散するばかりで、無くなるはずがないのである。

いじめの不完全な解決に納得できないのは、別に被害者だけではない。被害者に感情移入する第三者たちも、いじめ格差で得したように見える加害者の事は許せなくて、彼ら（ 加害者 ）へ激しい怒りを抱くようになるのだ。（ 前章の「なぜ、加害者が許せないのか？」を参照 ）

それでも、「やはり、ネットリンチは良くない」と反論する人もいるかも知れないが、だったら、まずは、加害者の方が償ったり、それ相応の罰を受けるべきである。そして、その事実をきちんと世間にも公表して、すでに自分（ 加害者 ）と被害者の間の格差は埋まっている事を皆へと伝えるべきだ。

加害者の多様性

- 皆の共通した意思は、要は、いじめなんてむごい事実を肯定したくなかった、と言う事だったのだ。そんな風に皆が善良すぎたがゆえに、現実のいじめに対処できなかったのであって、あまりにひどい話なのではあるが、僕すらも、しょせんはその中の一人には違いなかったのであった。（「影の少女 rewrite」）

とは言え、全ての加害者を、いっさい分け隔てなく、同じように罰しようとしたら、それはそれで、色々と好ましくない事態にもなるであろう。

いじめ行為を憎む人たちの中でも、特に厳しい考え方の持ち主は、「いじめを見ているだけの奴（ 傍観者 ）も、いじめっ子と同罪だ」とか言い放つものだ。

しかし、やっぱり、そこまで言い切ってしまうのは、どうかと思うのである。

なぜなら、この理屈を広げていくと、「電車内で人が殺される事件が起きたとしたら、いっしょに乗っていた部外者のお客も、全員、殺人犯と同罪だ」というロジックも通ってしまうからだ。「戦争が起きた時、その戦争を仕掛けてきた国の国民全員が戦犯だ」という言い方だって出来る。いじめの時に限って、「傍観者も加害者になる」なんて特別扱いの発想は有り得ないのだ。

いじめを憎む人間にしてみれば、被害者に味方してくれなかった人間の全てが悪にも見えてくるのかもしれない。だが、感情に押し流されずに、もっと冷静に、正確に状況を判断しない事には、せっかくの解決の糸口だって見失って、結局は、自分の得にもならないのである。

つまりは、いじめに関与している人々と言うのは、「加害者と被害者」と言う単純な二元論の図式ではないのだ。その関与の仕方によって、加害者の悪質さは違ってくるものなのである。だったら、彼らを断罪するにあたっても、その悪質さに沿って、罰し方や償わせ方の程度を変えるのが当然なのだ。

困った事に、加害者の方が、この理屈はよく心得ているようである。彼ら（ 加害者 ）は、自己中心的なので、自分が助かる事しか頭にない。だから、彼らは、自分を正当化する為のロジックなら、普通の人なんか以上に、はるかに、いくらでも次から次へと思い付く事ができるのだ。

ゆえに、彼ら（ 加害者 ）は、自分が悪者扱いされそうになると、とっさに「他の奴だって、いじめをしている。俺だけが悪いんじゃない」とか「いじめられた奴（ 被害者 ）の方が、先に悪い事をした」とか「俺もいじめられたから、俺も他人をいじめたんだ」みたいな事を、しゃあしゃあと、言い訳として口にするのである。

純粋に善意的で、なんとなく「全ての加害者が同じように悪い訳ではない。罰さなくてもいい加害者もいるのではないか？」と言う事を分かっている人ほど、こんな加害者の屁理屈にコロッと騙されてしまう。結果として、彼ら（ 善良すぎる人 ）は、うっかり、一番悪質な加害者の事まで許してしまうようにもなるのだ。

悪を憎む大衆心理の方も、こうした錯覚した認識が強いみたいである。彼らは、絶対に悪い奴を許さない。だから、誰が悪いかが特定されると、その悪い人物のことを、いっさい情け容赦なく、とことん叩き潰してしまうのである。大衆の正義観では、悪は完全に滅ぼされるしかない。そこには、救われる余地すらないのである。

そんな訳だから、悪い事をした奴は、ますます、自分が悪い事をしたと言う事実を、正直に自白できなくなるのだ。うっかり自分が悪かった事を認めてしまうと、あらゆる悪い事の責任を自分一人だけに押し付けられてしまって、破滅するまで許してもらえないからだ。そして、悪質な奴ほど、そのへんの正義のメカニズムに熟知しているので、なおさら悪あがきして、絶対に自分の非を認めようとしないものなのである。だから、よけいに被害者だけが辛い状態のままで放置されてしまったりもするし、最悪の場合は、冤罪まで起きて、悪人とは無関係の人間が破滅させられたりもするのだ。

ほんとに大切なのは、「悪い事をした人間でも、心から反省したり、償ったりすれば、きちんと許してあげる」と言う、贖罪の概念である。それによって、本来は良心を持っている加害者たちも、素直に自分の罪を認めやすくなるのだ。贖罪する気もないのは、良心のかけらもない、根っからの悪人だけである。いわば、贖罪を受け入れるか否かが、「一番悪い加害者」と「そうじゃない加害者」を見極める為の決め手にも使えるのだ。

つまり、贖罪を大いに活用する事で、被害者も、悪い事をしてしまった人間も、見合った形で、正しく、きちんと救われるようになり、願った通りに、社会全体の公平も保たれるようになるのである。

だが、今日の大衆の集団的正義には、どうも、この贖罪の認識が大きく欠けてしまっているようだ。

「悪い加害者」の選別

- いじめっ子だけを殺せば、いじめのない平和社会が築けるだろうと言うのは、実際にはありえない話でしょう。百歩譲って、本当に「いじめ遺伝子」が存在していたとしても、きっと、それは一部の人間だけに受け継がれているものではなく、恐らく、全人類に備わっているものではないかと思われるからです。いじめっ子を滅ぼしたければ、全人類を殺さないといけなくなり、結局は「人間が一人もいないから平和な世界」と言う顛末にもなるかもしれないのであります。（「エコライフ・番外＜いじめ編＞」解説 ）

繰り返し書かせていただくが、「被害者を助けなければ、傍観者だろうと加害者の一人だ」と言う極論で考えてしまうと、まず、とんでもない事になってしまう。

生まれてこの方、一度も加害者にならなかった人間なんて居ないだろうと推察されるからだ。少なくとも、幼い頃、まだ十分な良心を持ち合わせていなかった年齢の時には、多少のいじめっぽい事は、誰しもが、必ず経験した（ 参加した ）事があるはずだ。

あるいは、たとえ、そんな昔のことが思い出せなかったとしても、「傍観者も加害者の一人」と言われてしまうと、それこそ、誰だって抜け道は無くなってしまう。どんなに自身が善良に慎ましく生きていようと、他人のいじめ行為は何かしら目にする機会はあっただろうからだ。そんな他人のいじめ行為を、どれ一つ見逃さずに、いちいち介入して、きちんと解決に導くなんて、恐らくは、常人では不可能な話だとも言えるだろう。

このように「傍観者も全部、加害者」と言う定義にしてしまうと、きっと、地上のあらゆる人間が加害者だと言う事にもなってしまうのである。テレビに出ている人気者のタレントだって、爽やかなスポーツ選手だって、皆が皆、恐らくは「傍観者」ぐらいは、きっと、何度かは経験しているだろうと思われるのだ。

果たして、「傍観者も加害者だ」と息巻く極論のいじめ憎悪者は、こんな全くの善良そのものに見える有名人たちをも、公平に断罪して、厳しく非難できるのであろうか。

さらに、この発想を突き詰めてしまうと、加害者サイドが身を守る為の巧みな言い訳にも悪用されてしまうのだ。

すなわち、「お前たちは、悪い事（ いじめ ）をした事がないのかよ。少しでも悪い事をした事のある奴は、同じ穴のムジナなんだから、加害者（ いじめっ子 ）の事を責める資格はない！」なんて事を言われてしまうのである。そして、根っから純真で善良な人は、またしても、こんな詭弁にうっかりと引っ掛かってしまって、自分の事しか考えていない「悪い加害者」までもを、つい許さざるを得なくなってしまうのだ。

そもそも、上記の主張は、神の子イエス・キリストが口にして、大衆を黙らせた名言である。（「ヨハネ福音書」８章７節 ）しかし、この言葉は、慈愛と自己犠牲の人であるイエスが述べたからこそ、説得力と意味があるのであって、「自分が助かりたいだけの加害者」や「自分は何もやっていない部外者」なんかには、偉そうに、この美しい名言は口にしてほしくない次第なのである。

まあ、どうせ、今の世の中には、イエスの名言を語れるほどの完璧な聖人はいないのだ。皆、結局は、少しは悪い部分もあるのならば、だからこそ、全ての加害者を同等に扱うのではなく、加害者の種類やレベルによって、分別していく事も必要になってくるのである。こうして、私がたどり着いたのが、「いじめっ子カースト」なのだ。

それぞれの加害者（ いじめっ子 ）の行為や考え方を判断材料にして、「良い加害者」から「悪い加害者」まで、段階を作って、振り分けてゆく。

ここで、「悪い事をしたから＜加害者＞と呼ぶのであって、＜良い加害者＞なんて言い回しは変ではないか？」とツッコむ人もいるかもしれないが、あくまで、「悪い加害者」と対比した上での「良い加害者」だ。

どうしても、「傍観者も加害者の一人だ」と言う事にしたい人向けに、「＜何もしていない傍観者＞が、この＜良い加害者＞に相当する」と説明してみても良いだろう。もちろん、たとえ傍観者であっても、その態度がヒドければ、「悪い加害者」に分別される場合もある。つまり、「傍観者も加害者だ」と考えたい人の意見も、十分に取り込める余地はあるのだ。

「それこそ、聖人でもない貴様なんかに、加害者を独断で振り分ける資格があるのか？」と反感や不快感を抱いた人もいるかもしれない。

だが、私は、もともと、私自身の価値観で、加害者（ いじめっ子 ）を分類するつもりはないのだ。「目には目を！」の章で説明したように、加害者は、自分の行ないや考え方で、自分自身も判別させれば良いのである。まるで、鏡で反射させたように。

激しく他人をいじめる者は、自分も、激しく、いじめられればいい。一方で、まだ良心にも従っている加害者は、自身も他人の良心に救われる事になるだろう。こうして、第三者の価値観に委ねられなくても、おのずと、悪い加害者ほど、自然と、厳しい裁きを受けざるを得なくなるのだ。

加害者の事はいじめてもいい根拠

- エコちゃん。違うわ。やっぱり間違っているのは、あなたよ。「人間全てを平和で幸せにしなくちゃいけない」と言う考えだって、実際は、エコちゃんの個人的意見に過ぎないんじゃない？ 本当は、それを正しいと思えない人だって、いっぱい居るのよ。だから、エコちゃんの計画を強制的に人間全員に押し付けたりするのは、エコちゃんの唱える「他人を蝕んではいけない」と言うモットーに反しているわ。そう。エコちゃん自身が、今や、人類全てを虐待する、いじめっ子になっちゃってるのよ。(映画用「影の少女」)

前にも書いたが、これまで、いじめの問題がうまく裁けなかったのは、「いじめ」と言う行為自体の善悪を問おうとしたからなのであり、むしろ、「自分のいじめは認めてもらいたいが、自分はいじめられたくない」と言う諸個人の都合のいいネジレ認識をこそ解消すべきだったのだ。

よって、「他人を殴る人」については、その「他人を殴る人」自身も殴っていいのである。もし、その「他人を殴る人」が、ほんとは自分は殴られたくないのであれば、その「他人を殴る人」も自主的に「他人を殴る事を止めよう」と考えるようになっていくはずだろう。

ところが、必ずしも、それが全ての正解であるとも限らないのだ。

もし、この「他人を殴る人」が、「自分は殴られても平気だ」と考えているのであれば、きっと、この人は、自分が殴られたとしても、他人を殴るのを止めないかもしれないのである。例えば、ガサツで粗暴な人の場合は、そう言うケースだって、ありうるだろう。「じゃあ、本人のやり方を本人に返すのなんて、ちっとも意味ないじゃないか」と言われる人もいるかもしれない。

だが、そもそも、「他人の事も、自分の事も、殴られたって平気な人間」に、「殴ってはいけない」と言うマナーを持たせる事が不可能なのだ。なぜなら、この人は「殴る事」を嫌な事や悪い事だとは思っていないからである。

それこそ、そんな人物に、「殴っちゃいけない」と言うモラルを押し付ける事の方こそ、もしかしたら、「第三者の価値観を無理やり他人に強要する、自分本位な行為」だったとも言えたのかもしれないのである。

とは言え、そんな「他人を殴るのが平気な人」でも、もし、その人自身に「他人への優しさ」の気持ちがあれば、相手が嫌がっている状況を理解して、人を殴るのを止めるよ

うにもなるかもしれない。だったら、おのずと、「他人を殴るのが平気な人」も他人を殴らなくなるし、この人の事を他人も殴る事はないだろう。そこは、あくまで、「他人を殴る人」自身の人間性次第なのだ。

しかし、全く「他人への優しさ」もなく、自分が殴られるのも平気だし、他人の事も殴り続けるような奴もいる訳である。だったら、そんな奴のことは、気にしないで、皆（ 被害者自身でなくてもいい。第三者の誰でもいい ）でガンガン殴ってやればいいのだ。だって、その人自身は、殴られるのが平気なのだから、殴られたって気にならないだろうし、だから、殴る側も、その人を殴るに当たって、いちいち良心を痛めて、気の毒がる必要もないのである。

こうして、「誰かを殴りたい奴」が、「他人も自分も殴られたって平気な人間」の事だけを殴ってくれていたら、「自分も他人も殴られたくない人」は殴り合いには参加しなくても済む事になり、全くもって、皆が丸く収まると言うものだ。

そして、「他人の事は殴りたいけど、自分は殴られたくない人」などが居たとすれば、そんな自分に都合のいい態度だけは絶対に認められない訳だから、こんな「悪い加害者」の事は、「自業自得（ 自分の行為が自分に返ってくる ）の報いとして、いくらでも殴っても構わない」と言う話になるのである。

つまり、いかなるパターンであっても、「＜他人を殴る人＞の事は殴ってもいい」と言う結論に繋がってしまうのだ。よって、これを、もっと広義的な明文に置き変えると、「いじめっ子の事はいじめてもいい」になる訳である。

「やっぱり、そんな考え方は間違っていると思う」と言いたい人もいるかもしれないが、そのような意見を力説したい人は、まずは「いじめられても、絶対にやり返さない」を自分で実践すべきだ。そして、そんな人は、「自分のいじめは認めてもらいたいが、自分はいじめられたくない」と言う加害者に、さんざん、いじめられたら良い。つまり、そうなる事が「いじめっ子の事も、いじめてはいけない」と言う発想から導き出される帰結なのだ。

さらに、そのような生き方は、あくまで、その人自身の価値観なのであり、他人にまで同じ生き方を強要する資格は、その人には無いのである。

自分知らずのいじめっ子

- それなのに、今、自分の目の前をせわしく歩いている人々は、一体、どうしたものであろう。まるで、いじめは、自分と関係ない世界の話であるかのように振る舞っている。未代のようなマスコミ関係者がマイクを渡せば、「いじめはよくない」「学校が悪い」などとしゃあしゃあと述べたりする。本当は自分に向けられている問題なのにも関わらずだ。（「顔のない行進」）

「＜いじめっ子は、いじめてもいい＞などと聞かされたら、いじめっ子は激しいショックを受けて、心が深く傷ついて、ちょっと可哀想じゃないか」と言う人もいるかもしれない。

ところが、そうでもないのだ。「いじめっ子は、いじめてもいい」と言う主張と、そこから展開された「いじめっ子カースト」の概念によって、不当に心を苦しめられてしまう人間などは、理屈上は存在しないのである。

なぜなら、「悪い加害者」ほど、自分がいじめっ子だと言う自覚がないからだ。よって、「いじめっ子は、いじめてもいい」と聞かされても、それが自分に向けられた言葉だとは、ちっとも気が付かないのである。それじゃあ、心が傷付くはずもないのである。

しかも、こんな「悪い加害者」ほど、第三者から「お前は、いじめっ子だ」と指摘されても、絶対に認めようとせず、激しく拒絶するものなのである。こいつらは、そこまで自分本位に凝り固まっているものなのである。

よって、本物の「悪い加害者」は、「いじめっ子カースト」を気にもしなければ、反感を持つ事もない。

彼らは、自分個人を名指しで攻撃された時のみ、猛烈に反応し、必死で反発してくる。彼らにとって大切なのは、どこまでも、自分の事だけなのだ。

彼ら（ 悪い加害者 ）は、「いじめっ子」と言う不特定多数の概念を非難する運動に対しては、全く関心がなく、何のアクションも起こしはしない。彼らにしてみれば、自分以外のいじめっ子がヒドい目にあったとしても、そんなのは知ったこっちゃないのだ。彼らは、自分（ と、一部の大事な身内 ）さえ安全ならば、他の連中の事など、どうなろうと構わないのである。とにかく、自分の事しか念頭にない。それが、真の「悪い加害者」と言うものなのである。

この「悪い加害者」に分類される人間は、自分が責められそうになると、すぐ暴力を振るって、力づくで罪逃れをしようとする傾向があるようだ。いや、責められていなく

ても、普段から攻撃的な態度をとっていて、トガって、自分が責められないような臨戦態勢を取っている人も少なくない。

つまり、「これこそが彼ら（ 加害者 ）の自己中心の証しなのだ」と主張する人もいる事であろう。彼らは「自分の感情を抑える事が出来ない」のだ。それで、不快を感じると、すぐに手が出てしまうのである。

しかし、本当は、必ずしもそうとも言い切れない。もっと狡猾な「悪い加害者」の場合だと、この「威圧的になる」かどうかさえも、自分で計算している場合があるのだ。実際、ずる賢い加害者ほど、いつでも乱暴な訳ではなく、自分が反撃されそうな状況下では、暴れたり、ムチャな行動に出るのを、きちんと控えているものなのである。

そして、自分が勝てそうな相手の前でのみ、攻撃的な態度になって、自分の要求ばかりを無理やり押し通してしまおうとするのだ。言ってしまえば、明らかに、一部の人間（ 被害者や傍観者 ）をナメているのである。

こんな奴を「優しさ」で説得しようとしても無駄だ。こいつら（ 悪い加害者 ）は、他人の「優しさ」すらも、自分の為にしか利用しない。こいつらは、相手に「優しさ」を返そうとする事もなく、ただ一方的に他人の善意を貪り、あげくの果ては「勝手に優しくしてくれるヤツの方が、お人好しのバカなのさ」とも、うそぶくものなのである。

まるで、暴力をチラつかせて、恐喝してくるチンピラと変わらないのだ。

ここまで心の腐れ切ったような人間に対しては、もはや、善意的な対処方法だけで改心させるのは難しい。やはり、「いじめっ子の事は、いじめてもいい」と言う「目には目を」のロジックで対抗するしかないのである。

「良い加害者」を救済しよう

- あの者たちは、地獄に行かされるのではなく、極楽では幸せになれないから地獄に行くしか無いのです。その事を間違えてはいけません。（「蜘蛛の糸」）

「でも、本当に＜いじめっ子は、いじめてもいい＞と言われて、傷つく加害者はいないのだろうか？ いたら、どうするつもりだ？」と、なおも、私の主張に食い付いてくる人もいるかもしれない。

しかし、私の理屈に照らし合わせれば、「＜いじめっ子は、いじめてもいい＞と言われて、傷つく人」と言うのは、少なくとも「悪い加害者」ではないのだ。「良い加害者」とまで言い切れるかどうかは、それぞれのケースによるが、最低でも「悪い加害者とは違って、まだ更生する見込みはある」と言う話になるのである。

なぜなら、「いじめっ子は、いじめてもいい」と言う言葉に敏感になるのは、自分がいじめっ子である事に気付いていて、さらには、いじめっ子である事に多少とも後ろめたさを感じていて、なおかつ「今の状態を変えたい」と言う気持ちに移行する可能性だって持っている、と言う事になるからだ。

つまり、まずは、本人が「自分はいじめをしている」と言う自覚を抱かない限りは、何も始まらないのである。そこから、いじめと袂を別つ「良い加害者」の道を進んでいくか、それとも、そのまま、いじめを止めずに、「悪い加害者」で居続けるかは、まさに、自身で選ばなくてはいけない問題なのだ。

「良い加害者」になるのであれば、自然と「いじめっ子は、いじめてもいい」と言うスローガンに対しても、心が痛まなくなるであろう。だって、もう、その人（ 良い加害者 ）は、いじめっ子を憎む側の人間なのだから。「いじめっ子は、いじめてもいい」と聞けば、むしろ、心地よく同感できるはずだ。

一方、「良い加害者」になろうともせず、現状の「加害者」のままで留まり続けようとするのならば、それは「悪い加害者」と大して変わらないのだ。そんな奴は、「いじめっ子は、いじめてもいい」の名目のもとで、様々な不利な待遇を受け、常に心を悩まされる（ 心が傷つき続ける ）事となったとしても、それは自業自得なのだ。

すなわち、これは究極の二択なのだ。「良い加害者になって、＜いじめっ子は、いじめてもいい＞を気にしない人間になる」か、「良い加害者になろうともせず、＜いじめっ子は、いじめてもいい＞に怯えて、ずっと心を傷つけられ続ける」かは、当人の判断で決めていいのである。

誤った選択（良い加害者への道を歩もうとしない）をした人間が、それに見合ったシッペ返しを受けるのは、ただの自然の成り行きだ。よって、そんな加害者（良い加害者への道を拒んだ加害者）が、「いじめっ子は、いじめてもいい」と言われて、心が痛んだとしても、それは自分で決めた結末であり、つまり、自分の意思なのだから、決して不当なのではなく、胸を張って「私の心が傷ついた」などと他人に文句を言える立場でもないのである。

正しい償い方

- あなたたち、なぜそこまで悩んでいるのに、反省しようとしないのですか。償いさえすれば、自由になれると言うのに。（「ゼカリヤ！」）

では、「良い加害者になる」、もしくは「更生する」には、どのような行動を取ればいいのだろうか？

もちろん、「（ 他人に危害を加えた事を ）心から反省する」のは、基本中の基本で、当たり前の第一ステップだ。

しかし、「心の中で反省した」だけでは、その思いが被害者や周囲の人間には伝わらないだろう。他人からは、きっと、まだ「悪い加害者」だと思われたままだ。

よって、「反省している」事を、目に見える態度で表現する必要がある。まずは「被害者や社会全体へ謝罪する」のが、初歩の更生の意思表示としては妥当な行動だと言えるだろう。

もっとも、「謝罪」は、実に簡単な行為でもあるのだ。ゆえに、心がこもってなくても、謝るだけなら「悪い加害者」にだって出来る。その為、謝罪しただけでは、「心の底から反省している事」が、うまく相手に分かってもらえない場合もあるのだ。それまでの態度が悪質すぎたりしたら、尚さらである。

だから、今度は「反省している気持ち」を「償う」と言う行為に変換していく必要があるのだ。

一般には、「罰を受ける」事も償いだと考えられているようだが、この発想は、あまり正確ではない。罰とは、最後の手段だ。「自分で償おうとしない」、または「罪が大きすぎて、自力の償いだけでは、償いきれない」場合に、はじめて、罰も頼るべきなのだ。

最初っから、罰を用いるのは、私はあまりお勧めしない。まずは、加害者自身の意志で償わせるべきである。そうしないから、「罰を受ければ、自分の罪は全て許される」などと言うラクな発想にと走って、自身の心では反省すらせずに、更生も中途半端になって、また加害者に逆戻りしてしまうような人間も出てきてしまうのだ。

さて、話を戻すが、償い方にも、いろいろな形や方法がある。

「自分の被害者のことは、もう二度と傷つけない」のは、優先して実行しないといけない項目だ。これを実践できないで、結局、「悪い加害者」のままの「自称・更生した加害者」がいっぱい居るのである。

さらには、これまで被害者に与えた損失を回復してやる事も、大事な償いとなるだろう。形のない損失（ 心の傷など ）もあるので、償い方が難しく、例えば、お金（ 賠償金

）で代用したりもするのだが、なんでも「お金で解決してしまえばいい」と言う態度は、あまり感心しない。むしろ、優しい態度で被害者を守ったり、喜ばせてあげたりする方が、望ましい償いになったりもするのだ。

もっともっと、償いの範囲を大きく広げていくのも良いだろう。

何よりも、被害者にじかに償いができないケースだってある。被害者がすでに死亡している場合に限らず、「被害者が、恐怖心が消えてないので、まだ加害者とは会いたくない」と考えている事だって有るのだ。それなのに、加害者が無理に被害者に償おうとするのは、加害者側の一方的な押し付けにしかならず、償いどころか、被害者をさらに苦しめてしまう事にもなる。

よって、そんな時は、被害者に直接的に償う代わりに、「社会」へと奉仕するのもアリだと思うのだ。結局は、誰を相手に「優しさ」を提供しようと、それは不特定多数の皆の幸せや喜びへと繋がるのである。自分の為ばかりに生きるのではなく、他人へと自分の力（ 才能や財力 ）を無償で提供するのは、おおむね、好ましい行為なのだ。いくら実行したって、悪い話ではないのである。

ただし、順位はあるだろう。まずは、「自分のいじめ行為の被害者」に償うべきだ。それが可能であるにも関わらず、それは実行せず、社会への奉仕ばかりを行なっていたのでは、そのような人は、どんなに立派な社会貢献をしていたとしても、本当に償いをしているとは言えないであろう。「良い加害者」と言うよりは「偽善者」だ。

まあ、大体、「良い加害者」の生き方とは、こんな感じである。

でも、私は「このように実行せよ」と、皆に命令する気は一切ない。そう、全ては、自身で決める話なのだ。もちろん、こんな「良い加害者」を全員が目指してくれれば好ましいとは思うのだが、それは、あくまで私の意見である。私には、それを他人に強要する権利はない。

あとの判断は、これを読んだ人たちにと、何もかもが委ねられている訳である。

「いじめっ子カースト」の極意

- どう考えても、いじめる側の人間の方がイヤな奴で、悪いような気がするが、このイヤな人間に積極的に干渉したり、挑発とかはしたくないと思っているのは、実は、皆の共通意識なのだ。（「新編かげこの玉手箱」）

「いじめっ子の事は、いじめてもいい」と言う認識が広がる事で、いじめっ子（ 加害者 ）になる事を敬遠する人が続出し、結果として、世界中から、いじめの被害者が激減すれば、どれだけ良いだろう、と思う。

しかし、実際には、そう上手くもいかないのだろう。

そもそも、皆が、「いじめっ子の事は、いじめてもいい」と言う発想を、素朴に受け入れたりはしないのだ。

「そんな事（ いじめっ子は、いじめてもいい ）を言ったら、いじめっ子が可哀想」と言う良心（ 善意 ）の作用が働く為以外にも、単純に「いじめっ子を敵に回したくない」と言う不安もあるからだ。皆は、本音では、やっぱり、いじめっ子（ 加害者 ）の事が怖いのである。皆も、出来るだけ、加害者とは関わり合いたくないのだ。にも関わらず、「いじめっ子は、いじめてもいい」などと言い触らしたら、露骨にいじめっ子に憎まれて、攻撃されてしまうかもしれない。まさに、ヤブヘビと言うヤツで、自発的に、そんな行動は取りたくないのだ。

ところが、そんな風に考えるのもまた、皆の思い込みに過ぎない部分があるのだ。実際は、「いじめっ子は、いじめてもいい」と口にしたところで、そこまで、加害者に目をつけられてしまう訳でもないのである。

と言うのも、私は、もう 20 年以上、ネットでいじめ問題について語っていて、「いじめる方が悪い」と断言し続けているのだが、今まで、一度も、真の「いじめっ子」からは嫌がらせや攻撃を受けた事はないのである。私のいじめ系サイトにちょっかいを掛けてきたのは、むしろ、「いじめ行為は悪い」と言う定義を打破する事によって、私からマウントを取ろうとする＜目立ちたがり屋＞ばかりだった。「いじめっ子は、いじめてもいい」と言う主張そのものに、ガチで怒っている連中ではなかったのである。

前にも書いたが、本物のいじめっ子は、「いじめっ子」と言う概念そのものには、何の肩入れもしていないのだ。だから、他人が、いじめっ子の事をどんなに悪く言おうと、全く無関心なのである。そう、自分自身がいじめに結び付けられて、直接、非難されるような状況にならない限りは、彼らは、自分からは乗り出してこないのだ。

もっと突っ込んだ事を言わせていただくと、いじめっ子はいじめっ子で、「＜いじめっ子は、いじめてもいい＞と堂々と言えるような人間」とは関わりたくないものなのである。そんな人（ いじめっ子の事をはっきりと悪いと言い切る人 ）を刺激する事で、自分がストレートに責められるような事態になる事が嫌だからだ。ゆえに、連中（ いじめっ子 ）も、私のような人間には本気で近づこうとはしないし、よって、もし、現時点で、すぐそばにいじめっ子（ 加害者 ）がいない環境ならば、積極的に「いじめっ子なんて、いじめていい」と言っている人の方が、温厚に中立的立場でいる人よりも、加害者（ いじめっ子 ）から危害を加えられる可能性は低いかもしれない訳である。

とは言え、私の発表した「いじめっ子の笑い話」などで、そこに何が書かれているのか、内容が気になった人も、けっこう居た事であろう。彼らは、つい、私の書いた文面に、目を通してしまったはずだ。その結果として、いじめ憎悪派の人は大いに賛同し、いじめに反対する気持ちがより強固になってくれたに違いない。逆に、いじめっ子側の人間は、自分が責められているみたいで、何とも嫌な気分になったであろう。

でも、それが私の狙いでもあったのだ。ちょっとでも、私の文面に興味を抱いた加害者であれば、まだまだ「良い加害者」になる片鱗が見出せるからである。だが、その人が「良い加害者」になれないのであれば、その分、心に嫌なシコリを残す事になるだろうから、それはそれで、その人に相応しい報いにもなるのだ。

こうやって、少しずつでも、いじめ憎悪派の人にも、「良い加害者」の予備軍の人にも、じわじわと、私の着想が浸透していってくれたら良いと思う。いつかは、それが大きな流れにだって変わるかもしれない。

その為にも、私は「いじめっ子カースト」と言う、インパクトのあるネーミングを採用したのだ。

この競争社会に生きている人々は、何かと、順位をつけるのが好きである。そして、ちょっとでも、自分は順位の上の方に立ちたいと切望するものなのだ。

「いじめっ子カースト」の概念において、私は、加害者（ いじめっ子 ）たちに競争をさせる。いじめっ子に「良い加害者」「悪い加害者」と言う露骨な差をつける事で、皆に「（ 下層ランクの ）悪い加害者にはなりたくない」と言う気持ちを抱かせて、争わせるのだ。すると、皆は、張り合って、「良い加害者」の優等生になろうと努力しだすので、最終的には、悪質ないじめ自体も減っていく事になるのである。

まるで、受験戦争によって、全国の子供たちが一同に勉強して、全体の学力の底上げをも導く現象に似ているとも言えるだろう。

「いじめっ子カースト」は、単なる「いじめっ子への見下し」などではなく、そこまで先の事まで考えていたアイディアだったのだ。

現代人の生き方

- その事を知ってから、私は、今でも、その子をいじめている夢を見るの。やってはいけない、やめなくちゃ、とは思っているんだけど、夢の中では手を止める事ができないの。目覚めた時、私はボロボロに泣いているわ。もう二十年も昔の事なのに、今でも、私は、その事で苦しんでいるのよ。きっと、これからだって。一人の人間の人生をズタズタにして、未来を奪っちゃったんだもの。その気が遠くなりそうなほどの罪深さに責めさいなまされる気持ち、あなたには理解できる？（「かげこのお部屋」）

実際のところは、「弱い者を虐げるのはヤメて、誰にでも親切にせよ」と言う教えは、宗教の信条だったり、共同体の方針だったりして、古い時代から、人々には推奨されてきた発想だったのである。

にも関わらず、現代に至っても、この教えは、あまり浸透しきってはいないようだ。

それもそのはずである。しょせん、人間なんて生き物は、十分なメリットやリスクなどが無ければ、積極的には行動しないものなのだ。

なるほど、宗教の熱心な信者や聖職者ならば、この教えを真剣に守っている人もいる事であろう。しかし、それだって、宗教の奥義として「この教えを守れば、死後の安らぎを保証される」と言う約束があるからこそなのだ。結局は、究極のメリットがあるからこそ、守る気になれるのである。

ところが、聖職者からは程遠い庶民では、こんな崇高すぎる概念は理解しきれない。だから、それは満足のいく報酬には感じられないし、よって、必死に守ろうともしないのである。彼ら（ 一般人 ）にしてみれば、死後の幸せよりも、今生きている生活をどう過ごしていくかの方がずっと大事なのだ。

「メリットの効果が無いのであれば、今度は、デメリットを与えて、人々を教えに従わせてやろう」と言う事になる。中世の頃までは、悪い事をした人間への懲罰が本当に厳しかった。軽い罪であっても、死刑にされたり、肉刑を受けさせられたのだ。

それなのに、昔は、悪どい犯罪に身を委ねてしまう人間が、なかなか減らなかったようである。と言うのも、つい近年まで、世界中の庶民の生活は本当に貧しくて、たとえ殺される事になろうとも、それだけの危険を冒さないと、その日々を生きられない人もいっぱい居たからである。

現在では、庶民の生活水準も、かなり改善されている。日本のような文明国ならば、犯罪者になるしか生活手段のないような人間も、ほとんど居なくなった。ところが、平気で犯罪者になる人間は、相変わらず、決して少なくもないのである。

これは、「資本主義の問題点」の章でも触れたが、暮らしが豊かになった代わりに、科学万能主義や合理主義などが幅を利かすようになり、宗教的な精神思想が薄れてしまったからである。

しかも、資本主義とともに台頭した民主主義が、人権や差別否定などを強調しすぎた事で、悪人たちへの厳しい罰則までもが弱まってしまった。つまり、「悪い加害者」も、自身の行為に見合っただけの罰を受けないで済むようになったのである。

これじゃあ、「悪い加害者」だって、犯罪がもたらす利益と罰則を天秤にかけてみた時、罰則の方を避けて、犯罪（ いじめ行為 ）を止めようと言う気持ちにもなるはずがないのだ。「犯罪をしないと、自分が生きていけない」と言う訳でもないのに。

もっとも、だからって、私は、法規制をあらためて、厳罰化を求めているのでもない。

むしろ、「物質的に罰を与える事よりも、精神的に諸個人に＜他人を食い物にしてはいけない＞と言う意志を持たせた方がいいだろう」と考えているのである。

「＜悪い加害者＞の選別」の章でも触れたが、あらゆる人間が、多少なりとも、「いじめ行為」には関与しているものなのだ。だったら、いじめの問題は、一部の加害者にだけ押し付けるのではなく、皆が、自分の問題として考えていった方がいいのである。

しかし、「良い加害者」寄りの人々は、そこまで、いじめの問題で、自分も悩みたいとは思っていないものだろう。そして、事実、今の社会だったら、ある程度のいじめの加害行為だったら、真剣に取り組まなくても、うやむやにしたまま、やり過ごしてしまう事もできるのだ。メリットも罰則もない以上、ほとんどの人間にしてみれば、そうやって、いじめの事はスルーして、思い浮かべないようにするのが、自分にとっても一番ラクなのである。

こうやって、自分のいじめ行為に触れさせない為にも、他人のいじめ行為にも、とやかく口を挟んだりはしないようになる。すると、いっぱい、いじめ行為をしている人の方が、より得をするようになりだす。結果として、被害者ばかりが不利な社会になるのである。

このような理不尽な現状にと、一石を投じようと思って、私がまとめたアイディアこそが「いじめっ子カースト」なのだ。

「いじめっ子カースト」の標的

- 目には目を、歯には歯を。あなたの罪に従って、裁かれなさい！（「ゼカリヤ！」）

「でも、＜いじめっ子カースト＞なんてものが広まったら、このロジックを悪用して、逆に、いじめ行為があちこちに増加してしまうのではないか？」と懸念する人もいるだろう。

確かに、「いじめっ子カースト」が流行ったら、それに便乗した他者攻撃行為も増えるかもしれない。

しかし、現状だって、十分に「いじめ」は溢れ返っているのだ。この既存のいじめは放置しておいて、「いじめっ子カースト」だけを禁止するのも、なんとも、不公平で、おかしな話である。要するに、「＜いじめっ子カースト＞は駄目」と言う主張は、とんだ片手落ちで、不完全な態度なのである。そして、既存のいじめも封じ込めない人たちなんかに、「いじめっ子カースト」だって抑え込めるはずもないのだ。

さらに言わせてもらうと、自分本位な「悪い加害者」は、そもそも、「いじめっ子カースト」なんて後ろ盾が有ろうが無かろうか、もう、すでに、いじめ行為や他者攻撃は行なっているのである。むしろ、「いじめっ子カースト」の導入によって増加する新規の他者攻撃者とは、「いじめっ子カースト」の理念に賛同して、いじめっ子を憎悪する「正義の側の人間」ばかりと考えても良いのだ。

「この＜自分が正義だと思い込んでいる人たち＞が危ないんじゃないか？ 自分は＜正義＞のつもりでも、結局は、＜自分の為の正義＞を振りかざす人も多いのではないか？」と指摘する人もいるかもしれない。

もちろん、この点だって、実は、私は十分に考え尽くしている。「いじめっ子カースト」が解放するものは、あらゆる有象無象の正義などではなく、ほんとは、「＜いじめ＞はしてはいけない」と言うロジックによって押さえつけられてきた「＜いじめ＞をやっつけよう」と言う勢力なのだ。

なるほど、「いじめっ子カースト」とともに、「＜いじめ＞をやっつけようと言う正義」以外も解き放たれるかもしれないが、それら（ 自分本位な正義 ）は、結局は「いじめっ子カースト」の本質とは合致していないので、やがては、元々あった「悪い加害者のいじめ」と一緒に、「いじめっ子カースト」によって駆除される運命にあるのだ。

前にも書いた通りだ。「いじめっ子カースト」の根本発想では、「他人をいじめる人は、自分もいじめられる」なのである。自分本位な正義（ 自分のいじめ行為は肯定したいが、

自分はいじめられたくない ）の持ち主では、とてもじゃないが、「いじめっ子カースト」の中には混ざれそうにないのだ。（「全ては同格である」の章を参照 ）

どっちみち、「いじめっ子カースト」と関係なく、既存のいじめは存在している。「いじめっ子カースト」は、それらの既存のいじめのみを攻撃して、封じ込める為の強力な武器である。それどころか、「いじめっ子カースト」の内部から発生する「自分本位な正義」も取り締まってしまう機能も備えている。つまり、もっとも「善意の側の人」に寄り添った攻撃の思想なのだ。

現状の社会では、いじめっ子（ 加害者 ）ばかりが得する環境になってしまった訳だが、その原因は「今の世の中の仕組みでは、＜いじめをしない人たち＞より、＜いじめをする人たち＞の方が有利だったから」だけとも言えない。実際は、「＜いじめをしていい＞と考える人をやっつける第三の勢力」の量が少ない事も理由の一つなのだ。すなわち、いじめをする人間を無くしたければ、その天敵の存在も必要となるのだ。

私は、被害者を加害者（ いじめっ子 ）の危害から守ったり、逃がす一方で、他方では、「いじめっ子カースト」によって、加害者の数も削っていこう、と考えている訳である。

いじめっ子の笑い話　～かげこの玉手箱３～

著　　anurito

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社